昭和60年12月1日号（毎月2回1日、15日発行）第28巻・第23号　通巻644号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
23
12.1.



特集 ソ連における人権

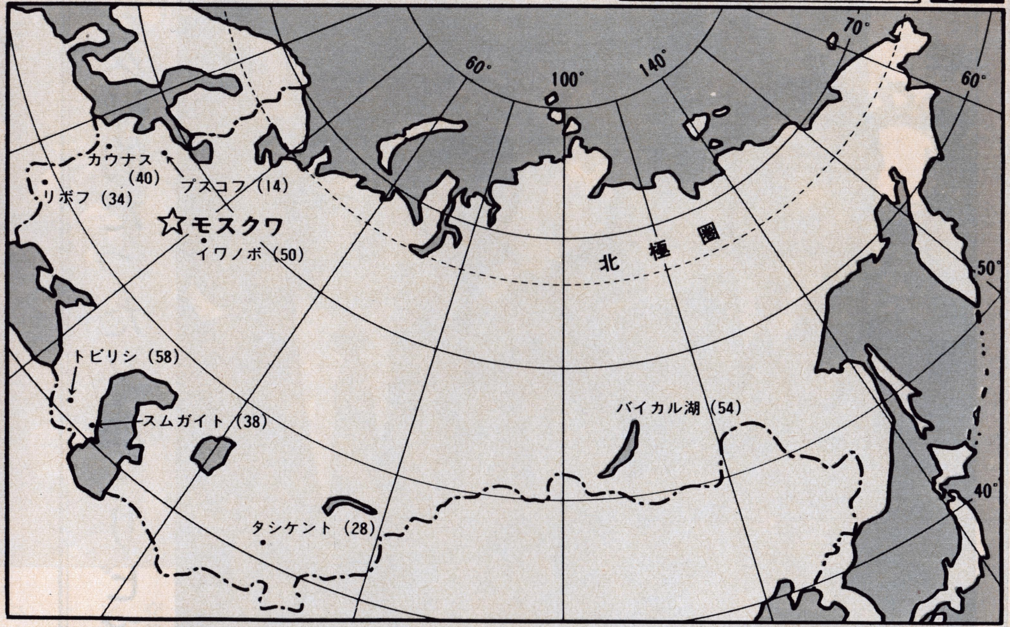
踊りつづけるプリセツカヤ

モスクワの国立自然公園

第23号　1985年12月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

表紙　舞台生活40年を記念する夕べで観客の拍手に答えるマイヤ・プリセツカヤ(一九八三年5月、モスクワ・ボリショイ劇場)(8ページ参照)
カメラ　A・マカロフ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3―9―13
振替口座　東京9―122358(加入者名=ソ連大使館広報部)

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101 東京都千代田区神田神保町1―44
振替口座　東京0―13581(加入者名=新時代社)

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代(送料込み)を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

写真ニュース

友好的だったソ連・リビア首脳会談



10月10、11日クレムリンでM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長とリビア革命の指導者ムアマル・アル・カダフィ大佐との会談が行われ、友好と相互理解の雰囲気の中で、現在の国際情勢の諸問題に関して意見が交わされた。

またソ連・リビア関係の現状とさまざまな分野における両国関係の発展の見通しについて意見が交換された。

M・S・ゴルバチョフとM・カダフィは、ソ連・リビア間の経済・通商・科学技術協力の発展長期計画に調印した。

（写真は会談前の両国首脳）

ソ連首相と松下電器産業社長の会見



10月8日クレムリンでN・I・ルイシコフ・ソ連閣僚会議議長［首相］は商用で訪ソした日本の松下電器産業の山下俊彦社長と会見した。会談のさい、双方の利益とソ日間の互恵の協力の発展をめざす双方の願望に合致する実務関係の諸問題が話し合われた。

（写真はクレムリンでの会談）

無事帰還した宇宙の英雄たち



故障して宇宙を漂っていたソ連の宇宙ステーション、サリュート7号は、ウラジーミル・ジャニベコフ、ビクトル・サビヌイフの二人の宇宙飛行士の手で見事修理され、生き返った（本誌19号36ページの記事参照）。宇宙飛行史上初めて乗員の一部の交替が行われ（9月18－25日）、先の二人の宇宙飛行士が始めた作業は、ビクトル・サビヌイフとともにウラジーミル・ワシューチンとアレクサンドル・ボルコフが続けている。ウラジーミル・ジャニベコフと、交替乗員と一緒にステーションを訪問したゲオルギー・グレチコの二人は9月26日、ソユーズT13号で地球に帰った。写真は地球に戻り、身内の者や友人、同僚に囲まれたジャニベコフ（中央）とグレチコ（右から4人目）。

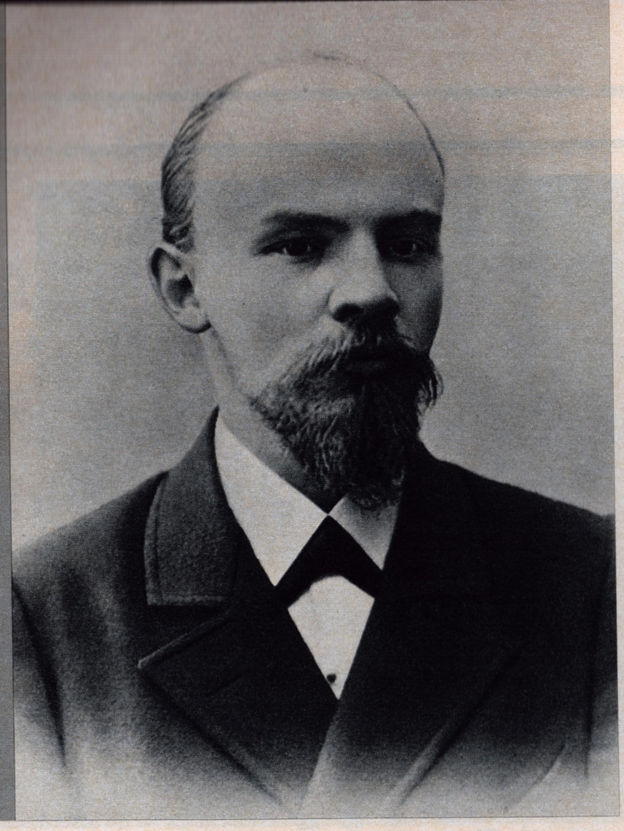
アムール・ヤクーツク鉄道

南ヤクーチア地域生産コンプレクスで、シベリア横断鉄道、バム鉄道とヤクーツクを結ぶアムール・ヤクーツク鉄道の建設工事が始まった。この工事は永久凍土帯に830kmのレールを敷き、700以上の人工施設を建設するもので、完成すれば東シベリアと極東の経済発展に大きな効果がある。

（写真は鉄道建設労働者を歓迎する現地の住民）



ソビエト国家と国家機関についてのレーニンのことば



勤労者自身が国家を統治する

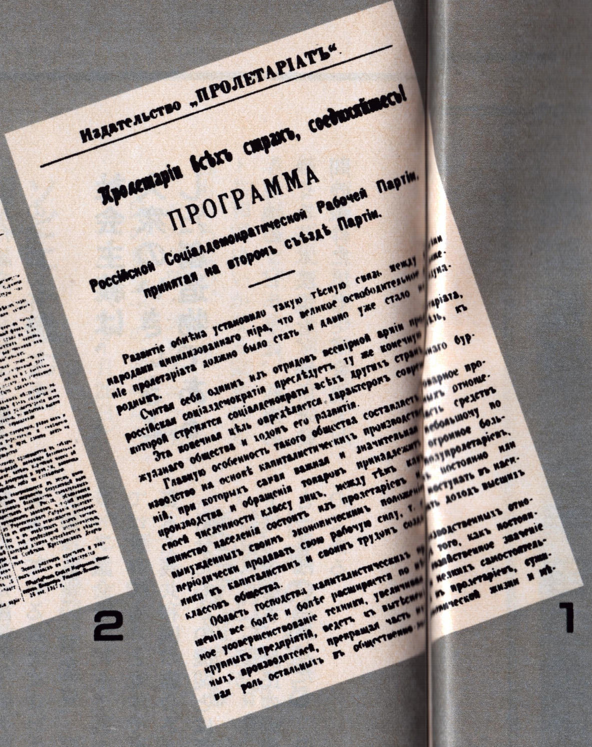
「勤労者の同志諸君！　**諸君自身が**、いま国家を統治していることを記憶せよ。諸君自身が一つに団結し、国家の**すべての業務を自分の手に**にぎらなければ、だれも諸君をたすけるものはないだろう。諸君のソビエトは、今後は国家権力の機関であり、全権をもつ決議機関である」

「住民に訴える」（一九一七年11月）

強制か？　誰の利益のためか？

国家は強制機関である。以前には、国家は、全人民にたいするひとにぎりの金持ちの暴力であった。だがわれわれは、人民の意志を実行すべき強制機関に、国家を転化させることを望んでいる」

全ロシア中央執行委員会の会議における召還権についての報告（一九一七年11月）



1



2



3

上右　ソ連共産党とソビエト国家の創始者ウラジーミル・イリイチ・レーニン（カザン国立大学法学部通信教育部を修了後の一九〇〇年の写真）

1　ソ連共産党の前身——ロシア社会民主労働党（ボリシェビキ）の綱領。これは勤労者を資本主義の抑圧から解放するための闘争の綱領だった。

2　3　ソビエト国家の最初の法律。2が「土地に関する布告」、3が「平和に関する布告」。いずれも一九一七年10月のソビエト権力確立直後に採択された。

ソビエト権力の民主主義とその社会主義的性格について

ソビエト権力の民主主義と

ソ連市民の基本的権利と自由

——ソ連憲法から

ソ連市民は、ソ連憲法とソビエトの諸法律が宣言し、保障するすべての完全な社会・経済的、政治的および個人的権利と自由を持つ。社会主義制度は社会の社会・経済的および文化的発展プログラムの遂行に従って、市民の権利と自由の拡大、その生活条件のたえまない改善を保障する。

市民による権利と自由の行使は、社会および国家の利益、および他の市民の権利に損害を与えてはならない。（第三九条）

※　※　※

ソ連市民は労働の権利を持つ。（第四〇条）

※　※　※

ソ連市民は休息の権利を持つ。（第四一条）

※　※　※

ソ連市民は健康保護の権利を持つ。（第四二条）

※　※　※

ソ連市民は老齢、疾病のさい、労働能力の完全な、あるいは部分的喪失ならびに扶養者喪失のさい、物質的保障を受ける権利を持つ。（第四三条）

※　※　※

ソ連市民は住宅を受け取る権利を持つ。（第四五条）

※　※　※

ソ連市民は教育を受ける権利を持つ。（第四五条）

※　※　※

ソ連市民は文化の成果を享受する権利を持つ。（第四六条）

※　※　※

ソ連市民は共産主義建設の目的に照応して、科学的、技術的、芸術的創造の自由が保障される。（第四七条）

※　※　※

ソ連市民は国家的および社会的なことがらの管理、国家的および地方的意義を持つ法律および諸決定の討議と採択に参加する権力を持つ。（第四八条）

※　※　※

ソ連市民は誰でも国家機関と社会団体に対して、これらの活動の改善に関する提案を行い、仕事の欠陥を批判する権利を持つ。（第

その社会主義的性格は次の点に現れている。

最高国家権力が、これまで資本家に抑圧されてきた大衆によって自由に選挙され、随時更迭できる勤労大衆（労働者、兵士、農民）の代表から成るソビエトであること、

地方のソビエトが、民主主義的中央集権制の原則に基づいて、ロシア・ソビエト共和国の単一の、連邦的同盟によって固く結合した全国家的なソビエト権力に自由に統合されていること、

全勤労住民が一人残らず立法機能と国家の管理の機能の遂行へ漸次移行するために、ソビエトが立法権力と法律施行の監督だけでなく、ソビエトの全成員を通じての法律の直接的な実施をも、手中に集中していること。

一九一八年上半期に書かれた論文「ソビエト権力の当面の任務」より

社会主義は、大衆のいきいきとした創造物である

現地のソビエトは、政府のつくる基本法規を、場所と時間の条件に応じて、変更し、拡大し、補足することができる。大衆のいきいきとした創造力こそ、新しい社会の基本的な要因である……　社会主義は、上からの命令によってつくりだされるものではない。社会主義の精神は、お役所的＝官僚主義的な機械的行為とは縁もゆかりもない。いきいきとした、創造的な社会主義は、人民大衆自身の創造物である。

「エス・エル左派の質問にたいする回答」より（一九一七年11月）

官僚主義との闘いの保障

ソビエト組織の官僚主義的歪曲との闘争は、ソビエトが、勤労被搾取者という意味での「人民」とかたく結びついていることによって、またこの結びつきが融通性と弾力性とをもっていることによって、保障される。貧民は、ブルジョア議会を、民主主義の点では世界でもっともすぐれた資本主義共和国の議会さえも、「自分たち」の機関とは考えていない、ところが、ソビエトは、労働者・農民の大衆にとっては、「自分たち」のものである。

「ソビエト権力の当面の任務」（一九一八年4月）

民主主義と単独責任制

大衆は、自分たちのために責任ある指導者をえらぶ権利をもたなければならない。大衆は彼らを解任する権利をもたなければならない。大衆は、どんなに小さくとも、彼らの活動の足取りをすべて知悉し、点検する権利をもたなければならない。大衆は、例外なくすべての労働者成員を管理機能に推挙する権利をもたなければならない。しかしそれは、集団活動の過程が一定の指導部なしに、指導者の責任制の確立なしに、指導者の意志の統一によって生みだされるきわめて厳格な秩序なしにおかれてもいいということを、意味するものではけっしてない。

論文「ソビエト権力の当面の任務」の最初の草稿（一九一八年3月）

ソビエト権力と宗教

宗教は私事である。何を信じたいか、何も信じないかは各人の自由である。ソビエト共和国は全民族の勤労者を団結させ、民族の差別なく勤労者の利益を守り抜く。ソビエト共和国はいかなる宗教的差別も知らない。

モスクワ・プレスニャ地区の集会での演説から（一九一八年7月26日）

ソビエト権力と婦人

われわれにとっては、婦人労働者が法律のうえだけでなく、実生活でも、男子労働者との平等をかちとることが必要である。このためには、婦人労働者が、公共企業の管理や国家の統治にますます多く参加することが必要である。

婦人は、管理し統治することによって、急速にまなび、男子に追いつくであろう。

だから、共産党員であろうが非党員であろうが、婦人労働者をもっと多くソビエトに選出したまえ。分別ある良心的な仕事をする能力のあるまじめな婦人労働者でさえあれば、非党員であっても、彼女をモスクワ・ソビエトに選出せよ！

「婦人労働者へ」（一九二〇年2月）

仕事の遅滞とお役所主義的態度に反対する

一刻の猶余なく後れを取り戻すことを提案する。ソビエトの行政機関は正確に、きちんと、す早く活動しなければならない。行政機関が不規律になっていると、個人の利益を損なうだけでなく、すべての管理業務が偽りの非現実的な性格をもってくる。

何よりもまず各機関を通じるすべての業務の実際の遅滞のない実行の程度を、労働生産性の真の尺度とするとともに、今後諸君に向けられた業務と要求に最も速く、余すところなく答えるよう要求する。紋切り型の空虚な回答や他の諸機関へのたらい回しにとどめることは、とりもなおさず遅滞を助長し、紙を無駄使いすることである。

「ソビエトの中央諸機関の指導者たちへ」（一九二一年12月）

社会主義は空想ではなく、現実である

われわれは正しい方向をとらなければならない。われわれとしては、すべてのことを点検し、全大衆と全住民がわれわれの道を点検し、「そうだ、これは旧制度よりも良い」と言うことが必要である。これこそ、われわれが自分に提起した任務なのである。国の全住民とくらべると小人数の集団であるわが党は、このことに取りかかった。この小さな中核は、すべてを作りかえることを自分の任務とした。それは作りかえるであろう。これが空想でなく、人々が没頭している事業であること――われわれは、それを証明した。われわれはみな、それを見た――それは成しとげられている。

モスクワ・ソビエト総会での演説（一九二二年11月20日）

（訳文は一部を除き、大月書店版レーニン全集のものを使わせていただきました）

四九条）

※　※　※

人民の利益に適合し、かつ社会主義制度を強化し発展させるために、ソ連市民には言論、出版、集会、会合、街頭行進、示威行進の自由が保障される。（第五〇条）

※　※　※

共産主義建設の目的に照応して、ソ連市民は政治的積極性と自主性の発展、市民の多様な関心の充足を促進する社会団体に団結する権利を持つ。（第五一条）

※　※　※

ソ連市民は良心の自由、すなわち任意の宗教を信仰し、あるいはいかなる宗教も信仰せず、宗教的礼拝を行い、あるいは無神論の宣伝を行う権利が保障される。宗教上の信仰と結びつく敵意と憎悪をかきたてることは禁止される。（第五二条）

※　※　※

家族は国家の保護を受ける。

結婚は女性と男性の自由意思による合意に基礎をおく。夫婦は家族関係において完全に平等である。（第五三条）

※　※　※

ソ連市民は人身の不可侵を保障される。何人も裁判所の決定または検事の許可がなければ逮捕されない。（第五四条）

※　※　※

ソ連市民は住居の不可侵を保障される。何人も適法な根拠なしに居住者の意思に反して、住居に立ち入る権利を持たない。（第五五条）

※　※　※

市民のプライバシーならびに信書、電話による通話および電信の秘密は、法律によって保護される。（第五六条）

※　※　※

個人の尊重ならびに市民の権利および自由の保護は、すべての国家機関、社会団体および公務員の義務である。

ソ連市民は名誉と尊厳、生命と健康、個人の自由と財産に対する侵害にたいし、裁判所の保護を受ける権利を持つ。（第五七条）

※　※　※

ソ連市民は公務員、国家機関および社会的諸機関の行為を訴える権利を持つ。訴願は法律の定める手続きにより、その定める期間内に審理されなければならない。

法律に違反し、権限を越え、市民の権利を侵害する公務員の行為は、法律の定める手続きにより、これを裁判所に提訴することができる。

ソ連市民は、国家的組織、社会団体および公務員がその職務執行のさいに犯した違法行為がもたらした損害の賠償を受ける権利を持つ。（第五八条）

文化と芸術

踊りつづける マイヤ・プリセツカヤ

バレエ評論家　ボリス・リボフ＝アノーヒン
カメラ　A・マカロフ


ボリショイ劇場の楽屋で


『瀕死の白鳥』を表情豊かにドラマチックに踊るプリセツカヤ

ソ連の傑出したバレリーナ、マイヤ・プリセツカヤ（60歳）の名声はとうに国境を越え、そのバレエは彼女が踊った多くの国の観客から高い評価を得ている。

プリセツカヤのバレエ芸術は映画にもなったし、彼女については書物、記事、研究論文も書かれている。ソ連の有名なバレエ評論家ボリス・リボフ＝アノーヒンもプリセツカヤについて数多く書いている。ここではプリセツカヤに関するリボフ＝アノーヒンのいくつかの著述のダイジェストを紹介することにしよう。

マイヤ・プリセツカヤは演劇一家に生まれ、当然のことだが、幼い時から女優になることを夢みていた。小さな娘の持って生まれた体つきは、バレリーナとしては理想的とは言えなかったのだが、バレエ学校にやらされた。長すぎる手と足、ごつごつした体つきは未来のバレリーナの優雅さを予告するものではなかった……プリセツカヤは自分の最初の恩師エリザベータ・ゲルトに、でもどうして私を合格させたのですか、と聞いたことがある。ゲルトはその時こう答えた――「あなたが踊り終わった時、私たちはおじぎをするように求めたわ。すると小さなマイヤはすばらしく上品に、誇らし気な優美さで腰をかがめておじぎをしたの。厳めしい審査員席から笑いがもれて、全員一致で合格にしました。これほど堂々としたおじぎが出来るのは未来の本物のバレリーナだけですもの」

舞台で第一歩を踏み出した時からプリセツカヤは、その叙情的な線の美しさと威圧的表現、激しい動きとのまれにみる一体感で見る者を魅了した。この三要素の結合こそが彼女の強烈な個性を決定した。

普通はコールドバレエから多くのソロダンサーが巣立っていくものだが、

プリセツカヤは一度もコールドバレエで踊っていない。最初からソロダンサーとしてボリショイ劇場の舞台に立った。デビュー当時からプリセツカヤは自分が一番得意とするバレエの要素——跳躍、ステップ、回転を観客に披露し、同時にその技巧をさらに磨くことに努めた。時がたつとともに彼女の踊りはますます超絶的になり、感動的になった。

プリセツカヤは古典バレエのレパートリーのほとんどすべての役を踊っている。「クラシック・バレエで私たちは学び、古典を基礎にして初めてあらゆる他の物を踊れるのです」——プリセツカヤはこう思う。

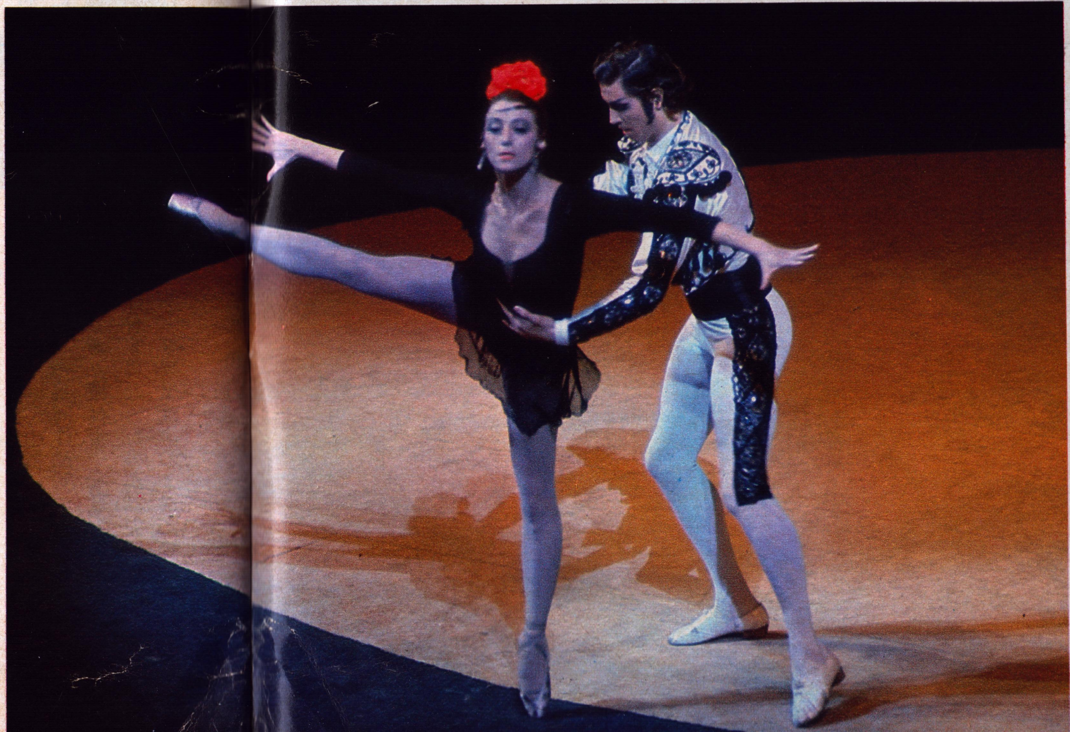
プリセツカヤの最も有名な古典バレエの役の一つで、20年以上も踊ってきた役は、チャイコフスキーのバレエ『白鳥の湖』のオデット＝オディールだ。プリセツカヤのオデットに観客はいつも、ヒロインの内的衝動、死の静寂を振り切って生に、光に逃れたいと願う強い気持ちを感じる……胴体は動かさずピンと立てたまま両腕の動きだけを徐々に速めることによって、プリセツカヤは泳ぐ白鳥、水面をつき進む



プリセツカヤと夫の作曲家ロジオン・シチェドリン（自宅で）



踊り終わって——拍手、花また花……



◀『カルメン組曲』より。カルメン（プリセツカヤ）とエスカミリオ（ロシア連邦共和国功労芸術家S・ラドチェンコ）。



ビゼー＝シチェドリンの『カルメン組曲』からカルメン（プリセツカヤ）



シチェドリンの『かもめ』のリハーサルで

誇り高き鳥の形象をつくり上げた。少女が白鳥に変わる奇跡は観客の目の前で起こった——プリセツカヤの手は白鳥の羽の震えを伝え、と同時に去りゆく白鳥をさらってゆく波の形象をも見るものに感じさせる……

プリセツカヤの両腕のしなやかさには驚かされる。時に蛇のように曲がりくねり、あるいは風に吹かれるリボンのように柔らかくひらめき、時には波状の動きの美しさで人の心を奪う。すべてが本質的で自然だ——これは彼女に生まれつき備わった動作の資質であり、作り上げられたトリックではない。

おもしろいことにプリセツカヤは、さらに何回も、バレエの舞台で鳥の形象をつくり出した。イーゴリ・ストラビンスキーのバレエ『火の鳥』、サンサーンスの曲によるかの有名な『瀕死の白鳥』がそれである。

幸せにもプリセツカヤの『瀕死の白鳥』を見た人は、その記憶が一生焼きついて離れないはずだ。これはもう単なるバレエコンサート用の作品ではなく、ドラマトゥルギー（戯曲作法）と造形的展開、クライマックス、それにフィナーレのある立派な小作品である。

プリセツカヤは自分が踊るすべての役に情熱をみなぎらせる。自分自身も大好きな、有名な役の一つがミンクスのバレエ『ドン・キホーテ』のキトリ。キトリの形象がプリセツカヤの心を捉えるのはまず、キトリ役の対照性と多面性であり、この役だと第一幕と二幕でスペイン的色彩のバレエを、ドン・キホーテの夢の場面では純粋な古典バレエを踊れること、そしてフィナーレのパ・ド・ドゥの輝かしさと妙技である。あの名高い、感動的なキトリの〝登場〟は、プリセツカヤによる革新的表現によって決定づけられたと言っていい。彼女はこれまでの踊りのスタイルを変え、表情豊かな動きとポーズをとり入れた。この、プリセツカヤが見つけ出した動きやポーズを、今多くのバレリーナがくり返しているが、それはプリセツカヤが始めたことだとは思いもしないかも知れない。

有名な音楽家やバレエ芸術家がプリセツカヤの才能の前にひざまずいた。世界の傑出したバレエ振付家がプリセツカヤに自分の作品を捧げ、委ねた。キューバのアルベルト・アロンソはプリセツカヤのためにビゼー＝シチェドリンの音楽による素晴らしいバレエ『カルメン組曲』をつくり、ベルギーのモーリス・ベジャールはラベルの音楽による一幕物『イサドラ』と『ボレロ』を、フランスのローラン・プチはマーラーの『バラの死』を創作している。

外国の代表的な歌劇場やバレエ団がプリセツカヤを公演に招いている。リオン（仏）では、メルーズ・バレエ団の公演（G・オーリックの音楽によるS・リファール振付のバレエ）でアテネ王テセウスの妻、ファイドラを踊った。パリでは英国の振付家アントン・ドーリン記念コンサートに参加した。ローマでは野外劇場テルマ・カラカラで踊り、ローマ歌劇場ではソ連の作曲家アレクサンドル・グラズノフ（一八六五—一九三六）の『ライモンダ』でバレエ振付家として働いた。現在はレニングラードの振付家ドミトリー・ブリャンツェフと共に同劇場でロジオン・シチェドリンの音楽による『せむしの子馬』の振付にあたっている。『せむしの子馬』はプリセツカヤと後に彼女の夫となるシチェドリンとの最初の共同作品であった。大きな関心を呼んだ二人の次の共同作品は『カルメン組曲』だ。プリセツカヤはカルメンの無二の形象をつくった。彼女の踊りは、いらだちと情熱を、死を目前にしての平然さと結びつけ、生への渇望と死に対する軽べつを表現した。プリセツカヤによるカルメンを一語で表現しようとするなら、その言葉は厚顔であろう。カルメン役についてのすべての既製の型にプリセツカヤは自分自身の解釈で挑戦し、また自分自身にさえ戦いを挑んだ。

次いでプリセツカヤとシチェドリンはレフ・トルストイの作品の初めてのバレエ化に挑んだ。プリセツカヤは以前から『アンナ・カレーニナ』を上演したいと思っていた。台本の著者として私はよくリハーサルに居合わせ、動きの一つ一つ、動作のニュアンスの一つ一つをいかにプリセツカヤが夢中に、と同時に苦しみながら探し求めていたかを見た。バレリーナのマイヤ・プリセツカヤは同時に悲劇の大女優でもある。

プリセツカヤは、『アンナ・カレーニナ』でも、『かもめ』（チェーホフの同名の戯曲のバレエ化。プリセツカヤ、シチェドリンの共同作品）でも、ソロダンサーであり振付家であった。「どうして振付家になったのか」という問いにプリセツカヤは次のように答えた。



◀『白鳥の湖』では一人の踊り手が優しい白鳥オデットとごう慢な黒鳥オディールの二役を踊る。プリセツカヤはこの役を激しいパッションと超絶的技巧で演ずる。



シチェドリンの『アンナ・カレーニナ』でアンナを踊るプリセツカヤとパートナーのマリス・リエパ（ウロンスキー役）



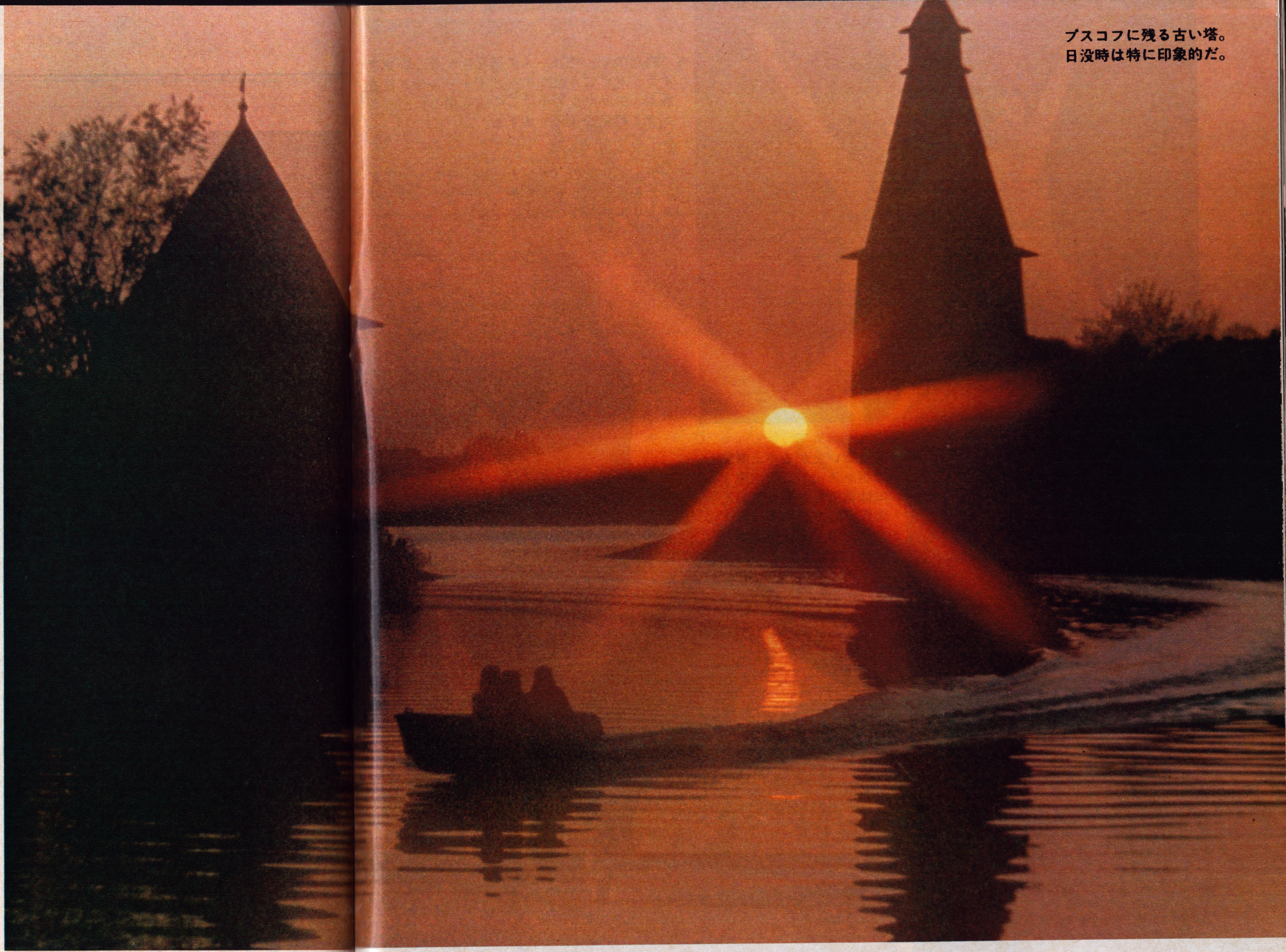
◀高く舞い上がるキトリのポーズ——この跳躍には勇気とお祭り気分、大胆不敵さがある（ミンクスの『ドン・キホーテ』より）。

「振付に特に身を入れたことは一度もありませんでした。でも子どもの時からいつも音楽に合わせて勝手に振りをつけて踊っていましたから。初めは直観によって、あとは意識的に、自分がどう音楽を理解したかに合わせて——それはしばしば極めて風変わりなものでしたが——踊りました。すべてが音楽から始まりました……バレエにおいては音楽——それがすべて、絶対的にすべてです」

マイヤ・プリセツカはボリショイ劇場の舞台で42回目のシーズンを踊っている。これほど長いあいだ舞台に立ちつづけられるバレリーナは少ない。そのためにはまれにみる勤勉と自制が不可欠だ。今も毎日、プリセツカヤは教師としてその才能を非常に高く敬っている有名なバレエマスター、アサフ・メッセレルのクラスに通っている。

42回目のシーズンも観客はこの驚威的バレリーナに拍手を惜しまない。そしてプリセツカヤ自身も、名声を愛することを隠しはしない。「理解され、認めてもらえるのはうれしい。すべては無駄ではなかったと分かります。成功が私を舞台に引きとめているのです」と、プリセツカヤは言う。

プリセツカヤは観客を、驚くほどの内的解放感、あけっぴろげさで引きつける。その踊りで彼女は人格と人間の感情の自由と独立性をうたい上げ、生の喜びを確認しているのだ。

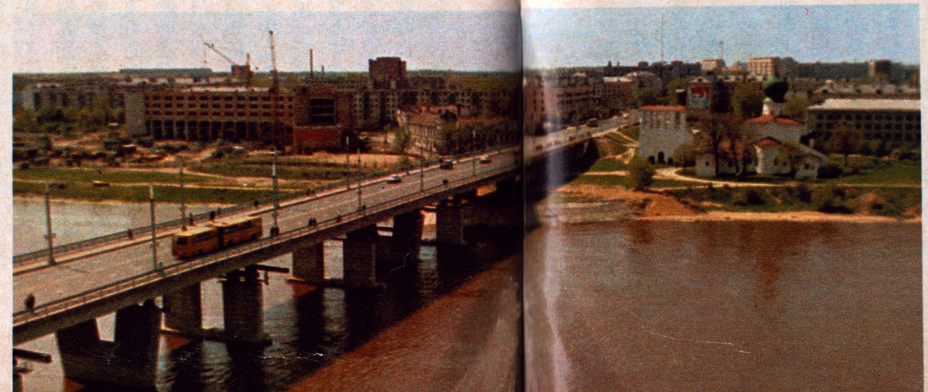


プスコフに残る古い塔。
日没時は特に印象的だ。

プスコフ市民の生活と法律

ソ連における人権

本誌記者
アーラ・ベリャコワ
カメラ
R・クチェロフ



ベリーカヤ川とプスコフの市街



市の広場にある詩人プーシキンの像



プスコフのクレムリン。正面はトロイツキー寺院、手前は中世の内城ドブモント・ゴロド。

数年前、ユネスコ（国連教育科学文化機関）が米国、フランス、西ドイツなど世界10カ国のいわゆる〝典型的〟な都市の住民の時間利用調査を行った。ソ連ではプスコフがその対象に選ばれた。プスコフはロシア連邦共和国北西部の都市で、エストニア共和国に近い交通の要衝である。

プスコフがなぜ〝典型的〟な都市なのか？　同市の一つの側面——法律的な側面を取り上げ、その解明を試みようと思う。

プスコフの約二〇万の市民は、毎日の仕事においても、雑事においても、自分たちがどれほど頻繁に法律とかかわっているか、およそ考えたことはないだろう。〝法律〟という四角ばった言葉そのものはめったに使われないが、秩序の厳格な守り手がこの言葉を発すると、それは状況次第では恐ろしい響

きを持つかもしれない。

だが〝普通〟の市民は、そのような状況に毎日遭遇するわけではない。その代わり、法律によって調整された諸関係の中で毎日暮らしているのである。

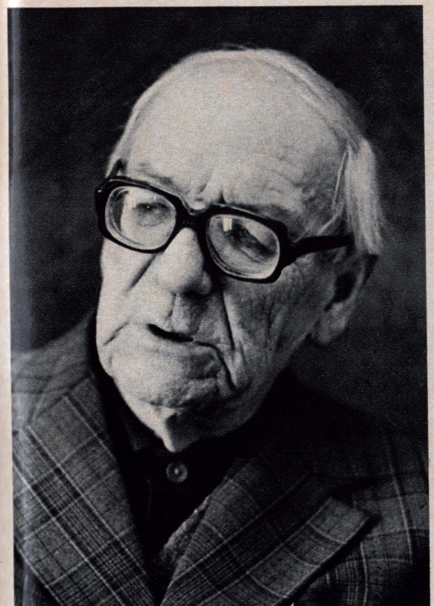
司法会館

市の新しい地区に司法会館が建設され、州ソビエト司法部、市人民裁判所、公証人役場がそこに収まった。

プスコフ地区では三〇〇人以上の法律家が働いている。司法部はプスコフ市とプスコフ州の司法機関（初級裁判所である人民裁判所、公証人役場、弁護士会その他）の仕事を組織し、企業、コルホーズ、ソフホーズの法律活動を指導し、他の諸機関と一緒に市民への法律知識の普及に取り組んでいる。

司法会館の中の市人民裁判所をのぞいてみよう。裁判所長は53歳のエブゲニー・ショーロホフ。経験豊かな法律家だ。彼は工場で旋盤工として労働人生を歩み始め、やがて職長補佐になった。裁判官になったいきさつは？

ショーロホフ所長は語る——「私は人を相手にした仕事に非常に興味があります。法律には若いころから関心を持っていましたが、人生の成り行きで、勉強を始めたのは大人になってからでした。36歳でレニングラード大学の法学部に入りました。通信教育です。私が働いていた工場が、私を人民裁判所の人民裁判官候補に推せんしてくれ、選挙でこの職に選出されました。以来17年職務に努めてきました。前回一九八二年の選挙でさらに5年の任期に就きました」



長老弁護士のひとり76歳のニコライ・サモイロフ

市人民裁判所の審理は司法会館で行われるだけではない。事件が社会的、教育的意義を帯びている場合には、企業で出張審理が行われる。じつにさまざまなケースがある。例を挙げよう。

労働者デュポフキンが、見知らぬ少年たちに袋だたきに遭い、仕事に出られなくなった、と民警に訴え出た。長いこと犯人探しが行われたが、見つからなかった。調査の結果、少年たちではないことが分かった。デュポフキンはけんかでケガをしたのだった。だが、暴漢に襲われたことにすれば傷病休暇証明書がもらえるので、ウソをつくことにしたのである。

これは果たしてプライベートな問題だろうか？ 人民裁判所はそうは判断しなかった。審理はデュポフキンが働いている工場で行われた。五〇〇人が出席した。被告は法律にもとづいて、虚偽の申し立てのかどで2年の自由剝奪刑が言い渡された。判決は教訓的だった。たとえ特定できない相手であっても、その人の名誉を毀損する権利はだれにもない、ということを人々は納得したのである。

弁護士会

何らかの形で法律上の援助と関係ある機関は朝8時から夜8時まで活動している。弁護士会もその一つである。

「非常に大勢の人々がわれわれのところにやってきます」と語るのはアナトリー・ゲラシモフ・プスコフ州弁護士会幹部会議長。「法律相談、書類作成、裁判での弁護依頼その他、問題はじつにさまざまです。昨年は八〇〇〇人以上が訪れました。市民はだれでも法的援助を仰ぐことができます。弁護料は高くなく、場合によっては支払う必要がありません（労働紛争、年金受給申請書類作成、依頼人に弁護料を払うだけの物質的余裕がない場合）。

依頼人はどうやって弁護士を選ぶのか？

依頼人は事件を引き受けてもらいたい弁護士を指名することもできる。具体的な心当たりがなければ、その事件の性質に応じてだれが適当か、窓口で相談することもできる。

公証人役場

地元の新聞にはさまざまな広告が載る。「ガレージ売ります。電話乞う（番号）」「郊外に家買いたし」……こうして別荘、自動車、コレクションを売ったり買ったりするのである。ここにもまた法律の出番がある。民法の売買行為に関する規則がそれである。これらの手続きはすべて公証人役場で行われる。

以下は国家上級公証人タチヤナ・デニセンコの話——「私たちは毎日、一〇〇件以上の書類を作成しています。書類とにらめっこで退屈でしょうって？ とんでもありません。一枚一枚の書類の背後には、手助けを必要としている生きた人間がいるのですから。いま多いのは相続手続きです。親たちが子どもに、かなりの額のお金、別荘や自動車を遺言で譲渡するのです。譲渡は親族に対してだけではありません。少し前、市では有名な建築家でプスコフの史跡の保存に熱心だった方が亡くなりましたが、この方は全財産——絵

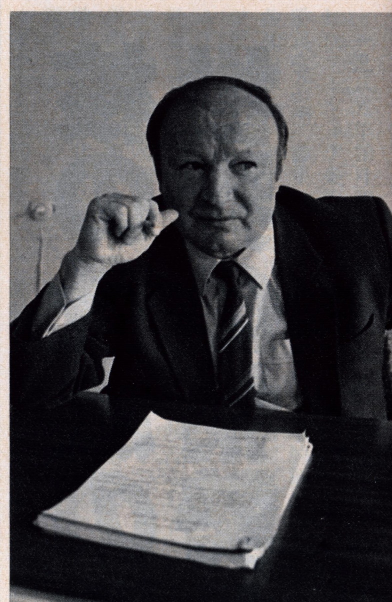
画、書籍、古代のタイルのユニークなコレクションを市に譲りました。

公証人の仕事に対する手数料は、依頼人の財布をおびやかすようなことはありません。相談は無料ですし、書類作成もほんのわずかな費用ですみます。コピーは20コペイカ、委任状の作成は50コペイカから2ルーブルまでです。ついでながら、委任状は非常に多く発行されます。息子には父親の自動車を運転する委任状、妻には夫の貯金を処理する委任状、といった具合です。私の大学の教授が、〝結婚以外は何でも委任できる〟と冗談を言ったほどです」

検察局

私はプスコフ市のアナトリー・ニキーチン検事のもとを訪れた。

「われわれはしばしば、検察局を〝法律の盾〟と呼んでいます。検察局は基本法であるソ連憲法から自然保護や建築記念物の保存に至るまで、あらゆる法律の正しい執行を監督することを委任されています。しかも監督の対象は市民だけでなく、すべての機関、公務員が含まれます」



プスコフ市ソビエト司法部長レオニード・シェベリョフ

検事は最近の例を話してくれた。漁業監督局と市の衛生局の申告にもとづいて、検察局はある工場の工場長に対する刑事訴訟を起こした。この工場は再三の警告や罰金にもかかわらず、廃水を川に投棄しつづけていた。工場長は解職され、有罪の判決を受けた。

「われわれが特に注意しているのは、市民の権利が守られているかどうかという点です」と検事はつづけた。「予約がなくても、われわれは毎日、住民の来訪を受けつけています。一九八四年には七三三三人がわれわれのところを訪れました」

「どんな問題で来るのですか?」

「むしろ、どんな問題なら来ないか、と言う方が簡単なほどですよ。たとえば先週のことですが、組立事務所の仕上工Tが検察局へやって来ました。所長のことを訴えに来たのです。所長は仕事の遅れに対してTを叱責した——出費がかさむだけでなく、賞与もフイになる、というわけです。所長の言い分はもっともです。Tは実際に仕事の手順を狂わせてしまったのですから。しかし、所長がTを叱責したのは、過失があってから35日もたった時点でした。これは法律違反です。叱責の処分を決めるのは1カ月以内でなければならないからです。当然のことながら、検察局は処分を取り消しました」

市ソビエト

イーゴリ・ユニツキー・プスコフ市長には、法と秩序を保障する上での市ソビエトの役割について話してもらった。この分野で大事なのは、違法行為の原因を取り除くために必要な社会的諸条件を作り出すことであり、市民、特に若者たちの理性的で有益な余暇こそが最良の予防である、と市長は考えている。〝無為はあらゆる悪の温床〟という古いことわざを市長は引用した。

市ソビエトには法秩序と社会秩序の維持に関する代議員の常設委員会があり、活発に仕事をしている。とはいえ、この問題に取り組んでいるのはこの委員会だけではない。

市ソビエトの総会（市議会）では裁判官、検事、民警その他の司法機関の責任者が定期的に報告する。

イーゴリ・ユニツキー市長は言う——「法秩序と社会秩序を確保する専門の機関の努力だけでは不十分だと言わなければなりません。それは社会全体の仕事です。市ソビエトが秩序維持の仕事における住民自身の最も大衆的な形態であるボランティアの人民パトロール隊や同志裁判に関心を寄せているのはそのためです。もちろん、同志裁判の決定は文字通り同志的です。周囲に害を与えている人に対して、自分の罪を理解させるためには、しばしばその誤りを指摘したり、公に誤りを批判するだけで十分だからです」

ソ連ではどの都市もそうだが、プスコフも将来を展望した計画にもとづいて発展している。人口は近いうちに二五万人になるだろう。現在、市には立派なドラマ劇場、たくさんの映画館、図書館（20）、博物館、大スタジアム（3）、競馬場、ボートクラブがある。

これらもまた法秩序と社会秩序の強化に直接関係している。というのは秩序とは都市や個々人の文化全体の一つの側面だからである。住民の時間の使い方についてのユネスコの調査によれば、プスコフの住民は1週間に約5時間を教育のために充てている（これは他の諸都市に比べて最高だった）。また、科学、文化、教養、保健のために時間を割いている人の数でも最高だった。「プスコフは〝田舎〟の都市ではあるが、文化的、精神的な意味では決して田舎都市ではない、と言っていいのではないでしょうか？」と市長は話をしめくくった。

国連創設40周年記念総会へのM・S・ゴルバチョフの祝電

尊敬する事務総長閣下

国連創設40周年にあたり、あなたと国連記念総会出席者の皆さんにあいさつを送る。

国連はファシズムと軍国主義に対する自由愛好諸国民の勝利の結果誕生した。だから国連憲章の冒頭に、戦争の惨害から将来の世代を救い、寛容を実行し、善良な隣人として互いに平和に生活していくという連合諸国の決意が表明されたのは、全く当然である。

国連憲章は一九四五年10月24日に効力を発生し、これが国連誕生の日とされているが、この憲章は時の試練に耐え、国連自体は国際関係のシステムの中の重要なファクターになった。この40年間人類は新世界戦争を避けることができたわけだが、ここにも国連の寄与がある。

しかし今日では、この時期全体を通じてのこれまでのどの時にもまして、公然と、せいいっぱいの大声でこう言わなければならない。国連憲章の中で提起された主要課題はまだ解決されていない。今日、過去のいかなる時にもまして、核破局の脅威を人類から取り除くための各国、各国民の共同の努力が求められている。

実際的な面では、このために必要なのは、何よりもまず地上での軍拡競争に終止符を打ち、宇宙でのそれを防止することである。

さらにまた緊張の地域的な火元を消し、あらゆる発現形態での植民地主義の遺制を根絶するための新たな努力が求められている。

国連はこのほかにも多くの緊急課題をかかえている。軍縮の現実的措置の実現を通じて、創造のため、立ち後れと飢え、病気、貧困の一掃のための資源の捻出を促進しなければならない。公正な民主的基盤にもとづく国際経済関係の再編成、真の人権と自由、まず第一に平和な生活の権利の保障も、同じ目的に奉仕するものでなければならない。

われわれがこれらすべてについて語るのは、国連創設40周年はたしかに盛大に記念されるべきだが、国連加盟諸国の主要な注意は国連の活動をさらに有効な、実効あるものにすることに向けられるべきであると、深く確信しているからである。

国連の原加盟国の一つであり安全保障理事会の常任理事国であるソ連は、今後も従来と同様に、この全世界的機関がその憲章の厳守にもとづいて崇高な使命を首尾よく果たすようあらゆる手を尽くして協力していくであろう。

M・S・ゴルバチョフ

（プラウダ、一九八五年10月25日号）

核の脅威の除去と欧州および世界の情勢の好転のために

ワルシャワ条約諸国の声明

（一九八五年10月23日）

一九八五年10月22日ソフィアで開かれたワルシャワ条約加盟諸国政治諮問委員会会議に参集したブルガリア人民共和国、ハンガリー人民共和国、ドイツ民主共和国、ポーランド人民共和国、ルーマニア社会主義共和国、ソビエト社会主義共和国連邦、チェコスロバキア社会主義共和国の最高の代表は、欧州の情勢を詳細に検討し、核の危険の除去と平和強化をめざす闘争の緊急課題に主要な注意を向けて、国際関係のカギを握る諸問題について意見を交換した。さらにワルシャワ条約加盟諸国の協力を一層発展させるという緊要な問題について実り多い討議が行われた。

欧州と全世界の運命について自国民と人類に対して負っている責任を自覚し、国際情勢の現在の不安な進展を好転させたいとの意図に導かれて、会議参加諸国は共同で次のことを声明する。

I

近年、国際緊張が急激に高まり、世界はそれを越えれば事態の進展がおさえられなくなるような一線に近づいた。軍拡競争のカーブは急上昇している。一連のNATO西欧諸国への米国の中距離核ミサイルの配備は、この大陸に新たな危険な状況をつくり出し、ソ連その他いくつかの社会主義諸国に対抗措置をとることを余儀なくさせた。

特別の不安を呼んでいるのは、軍拡競争の宇宙空間への波及の脅威である。これは戦略情勢全体の安定を破壊し、宇宙を人類にとって致命的な危険の新たな源泉にするであろう。

緊張と戦争の危険の増大の原因は、帝国主義、なによりもまず米帝国主義の政策の中にひそんでいる。米国は軍事的優位を獲得し、自己の意思を他の諸国民、諸国家に押しつけようとする狙いを隠していない。

ワルシャワ条約加盟諸国は、どんな状況のもとでも自国民の安全に関することでは一歩も譲らないだろう。これら諸国は軍事的優位の獲得をめざすことはやらないが、自らに対する軍事的優位をも許さない。これら諸国は軍拡競争とそのエスカレーションに断固反対し、最低のレベルでの力の均衡の確保を主張している。

これら諸国の対外政策の主要目的は、核戦争の脅威を除去し、軍事対決のレベルを引き下げ、平和共存とデタントの精神で国際関係を発展させることであったし、今もそれに変わりはない。これら諸国は、イデオロギーの違いが国家間の関係に移され、その安定を破壊することがあってはならず、すべての国家、国際環境の正常化をめざすすべての勢力の積極的な共同行動が、いまや過去のどの時にもまして必要であるとの立場から出発している。ワルシャワ条約加盟諸国その他の平和愛好諸国の数多くの提案は、これをめざしている。社会制度の異なる諸国家間の政治対話、現実的にものを考える層の発言、反戦運動、すべての平和勢力の積極的活動は、デタントへの復帰、その国家間の関係のすべての分野への拡大、確実な安全と協力への方向転換が十分に実現可能であることを物語っている。

この転換のためには、力と対決の政策をやめさせなければならない。すべての国家が民族の独立と主権の尊重、武力あるいは武力による威嚇の不行使、国境不可侵と領土保全、紛争の平和的解決、内政不干渉、平等の諸原則、その他一般に認められた国際関係の基準を厳守しなければならない。あれこれの国の情勢や政策をゆがめて描き出す中傷キャンペーンは許されない。他国や他国民の内政への干渉、国家テロリズム政策の実施は、何をもってしても正当化されえない。何人も、自らが自由に選ぶ社会・政治制度のもとで生活し働くという各国民の主権的権利を侵害してはならない。

国際情勢の好転は、政治において現代世界の現実に照応した新しいアプローチを要求し、相互の自制を要求する。軍拡競争を停止させ、宇宙空間へのその波及を防止し、軍備、とりわけ核軍備の急激な削減を達成することを可能にするような措置を、早急にとる必要がある。これに関連して、宇宙軍備と核軍備――戦略核と中距離核――に関する問題の総体に関するソ米ジュネーブ交渉の重要な意義が指摘された。会議参加諸国は、宇宙での軍拡競争を防止し、地上でそれを停止させるという課題の実際的解決をめざすソ連の建設的立場とその新たな大きなイニシアチブ――ソ米両国が攻撃用宇宙軍備の完全禁止を取り決め、相手側の領土に到達する核軍備の真に抜本的な50％削減の実施について取り決めるようにしようとの提案を支持する。

同盟関係にある社会主義諸国の指導者は、予定されているソ米首脳会談は、世界における現在の危険な緊張の緩和、戦争の脅威の減少、軍拡競争の停止と軍縮への実質的前進をめざす相互に受けいれ可能な解決の達成を促進しなければならないと考える。

II

核の脅威の除去をめざす闘争の最重要方向は、現在の事態の危険な進展をとめ、欧州での軍事的対決のレベルを低下させることである。欧州の安全は、国際安全全体と同様、軍事手段、軍事力によって保障することはできない。欧州大陸の恒久平和は、デタント、軍縮、信頼の強化、国際協力の発展を通じてのみ達成できる。

欧州への核兵器のこれ以上の配備を停止し、その削減へと事を運ぶことが必要だ。ワルシャワ条約加盟諸国は、中距離核をも戦術核をも含む核兵器から欧州を完全に解放することを断固主張している。

欧州の中距離核手段の早急な相互削減についての合意を容易にするために、宇宙軍備および戦略軍備の問題と直接に結びつけることなく別個に相応の協定を成立させることは、この道での大きな一歩となるだろう。

この面できわめて重要なのは、ソ連の中距離ミサイルの欧州配備のモラトリアム、米国の中距離ミサイルの欧州配備に対抗してソ連欧州ゾーンに追加展開された分のSS20ミサイルを実戦配備からはずしたことのような、ソ連がとった一方的な善意の行動である。

現時点できわめて重要なのは、欧州のすべての国、とりわけNATO諸国とワルシャワ条約諸国が、欧州の核軍備の削減と除去、これらの問題に関す

る交渉での成果の達成、核戦争の危険の防止をめざす努力に積極的に協力することである。欧州と全世界の平和に対する大きな責任が、その領土内で中距離核ミサイルの配備がすでに進行中、あるいは予定されている諸国に課せられている。

会議では、欧州大陸のさまざまな部分、特に北欧とバルカンに非核地帯を創設し、さらに欧州中央部でNATO諸国とワルシャワ条約諸国を分かつ線に沿って、核兵器のない回廊をつくるというイニシアチブに対し、完全な支持が表明された。

会議参加諸国は、NATO加盟諸国にあてた自らの提案を改めて指摘する。いまもその緊要性を保っているこれらの提案は、以下の点について直接交渉を行おうというものであった。

(1) ワルシャワ条約加盟諸国と北大西洋同盟諸国の間で相互武力不行使・平和関係維持条約を締結し、すべての欧州諸国その他の関心をもつ諸国にこの条約を開放する。

(2) 軍事費を増やさず、削減する。

(3) 化学兵器から欧州を解放する。

会議参加諸国は、欧州中央部に化学兵器のないゾーンを創設しようとするドイツ民主共和国とチェコスロバキア社会主義共和国の努力を支持する。

ワルシャワ条約加盟諸国は、中欧兵力軍備相互削減ウィーン交渉での早急な合意をめざし、ソ米両軍の削減から始めることを提案する。

これら諸国は、ストックホルム会議で政治面でも軍事面でも欧州の信頼と安全を強化する本質的な、相互に補完し合う措置を近々のうちに作成するように主張する。

経済相互援助会議加盟諸国と欧州経済共同体諸国の間の全欧的な貿易・経済交流の発展は、これら両組織間の直接の実務関係の確立、具体的諸問題での両者の接触によって促進されるだろう。

欧州の信頼と相互理解、善隣関係の強化に矛盾するのが、欧州諸国間の国境やこれらの国の社会・政治体制を見直せとの呼びかけである。欧州の戦後の国境は不可侵である。直接あるいは間接にこれを侵害しようとするあらゆる試みは、欧州の平和機構の基礎の破壊を意味し、平和と諸国民の安全を脅威にさらすだろう。今日の領土と政治の現状を尊重することは、欧州諸国間の正常な関係の必須条件である。

これに関連して、とりわけドイツ連邦共和国での報復主義勢力活発化の危険が指摘された。公式筋その他の層による報復主義の奨励は、それがどこで行われようとも、欧州での平和、デタント、協力の確保の利益に反し、七〇年代に締結された条約や協定、ヘルシンキ最終文書に反する。

10年前に開かれた欧州諸国、米国、カナダの指導者の会議の大きな意義が強調された。この会議は欧州の安全と協力の基礎となるべき重要な原則と命題を採択した。この会議は、現実主義的な政策、善意、各国の正当な利益を考慮する心構えのはっきりしたあらわれであった。デタントの精神に貫かれた会議の最終文書は時の試練に耐え、最近のヘルシンキ外相会議が確認したように、相変わらず全欧協力の長期的綱領となっている。

現在は、これに基づいて欧州大陸の情勢健全化のためにさまざまな形やさまざまなレベルでの欧州諸国間の政治的対話を深め、相互の信頼を強めることが絶対不可欠である。会議参加諸国は、対等と互恵を土台とした西欧諸国との経済・科学技術協力の新しい形を探求する用意のあることを表明する。

これら諸国は、また、環境保護の事業や、文化、教育、保健の各分野、その他の問題で協力を発展させる用意がある。会議参加諸国は各国の主権を尊重した上であらゆる分野における人権の完全な保障をめざしてきたし、今も断固めざしている。

ワルシャワ条約加盟諸国は、現在ブダペストで行われている文化フォーラムを含めて全欧フォーラムの議事に今後とも建設的に参加していく。これら諸国は、ヘルシンキで始まった多面的プロセスが着実に、バランスよく前進するよう努力を続けていく意向である。この点で、一九八六年にウィーンで予定されている欧州安全協力会議参加諸国代表会議が重要な役割を果たすはずである、と会議参加諸国は考える。

会議参加諸国は、ヘルシンキ最終文書のすべての原則と条項が同文書のすべての調印国によって一貫して実現されることを変わることなくめざしている。これに基づいて国家間関係を発展させることができれば、欧州を恒久平和と互恵協力の大陸に変えることに役立つであろう。

III

現代の重要課題は、軍拡競争、まず第一に核軍拡競争を停止し、軍縮へ移行することである。

ソ米両国が一連の重要措置を実施できれば、この課題の解決に実際的に大きく寄与することになるであろう。それは、まず第一に、衛星攻撃手段を含む攻撃用宇宙軍備の開発、実験、展開に関するすべての活動を停止すること、既存の核軍備を現在の量的レベルで凍結し、その近代化を最大限制限すると同時に、このような軍備の新しい種類や型の開発、実験、展開を停止すること、欧州での中距離ミサイルの展開を停止することである。これらの措置は、核軍備および宇宙軍備に関わる諸問題全体にわたるソ米間の協定の作成の前にすでに実施できるはずである。

核軍拡競争停止のためには、あらゆる核爆発の停止といった措置の実現が強く求められている。会議では、ソ連が実施したこのような爆発に対する一方的モラトリアムへの支持が表明された。今度は、どこよりもまず米国が行動する番である。

ソ米両国が、核兵器をもたない国の領土へのあらゆる核兵器の配備を自制し、核兵器ストックを増やさず、さらにはすでにそれが配備されている国ではそれを更新しないという相互義務を引き受けることができれば、同じ目的に合致するであろう。

ソ連と米国は非核軍備の競争の抑止でもよい模範を示すことができるはずである。

会議参加者は、ソ米両国が破壊力で大量破壊兵器に匹敵する新型の通常軍備を開発も生産もしない義務を引き受けるよう提案する。

会議参加諸国は、一九八六年1月1日現在の水準でソ連と米国の兵力を、自国領土外のものを含めて凍結することも提案する。

次会計年度からのソ連と米国の軍事予算の相互不拡大は、あらゆる方向で軍拡競争を制限する効果的な措置となるであろう。

会議は、第40回国連総会に提出された「非軍事化の条件下での宇宙空間の平和的開発における国際協力について」のソ連の新しい提案に対する支持を表明した。この重要なイニシアチブの実現は、人類を宇宙における軍拡競争の破滅的な影響から確実に守るだけでなく、共同の努力によってすべての国民の幸福のために科学技術の発展の新たな高揚に向けて決定的な前進を行うことを可能にするであろう。

核兵器のいたるところでの完全な排除の首尾一貫した支持者である会議参加諸国は、すべての核保有国による核兵器の先制使用の拒否、その実験の包括的な禁止とどんな形であれその一層の拡散の阻止に関して会議参加諸国が以前に打ち出した提案が効力を保っていることを声明する。

会議参加諸国は、核兵器を保有せず、自国領土にそれを持たない国は、核兵器を行使されないことの確実な国際法的保証を要求する完全な権利を有していると考える。

現代の条件下で、その特別に危険なバイナリー型も含む化学兵器の完全禁止と廃絶の課題は、ますます切実な、急を要するものとなっている。現実主義と善意を相互に発揮すれば、この課題は、しかるべき国際協定の順守状況に対する検証問題を含めて、十分に解決可能なものである。会議参加諸国は、化学兵器の不拡散に関する国際的な取り決めがその完全禁止への共通の努力を促進するものと考え、このような取り決めの作成に参加する用意をもっている。

会議参加諸国は、グローバルなレベルであれ地域的レベルであれ、通常軍備の制限と削減、海洋での軍拡競争の抑止に関する協定の達成を目的とする具体的な交渉の実施を再度呼びかける。

会議参加諸国は、外国軍事基地の撤廃と他国の領土からの軍隊の引き揚げのために国際的な規模で新たな努力を払うことを支持するその不変の立場を確認する。

会議参加諸国は、現行の多国間フォーラム——ジュネーブ軍縮会議、ストックホルム会議、ウィーン交渉の効果を高め、現在諸交渉に含まれていない軍備の制限と軍縮の問題の実り多い交渉を開始することが必要だと考える。会議参加諸国が他の諸国との協定にもとづいて、平等と同等安全の原則の順守のもとに制限し、削減し、兵器庫から取り除き、永久に廃絶する用意をもたないような種類の兵器はない。

ワルシャワ条約加盟諸国は、軍備削減の問題に関するあらゆる建設的なイニシアチブをつねに最も注意深く検討してきた。今後もこれら諸国は、このように行動していくであろう。

会議に参加した社会主義諸国は、国連のような権威あるフォーラムが軍拡競争の停止と軍縮の事業に対する寄与を高めることを支持する。

現在と将来の世代を戦争の惨害から救うために反ファシズム連合諸国国民が40年前に創設した国際連合は、戦争防止のための諸国の行動を調整する中心となるというその主要な任務を完全に遂行すべき普遍的な機構に変わった。国連憲章で宣言された崇高な目的と原則の厳守は、平和の維持の不可欠な前提である。

IV

他の国際問題に関する意見交換の過程で、ブルガリア人民共和国、ハンガリー人民共和国、ドイツ民主共和国、ポーランド人民共和国、ルーマニア社会主義共和国、ソビエト社会主義共和国連邦、チェコスロバキア社会主義共和国の最高指導者は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカその他の世界の地域における現存の紛争情勢のすみやかな調整と緊張の新たな火元の発生の防止のために、関心をもつすべての国と積極的に協力する会議参加諸国の用意を強調した。

世界は分割できない。どんな局地的紛争も、現下の緊張した国際情勢のもとでは、大規模な、グローバルな規模の衝突に転化する危険性を秘めている。帝国主義の力の政策と他国の内政への干渉政策、侵略行為に断固終止符を打ち、諸国家間の紛争情勢や係争を平和的手段で解決し、自分の運命を自主的に決める各国民の権利を完全に尊重することが必要である。

ワルシャワ条約加盟諸国は、独立と社会的・経済的進歩をめざすラテンアメリカ諸国民の闘争を支持している。

これら諸国は、直接的な武力侵攻の危険にさらされているニカラグアへの侵略行動を糾弾し、この国との連帯を表明した。たえまのない脅威下にある社会主義キューバへの支持が確認された。中米問題は、外部からの介入なしに、干渉、脅し、圧力を排除する政治的手段によって解決することができるし、また解決されねばならない。

会議参加諸国は、中東の包括的な、公正で恒久的な調整は、一九六七年から占領している全アラブ領土からのイスラエル軍の完全撤退、自決権と独自の独立国家を創設する権利を含むパレスチナ・アラブ人民の正当な権利の実現、独立した存続と発展に対するこの地域のすべての国家の権利の保障にもとづいたすべての当事者の集団的努力によってのみ達成されうるとの断固たる確信を表明した。PLOを含むすべての当事者が参加する中東問題国際会議を国連の主催のもとに開催することは、これにいたる実際的な道となろう。アラブ諸国とパレスチナ運動の統一強化は、中東問題の解決を促進するであろう。

レバノン人自身の民族的合意にもとづくレバノンの国内問題の調整、レバノンの主権と領土保全の維持、イラン・イラク戦争の早期停止、ペルシャ湾地域の情勢の安定化は、地球のこの部分における平和の強化の利益に合致するであろう。

会議では、二つの共同体の正当な利益および独立、主権、統一、領土保全、非同盟の国家としてのキプロス共和国の維持を考慮し、国連の相応の諸決議にもとづいて、交渉によってキプロス問題の公正な政治的調整をはかる必要

性が強調された。
　会議参加諸国は、政治的調整を目的に国連事務総長特使の仲介によるアフガニスタンとパキスタンの交渉でとられている努力を支持する。
　朝鮮半島の平和と安定の強化、朝鮮の平和的、民主的統一をめざす朝鮮民主主義人民共和国の努力とイニシアチブに対する支持が表明された。
　アジアと太平洋地域における平和と協力の強化、東南アジアに存在する諸問題の政治的手段による解決、これらの地域での信頼と安全の強化は、特別な重要性をもっている。
　インド洋の平和地帯化、それを目的とする国際会議の招集は、切実な問題である。
　太平洋南部諸国の非核地帯創設をめざす努力は、全般的安全保障の利益に役立っている。
　アフリカ南部情勢の審議のさいには、SWAPOの指導下での自由と自国の独立を求めるナミビア国民の献身的なたたかいに対する支持が表明され、即時ナミビアに独立を付与する必要性が強調された。会議参加諸国は、南アフリカ共和国の実施しているアパルトヘイト政策や、アフリカ原住民に対する大規模な弾圧を断固として非難し、プレトリア人種差別政権への支持の停止を要求する。会議参加諸国は、アンゴラその他のアフリカ南部諸国に対する帝国主義勢力の侵略的行動や干渉、軍事介入に終止符を打つことを要求する。
　ワルシャワ条約加盟諸国は、紛争状態にある国々に対する軍事行動の即時停止と交渉への移行の呼びかけ、およびすべての国連加盟諸国に対する紛争・係争の政治的手段による解決の呼びかけを第40回国連総会で採択するようにとのルーマニア提案を支持する。
　国際問題に果たす非同盟諸国の役割の増大が指摘された。会議に参加した社会主義諸国は、この運動の自主性や、運動のよって立つ原則を十分に尊重しつつ、戦争の脅威の除去、軍縮と平和、緊張の緩和をめざし、新植民地主義と人種差別主義に反対し、民族独立を求めるたたかいや、国際経済問題の解決において非同盟諸国と今後も積極的に協力していく用意がある。
　会議参加諸国は、経済、科学技術分野での国際交流の正常化、ありとあらゆる人為的障害と差別的制限の排除、経済関係における信頼強化措置、国際経済関係の公正で民主的な基盤の上での再編成、新国際経済秩序の確立、立ち後れの解消を強く求めている。
　発展途上諸国の対外債務問題は、植民地主義と新植民地主義の重い後遺症の一つであり、国際生活の紛糾要因であって、緊急の調整を要する。社会主義諸国は、国際通貨・金融関係を整備し、それが政治的圧力と内政干渉の手段とならないようにすることを求める。会議参加諸国は、国連の枠内ですべての国が参加して、対外債務問題を含む最重要の国際経済問題のグローバルで公正な解決をめざす具体的な実務交渉をできるだけ早く開始するよう求める。
　ワルシャワ条約加盟諸国は、平和と国際安全の確保、軍拡競争の停止と軍縮への移行の問題を、人類が直面しているその他のグローバルな諸問題――経済的立ち後れの克服、広大な飢えや貧困、伝染病、文盲の地帯の解消、伸びる一方の人類のエネルギー、原料、食糧資源需要の充足、自然環境の保護、海洋と宇宙の平和開発――の解決との密接な関連で考えている。
　これらの諸問題が国際社会の共同の努力で解決されなければ、それらが一層深刻化し、国際緊張の新たな源泉が形成されることは避けられない。これらの問題を首尾よく解決する上の必須条件は、軍拡競争を停止することであり、強大な軍事力の保有国をはじめとする諸国の軍事費を大幅に削減し、節約された資金の一部を発展途上諸国の経済的、社会的必要に振り向けることである。
　現在、科学技術革命の成果と、人類の経済生活の国際化プロセスの発展のおかげで、学術研究や設計・実験作業の国際計画の実施、社会的労働生産性を何倍も上げることのできる機器・技術の開発が可能となった。しかし、重要なのはそうした計画が何をめざすかである。
　会議参加諸国は、現下の状況において国際的な科学技術協力をもっぱら平和目的に従わせ、それにグローバルな性格を付与する必要があると確信する。これは、人類の英知の新たな成果が諸民族間の不和の原因とならずに、全般的利益のために諸民族に集団で利用されるようになることの最も確実な保証となろう。この分野における単一のグローバルな計画を、エレクトロニクス、ロボット工学、生物工学、核物理学その他現代科学技術の基幹的方向を全人類的課題の解決のために利用するといった目的に従わせることができよう。会議参加諸国は、そうした計画の作成と実施に重みのある貢献をもたらす用意があることを声明する。

V

　現在の国際情勢のもとで特に大きな意義を帯びるにいたっているのが、根本的利益や社会主義・共産主義建設という目的の共通性、マルクス・レーニン主義的世界観によって結ばれた社会主義諸国の団結と統一の強化である。この点に関連して、会議参加諸国はワルシャワ条約によって誕生した軍事・政治同盟のきわめて重要な役割を強調したが、この同盟はすでにこの30年間にわたって兄弟諸国民の平和な創造的労働を確実に守り、欧州と世界全体の平和維持の重要な要因となっている。
　同盟諸国が全会一致で採択したワルシャワ条約の有効期間の延長に関する決定は、友好と協力を強め、国際問題では一致した路線を共同で推進するというこれら諸国の不屈の意思を反映したものである。
　ワルシャワ条約加盟諸国は、これら諸国の国益と国際的利益の調和のとれた結合を基盤にしたあらゆる分野での相互協力の効率の引き上げをめざす路線を今後とも一貫して実施していく。
　これら諸国は、科学技術進歩の促進、各国民の福祉の一層の向上を土台にした兄弟諸国のダイナミックな社会・経済発展のために努力をますます結集する意向である。ワルシャワ条約諸国は、コメコン諸国首脳経済会議で決められた措置、経済・科学技術協力と協業の拡大、社会主義的経済統合の深化をめざす措置を、特にその優先方向において早急に実現することに大きな意義を与えている。
　会議参加諸国は、社会主義・共産主義建設の経験の相互交換を今後も拡大し、兄弟諸党間の交流や政府、議会、省庁、社会団体、労働集団の間の接触の発展を極力促進していく決意を表明した。会議参加諸国は、科学、文化、教育の各分野での協力を深め、観光や地方同士の関係の拡大、市民間の交流を奨励していく意向である。
　社会主義諸国の協力がこれら各国の利益にも社会主義世界体制全体の利益にも合致することを確信して会議参加諸国は、他のすべての社会主義諸国との関係と多面的協力の発展を今後ともめざしていく。これに関連して会議参加諸国は、平和と社会主義をめざし帝国主義に反対する闘争で中華人民共和国と協同行動をとる用意のあることを声明する。
　会議参加諸国は、相対立する軍事グループへの欧州分割が社会主義諸国の選択ではなかった点を指摘する。しかしNATO軍事ブロックが存在し、欧州平和と世界平和への脅威が残っている限り、社会主義諸国は自らの防衛的同盟を強化していく。それと同時に会議参加者は、ワルシャワ条約機構とNATOの同時解体、そしてその第一歩として両者の軍事機構の撤廃に応じる用意があることを確認する。
　ソフィアでの会議の中でその参加者は、世界諸国民が40周年を広範に祝ったヒトラー・ファシズムと日本軍国主義に対する自由愛好諸国民の勝利の偉大な世界史的意義を強調した。
　歴史的経験が示している通り、いかなる勢力も、自らの自由と独立を守っている諸国民の意思を踏みにじることはできないし、社会主義体制を押しつぶそうとするいかなる試みも必然的に敗北する運命にあり、諸国民は世界支配確立の構想を抱く帝国主義層の策動を警戒すべきである。第2次世界大戦の教訓は別のことも証明している。すなわち、侵略と戦争に反対し平和と全般的安全を守る闘争では、異なる社会体制に属する国々も含めて、諸国の積極的協力が不可欠だし、可能である。そして手遅れにならないうちに、爆弾が降りミサイルが飛び始めないうちに、これをなしとげる必要がある。
　ワルシャワ条約加盟諸国は、欧州と他の大陸のすべての国の政府と国民に対し、人類に迫った世界破滅の脅威に反対する闘争で努力を結集し、あらゆる国際問題、最も深刻な、複雑な問題さえも、政治的手段によって、当事者の正当な利益の考慮に基づいた交渉、実り多い対話によって解決するよう呼びかける。世界観や政治的その他の信条の相違がこのことのための障害であってはならない。平和勢力は積極的に結束して行動することによって、核破局を防止し、諸国民の至高の権利――平和な生活と自主的な自由な発展の権利を保障することができる。

ブルガリア人民共和国を代表して
　ブルガリア共産党中央委員会書記長、
　ブルガリア人民共和国国家評議会議長
　　トドル・ジフコフ

ハンガリー人民共和国を代表して
　ハンガリー社会主義労働者党書記長
　　ヤーノシュ・カダル

ドイツ民主共和国を代表して
　ドイツ社会主義統一党中央委員会書記長、
　ドイツ民主共和国国家評議会議長
　　エーリヒ・ホーネッカー

ポーランド人民共和国を代表して
　ポーランド統一労働者党中央委員会第一書記、
　ポーランド人民共和国閣僚会議議長
　　ボイチェフ・ヤルゼルスキ

ルーマニア社会主義共和国を代表して
　ルーマニア共産党書記長、
　ルーマニア社会主義共和国大統領
　　ニコラエ・チャウシェスク

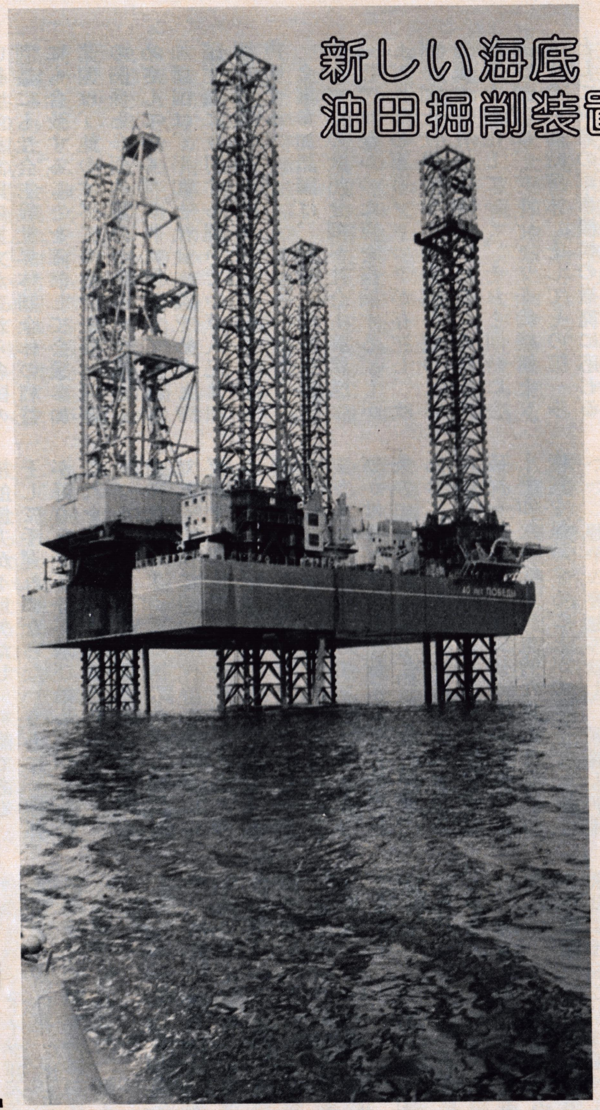
ソビエト社会主義共和国連邦を代表して
　ソ連共産党中央委員会書記長
　　M・S・ゴルバチョフ

チェコスロバキア社会主義共和国を代表して
　チェコスロバキア共産党中央委員会書記長、
　チェコスロバキア社会主義共和国大統領
　　グスタフ・フサーク

ソフィア、一九八五年10月23日

話題を拾う

新しい海底油田掘削装置



バクーの南60kmのカスピ海で、アストラハン造船所建造の新海底油田掘削装置「戦勝40周年」号が掘削作業を進めている。掘削現場はカスピ海大陸棚の比較的浅い箇所で、ここの地層は炭化水素原料が賦存する好条件に恵まれた組成をもつ。現在海底岩層の掘削深度は一二〇〇m以上に達している。

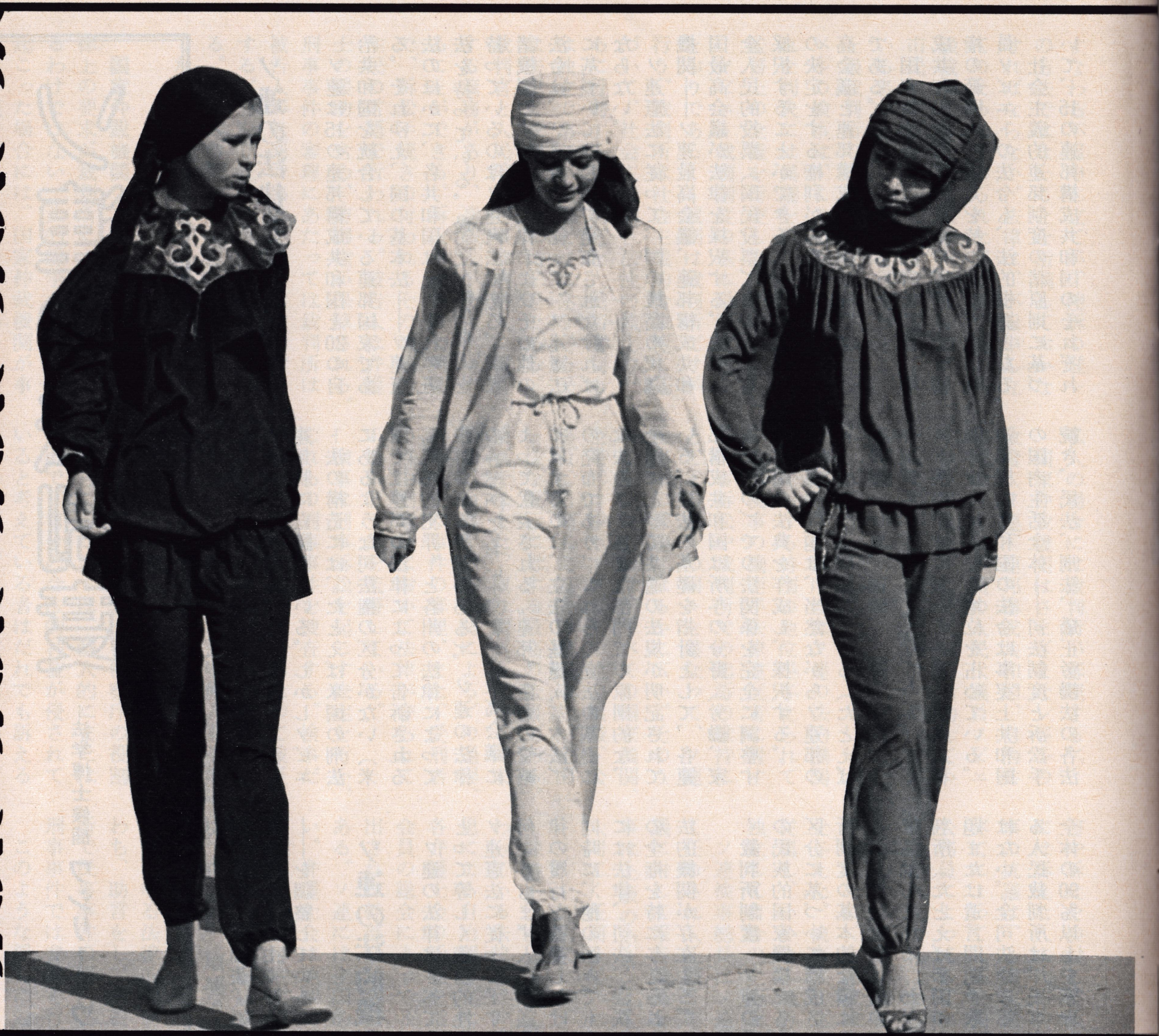


エレバンの子供鉄道

子供たちが中心になって自主運営する子供鉄道は、趣味と実益を兼ねた課外職業教育施設としてソ連各地の48箇所にある。アルメニア共和国エレバンの公園にある子供鉄道は、ラズダン川の景色のよい峡谷を走り、子供たちの楽しみの一つになっている。設置以来40年間に四〇〇万人以上の子供が利用しており、運営は教室や現場で実習を受けた市の学校の5—9年生が担当している。

流行と伝統

カザフ共和国の首都アルマアタのモード会館がデザインした衣装には、最新モードと民族的モチーフがうまく結合している。また仕上げにはカザフの伝統的な刺繍と装飾が広く使われ、民族色を出している。





まちに残った水鳥

昨年カザフ共和国のカスピ海東岸にあるシェフチェンコ市では、何千羽という水鳥が市の通りや住宅の入口をうろつくという異常な光景が見られた。これは、寒さでカスピ海の沿岸周辺の水が固く結氷したため、えさのなくなった水鳥が、えさを求めて市内に出てきたもの。市民たちから食べ物をもらってどうやら冬を越したが、春になってもまちを出ず、今もって市の近辺に居着いている。

ソ連の法制度

法学博士候補　ワシリー・ウラシヒン

ソ連の法律と法的根拠

ソ連は15の連邦構成共和国と20の自治共和国を統合している連邦国家である。それゆえ、国の基本法――ソ連憲法のほかに、各共和国はそれぞれの憲法を持っている。最高の法的効力を持っているのはソ連憲法である。国家諸機関のすべての法律およびその他の法令は、ソ連憲法に従って、ソ連憲法に基づいてはじめて発布されなければならない。

ソ連憲法に従って、国の最高の代議機関――ソ連最高会議、連邦構成共和国最高会議が法律を採択する。法律は全人民的投票（国民投票）によっても採択することができる。国民投票実施の決定をする権利があるのは、ソ連最高会議と連邦構成共和国最高会議だけである。

国家統治機関（ソ連政府と各連邦構成共和国政府）の法令や、地域的管轄権の範囲内で効力を持つ地方人民代議員ソビエトの法令も、法的根拠となる。

社会主義的連邦制度の諸原則に基づいて、15の連邦構成共和国のそれぞれは立法機能をも含む自国領土内での権力を自主的に行使する。ソビエト法も連邦制に立脚している。しかしソビエト法の構造には、たとえば米国の刑法にあるような司法権の区分がない（米国では連邦の法律によって告訴される"連邦的犯罪"と各州の法律によって告訴される犯罪がある）。ソ連の法律の各部門において、ソ連最高会議によって代表される"連邦"権力の管轄に属するのは、**立法の基礎**（基本法）の発布であり、これらの立法の基礎には法のさまざまな部門での原則的な、全国にとって共通の法規が明記されている。立法の基礎を指針として、各連邦構成共和国は所与の分野（労働、家族などの）での法関係を完全に調整する自国の法典を作成し、採択する。

一部の問題は、当然ながらソ連邦の独占的な権限に属している（たとえば国の単一予算、国防、ソ連の国際関係、外国貿易）。しかし全体として、ソビエト法の総体において各連邦構成共和国の法令は主要な地位を占めている。連邦構成共和国の法令は事実上共和国の国内生活全体――司法制度と訴訟手続き、民法、刑法、矯正労働法の各法典の採択、労働法、婚姻・家族法、市民の権利と自由や社会秩序の保護など――を調整している。

ソ連の法的機関

ソ連の法律はすべての機関と市民にとって等しく義務的性格を帯びている。ソ連憲法に従って、すべての国家機関、何よりもまず人民代議員ソビエトは法律の履行を監視しなければならない。同時に、他の国々でもそうだが、ソ連には法律、司法、法秩序の分野で権力の全権を特に与えられている国家的な法的機関が存在する。

裁判所制度　ソ連の裁判所は、ソ連の民族的国家機構と各共和国内の行政区分に基づいて構成されている。裁判所制度の基本的な環は人民裁判所である。人民裁判所は市の各区と農村地区で活動している。わが国には専門の裁判所（たとえば米国のように、家庭問題または遺言問題を取り扱う裁判所）はない。全司法権の第一審裁判所である人民裁判所は、民事事件、刑事事件全体の90%以上を審理している。最も重い犯罪に関する訴訟事件だけが直接上級裁判所で審理される。

ソ連では陪審裁判は採用されていないが、公正な裁判の実施に住民が積極的に参加する独自の形態がある。ソ連のどんな裁判所でも第一審のすべての訴訟事件はつねに合議制で、裁判長を務める職業裁判官と二人の人民陪席判事によって審理される。裁判の審理では、同僚がその事件に関係している社会団体、労働集団の代表もまた発言できる。

陪審員と異なり、人民陪席判事は裁判官のすべての権利を持っている。裁判官と同様に証拠を調べ、諸事実を評価する。そして合議室で刑を定めるさいには彼らの票は裁判官の票と同等の重みがある。

ソ連の裁判官は選挙制である。人民裁判官は5年の任期で、普通、平等の投票により選挙される。人民陪席判事（任期2年半）は職場または居住地において公開投票によって選挙される。この場合、裁判官と人民陪席判事は権利のうえで平等である。

第一審裁判所の判決は、連邦構成共和国の最高裁判所を含む上級裁判所に控訴できる。上級裁判所の判決が全国民的な法律に矛盾するか、他の共和国の利益に違反している場合には、その判決はソ連最高裁判所――国の最高裁判機関に控訴できる。任期5年のソ連最高裁判所はソ連最高会議によって選挙される。

裁判所の判決に対する直接の控訴、すなわち不服申し立てが、控訴の唯一の方法ではないことを指摘しておかなければならない。法律は、不服申し立てのために定められた期限満了後も上級裁判所または検察庁へ訴える権利を市民に保証している。すでに服役している者でさえこの権利を行使できる。上級裁判所の所長またはしかるべきレベルの検事は、このようにして上訴された判決には異議を申し立て、自己の監督上の全権を行使して行動する。

ソビエト裁判制度の基本原則は次のとおりである――裁判は裁判所だけが行う。裁判所は社会主義的合法性に基づいて、社会主義的合法性の強化のために行動する。裁判官と人民陪席判事は独立であり、法律だけに従う。市民は法律と裁判所の前には平等である。裁判官と人民陪席判事は選挙人に報告する義務があり、選挙人がリコールすることができる。訴訟手続きは公開性で、訴訟手続きの行われるその地域の住民の言語で行われる。被告人は弁護士の援助を含め、防御権が保障される。刑事事件の審理にあたっては裁判所は被告人が無罪であるとの仮定を指針とする。罪を立証する責任は原告側にある。被告人の罪の立証性は完全なものでなければならない。

国家仲裁機関　ソ連ではすべての法律上の要求が裁判所によって審理されるわけではない。法的紛争が企業間で起こった場合には、国家仲裁機関が事件を審理する（しかし当事者の一方が私人の場合には裁判所が審理する）。

国家仲裁機関はさまざまなレベルの政府（ソ連、連邦構成共和国、自治共和国の各政府、州の人民代議員ソビエト執行委員会）に付属して活動している。この制度の最高機関はソ連国家仲裁機関である。

検察庁　検察庁にはソ連の法的機関体系における特別の地位が与えられている。検事の機能が法律違反者に対する刑事訴訟や裁判所での起訴の維持にとどまる多くの国々と異なって、ソ連検察庁の課題ははるかに広い。そのうちの主要なものは、すべての国家機関、企業、コルホーズ、その他の組織、公務員、市民による法律の正確で、全国一様な履行に対する最高の監督である。検察庁はまた、取り調べ（民警、国家保安、検察庁の各機関による）の過程、裁判所での事件の審理、また、受刑者の自由剝奪地において法律が守られているかどうかを監督している。

検事は刑事訴訟を起こす決定を行い、これらの刑事事件を捜査する。検事だけが、刑事事件の捜査にあたって被疑者または被告人の捜索または逮捕の認可を出すことができ、他の何人もそのようなことをすることはできない。検事は裁判所で国の訴訟を維持する。

市民権の保護における検察庁の役割は大きい。ここへは、個人的にまたは手紙で、自分の合法的利益が侵されていると考えている者はだれでも訴えることができる。検察庁はこれらの申請書や訴えを検討し、正当性がある場合には訴えた人に代わって抗議する。検事の抗議は、その抗議が向けられたすべてによって（国家機関によっても、公務員によっても、市民によっても）検討されなければならない。

このように広い機能を効果的に遂行するために、法律は検事に大きな権利を与えた。検事はソ連検事総長だけに従属し、いかなる地方権力機関からも独立して自分の全権を行使する。

ソ連検事総長はソ連最高会議によって任命され（任期5年）、ソ連最高会議に対して報告義務を持つ。下級の検事は上級の検事によって任命される（同じく任期5年）。

弁護士　ソ連で弁護士の実務に携わっている法律家は弁護士会（自由意思による自治団体）に結集している。各弁護士会の活動を指導しているのは、会員の総会によって3年間の任期で選出された幹部会（議長を長とする）である。ソ連には全国的な弁護士会はない。弁護士会は地域的原則に従って――都市、州、自治共和国または連邦構成共和国単位で形成される。弁護士会は"自分の"地域では法律相談所によって代表される。法律相談所は住民にあらゆる法律的援助を与える。すなわち、助言をし、文書を作成し、裁判所で民事事件の原告と被告を代表し、刑事事件では弁護を行う。

このような援助に対する報酬（極めて妥当な額）はソ連司法省によって定められている。市民はこの報酬を直接弁護士に支払うのではなく、弁護士会の共同金庫に支払う。金額の約1/4は弁護士会の経費として差し引かれ、残額は弁護士に支払われる。こうして弁護士の収入は担当事件の件数と複雑さにかかっている。

法律的援助に対する低廉な費用は、その援助をすべての人が実際に利用できるものにしている。さらに法律は、弁護士のサービスが無料で与えられる事件の一覧表を定めている。

弁護士会の会員になれるのは、試用期間を勤め、弁護士の実務を認可するための試験に合格した、高い法律教育を受けた市民である。

ソ連では弁護士と弁護依頼人との間の秘密は法律によって守られる――弁護士は法律上の援助の提供に関連して自分の知るところとなった情報を口外する権利を持たない。弁護士会は職業的倫理の規範を犯したかどで弁護士を会から除名することができる。

ソ連司法省　ソ連司法省には、法的分野での重要な調整機能が与えられている。司法省は裁判所の課題の実現を極力助け、法律の体系化と法典作成に従事し、公証人会、戸籍登録機関（ザグス）、司法鑑定機関の活動とソ連国民経済における法律業務を指導している。このほか、ソ連司法省の管轄には弁護士への援助の組織、法律家の資格向上、住民の法律教育、法学の発展、法律家の国際交流促進も入っている。

ソ連における人権

労働法の違反があったら……

――労働法監督員の活動から

本誌記者 ウラジーミル・ミジリツキー　カメラ V・コブリン



タシケントのニット工場の現場で直接従業員から意見を聞く

中央アジアのウズベク共和国の首都タシケントに住むエリヨル・ザキロフ(30)は、ウズベク共和国の労働法監督局の6人の監督員の一人。労働法監督局はソ連の各共和国や州の最高労組機関に付属しておかれており、労働法が守られているかどうかを監視、監督するのが任務である。

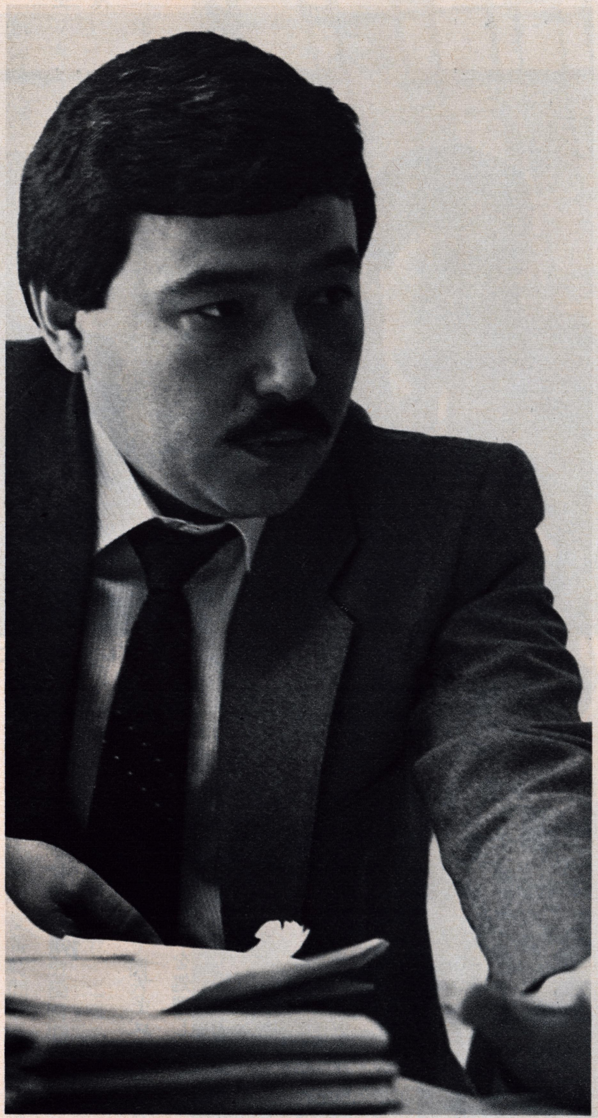
タシケントではエリヨルはまだ無名に近いが、彼の両親はタシケントの名士である。母親のマムラカト・ワシコワは法学博士で、永年ウズベク共和国の司法相をやり、いまはタシケント国民経済大学のソビエト国家法科の主任教授をしている。父親も著名な法律家で、タシケント大学の教授である。5人の子供は皆そろって両親と同じ法律関係の職業を選んだ。

一番下の息子のエリヨルは7年前に大学の法学部を卒業したあと、司法鑑定研究所に入った。未来は明るかった。研究所では好きな学問にたずさわり、学位をとるチャンスもあった。だがエリヨルは象牙の塔を出て、人々とじかにつき合う仕事をやりたいと思った。

「じゃ、労働組合に入ったら……」と母親がすすめた。

「何といっても労働法は面白いわよ。ちょうどいま労働組合評議会の方で、共和国中を駆け回る若くてタフな法律家をほしがっているわ。とにかくふところ深く飛び込んでみることね。あそこは働きがいがあるところよ。労働法がきちんといつも守られるようにするには、まだやらなくちゃならないことがかなり沢山あるのよ」

エリヨルは母親の意見を入れて労働組合へ行った。悔いはなかった。



ウズベク共和国労組評議会の労働法監督員エリヨル・ザキロフ

全権

「われわれは労働者や職員から申請や訴えが出ると、企業の監査点検をやる。同じ工場から数件の訴えが入ったときに点検をやるわけだが、そんな訴えが出るのは現地企業の管理部が法律を守っていない証拠だと思う」とエリヨルは言う。

監督員はいつでも好きな時に、誰からも邪魔をされずに企業に行って、管理部から必要な文書や資料を受け取り、説明を求めることができる。点検の結果労働法の違反が見付かれば、監督員は責任者に違反事項を取り除くよう要求し、幹部に罰金を課し、幹部の処罰または罷免を問題にすることができる。労働法監督局は、採用、配転、解雇、労働時間と休憩時間、賃金、法律に定められた保証と補償に関する労働法が守られているかどうか、団体契約の諸条件が現行法に反していないかどうかを点検する。また数年前から労働法監督員は、労働者に対する企業の住宅割り当て業務を監督することになった。

エリヨル・ザキロフはことしに入って27件の申請や苦情を調査した。この調査のために共和国内を数千キロも駆け回り、1カ月半も出張した。

彼の"ボス"である主任労働法監督員シャアスカル・シャアジゾフは部下の仕事ぶりに満足している。

「エリヨルがこの仕事についたばかりのころ、大企業の工場長たちは監督員と意見が食い違ったとき、自分の権威



「コンプレッサー」工場の労組幹部と協議。

を笠に着てエリヨルを抑えようとした。だがエリヨルは言い争わず、黙って労働法典を開いて、関係のある条文をつきつけた。法律はあくまでも法律だから、いくら言い争ったところでどうにもならないのだ……」

実例

エリヨル・ザキロフはすでにかなり多くの紛争を処理してきた。タシケントの大家具工場の先任技師ワレンチナ・アスタンコ（女性）は、企業の管理部が法律を破って、労組の承諾もなく自分を解雇したと労働法監督局へ訴え出た。ザキロフは企業に足を運んで、訴えどおりの事実があったことを確認した。彼の指示で技師は復職し、復職するまでの賃金が支払われた。

ザキロフは家具工場の検査をしたとき、この工場は先に定員削減のため数名の従業員を解雇したが、実際には解雇した人のあとに他の人を採用したので従業員の実数は減っていないことをつかんだ。これも労働法違反である。なるほど解雇された者は訴え出ず、ほかの職場ですでに働いているが、違反は違反である。ザキロフは工場長に罰金を課し、このような違反は許されないという指令書を工場長に渡した。

「管理部が労働法を悪意で破るケースはごく少なく、よく法律を知らないか、

タシケントのまちをエリノラ夫人と散歩するザキロフ



一部の法律を正しく解釈していないために、法律に違反する場合がある」とエリヨルは言う。

僻遠の土地で採鉱にたずさわっている地質調査隊の隊長が、一時的な配転命令を拒否した溶接工を解雇した。隊長は仕事上どうしても必要だったから配転を命じたと言ったが、法律が技能資格をもつ労働者を本人の承諾なしに技能資格のいらない仕事に移すこと（たとえ短期間でも）を禁じているのを忘れていたのだ。だからザキロフの指令書によって溶接工は復職した。ザキロフは隊長の根拠のない決定に同意した調査隊の労働組合のリーダーに誤りを説明した。

エリヨル・ザキロフの話によると、普通監督員の指令は無条件に遂行されるという。工場長の中にはあくまでも我を張って引かない者もごくまれにいる。そういう例の一つがブハラの金繍工場であった。ここの工場長ラジマ・ラフマトワは労働時間に関する法律を破って、交替時間がきても女子労働者を残業させた。法律では、特別の場合に限り必ず従業員と労組の承諾を得てはじめて残業が許され、残業のさいの賃金は倍額になる。工場長はこれらの条件を一つも守らなかったし、監督員の違反排除の指令にも従わなかった。

そこでエリヨル・ザキロフの申し入れにより、ウズベク労組評議会は共和国軽工業省に工場長の罷免を求めた。こうして軽工業相の命令によりラフマトワは解任された。「労働組合評議会がこのような要求を出すケースはそう多くない。そこまでやる必要がないのだ。工場長に対する説明、いわば法律教育とか、懲罰が、工場幹部の暴走を抑えている」とザキロフは語った。



ある問題について正確を期すために現場の労働者の意見を聞くこともある。

裁判での弁護士の役割

——イズベスチヤ紙の法律相談から

ソ連の新聞、ラジオ、テレビには法律関係の報道が実に多い。いろいろな理由から広く世間の注目を浴びたあれこれの裁判の報道だけでなく、法律問題の相談とか、有名な法律家に宛てた読者の手紙に対する回答などもある。

本号ではソ連のマスコミに発表されたこの種の法律相談のいくつかを紹介しよう。モスクワ市弁護士会のコンスタンチン・アプラクシン会長がイズベスチヤ紙（モスクワで発行されている日刊全国紙、発行部数六四〇万部）の読者からの質問に答えたものである。

手紙(1)

「さきごろ私はたまたま裁判を傍聴しました。酔っぱらって自分の孫娘を殴打したならず者の裁判でした。法廷は憤慨の声で騒然となりました。それでも、恥ずかしくもなくこんな男の弁護をやる人間がいました。この弁護人は検事が言及した明白な証拠が怪しいとけちをつけはじめ、あげくの果てには、このケダモノのような男の生活になにかよいところはないかと探し出そうとさえする始末でした。犯罪の弁護などよくできるものだと、どうも納得できませんが」

ニコライ・ピサレンコ
ウクライナ共和国ドネツク州

もちろん、犯罪は反道徳的なことであって、犯罪が周囲の人々のあいだに当然の怒りや不安や憤慨の気持ちを引き起こさなかったら、それこそ変だろう。それは分かる。しかし、たとえそれが高潔な感情であるにしても、感情的になったら、弁護士の仕事の実体や任務が分からなくなることがある。

まず注意しておきたいのは、ソ連憲法第一五八条には、被告人は弁護を受ける権利を保障されると明記されていることだ。そう、それが何人であろうとも、またどんな罪を犯したにしても、その人間には市民として、告発から身を守る権利が留保されているのである。そして、弁護士の任務はそれを助けることにある。

さて、それではドネツク州の読者の手紙に述べられている情況を吟味してみよう。手紙の主は、"くだんの"弁護士が検事側から提出された"明白な証拠"にあえて異議をさしはさみ、被告人の人格のなにかよいところを見付けようと"さえ"したことに疑問を感じた。しかし、それがあたり前なのである。問題の本質は、ソ連の訴訟手続きの民主主義的な基本原則の一つとして、法廷で白黒を争う原則が確立されていることにある。裁判に参加する者はすべて平等な権利を持っており、それは、検事と被告人と弁護人が証拠を提出する権利、（証拠がいかに明白に見えても）その証拠の調査に加わる権利、法廷での弁論に参加する権利を平等に持っていることに現れている。その際、国家を代表して起訴する者（検事）も弁護人も同等に訴訟基準に従っていることを理解する必要がある。また弁護士は被告人の人格に注意を払うが、これも、量刑にあたって裁判所が、社会主義的正義の観念にしたがって、犯された罪が社会におよぼす危険の性質と程度、有罪と認められた者の人格、責任を軽くするために酌量すべき情状や責任を加重すべき事情を考慮に入れることを定めている法の要請にまったく合致しているのである。

そして、いよいよ手紙の最後の「犯罪の弁護などよくできるものだ」という個所だが、私もこの抗議の声に全面的に賛成したい。ただし犯罪（この場合は傷害罪）そのものの弁護というのならば、という限りにおいてであって、傷害罪に問われた人間の弁護ということならば話は別だ。弁護士が犯罪を正当化しようとするならば、それは道徳にも法にも反する。けれども、被告人を弁護すること、一人の人間を被告席に座らせるにいたった原因（情状酌量すべき事由ならばなおさら）を説明すること、これは、すでに述べたように、弁護人の職業上の義務なのである。

※　※　※

手紙(2)

「こんなことを書くのはつらいのですが、さりとて黙っている訳にはいきません。1年前、私の息子が車にはねられて身体障害者になってしまいました。車を運転していた人間は裁判にかけられ、自分が悪かったと認めました。ところが、彼の弁護士はあつかましくも、

運転手は無罪であることを立証しはじめたのです。犯人が自分は有罪だと言っているのに、弁護士が、いや、無罪だという奇妙なことになりました。裁判所は執行猶予付きの刑を言い渡しました。私はこの判決に不服を言う訳ではありませんが、悲しくてたまりません。この弁護士のやり方は人の道に反したものです」

L・M
学術研究員
リペツク（中部ロシア）

いわゆる矛盾弁護と呼ばれる実にやっかいな法律上の実際問題に触れた質問である。やっかいだと言うのは、この質問に答えるのがむずかしいからではなく、この種のケースで弁護士がその職業上の義務を果たすのが相当むずかしいからである。ついでに言うと、こういうケースは交通事故の裁判でかなり多く見られる。車を運転していた者は、自分が事故を起こしたのだから自分が悪い、と本気で考えているのに、弁護士は裁判の過程で行われる自動車技術上の鑑定の結果を分析し、事件のデータを判断して、運転していた人間はなにも交通規則違反を犯さなかった、つまり刑法上の責任を負わなくてもよいという結論に達する。手紙のケースはこれだが、手紙の主の解釈は少し間違っている。裁判所の見方は弁護人の見方と完全に同じではなかった（裁判所は弁護人の論拠の一部を認めたのであり、執行猶予になったのは多分そのためだろう）が、だからといって法廷における弁護士のやり方が正しくなかったということにはならない。

被告人が自分の有罪を認めないのに、弁護士が裁判の審理に加わっているうちに、起訴がまったく確かな根拠にもとづいているとの結論に達した場合には、弁護士の立場ははるかにむずかしくなる。こんな場合、弁護士はどうしたらよいか？　弁護を断われば一番簡単だろうと思われるが、それは法で禁じられている。ロシア連邦共和国の刑事訴訟法第五一条（他の連邦構成共和国の刑事訴訟法にも同様の条文がある）は「弁護士は引き受けた被告人の弁護を拒否できない」とはっきりうたっている。これは、裁判のきわめて高い人道主義的性格の表れである。だから同じような状況では、検事の立場は弁護士とまったく異なる。検事は告発が立証されないという結論に達すれば、裁判所に対して起訴を棄却すると申し出ることができるのである。

ぜひ理解すべき重要な点は、弁護士の使命は弁護依頼人の召し使いではなく、弁護依頼人に奉仕することでも、いろいろな世話をすることでもなくて、裁判所を助けて正しい裁判が行われるようにすることなのである。

※　※　※

手紙(3)

「私たちのところで一人の男が窃盗容疑で裁判にかけられました。この男が商店のショーウインドーをこじあけているところをこの私が窓から見て、民警を呼びましたが、逃げられてしまいました。数日後、男が見付かりましたが、知らぬ存ぜぬの一点張りです。そこで裁判になりましたが、弁護士は犯人のガールフレンドをふたり証人に申請しました。犯人は彼女たちの家に犯行の時刻、客に行っていたというのです。簡単に言ってしまうと、犯人は3年の刑を言い渡されました。二人の女性は偽証罪に問われました。弁護士も処罰されるのでしょうか？」

マリア・フローロワ
リャザン州（中部ロシア）

このおたずねにたいする答えは、弁護士がこの二人の"ガールフレンド"が偽証することをあらかじめ知っていたか、いなかったかにかかっている。言い替えれば、もしその弁護士が裁判の過程で自分の弁護依頼人が実際に盗みをしたことを確信していたにもかかわらず、二人のガールフレンドに偽証を勧めたのならば、もちろんその弁護士は罰を受けるのが当たり前で、弁護士会から除名される。被告人やその友人、親戚の者が弁護士を欺して、犯行の時刻に被告人は確かに客になっていたと思わせたならば、話は別だ。この場合、弁護士がなんの罪にもならないのは当然である。

ここで特に強調しておきたいが、弁護士の使命は法と正義が勝つのを助けることである。弁護士は刑事事件であろうと民事事件であろうと、自分が参加した裁判で主張を貫くために利用できるのは合法的な手段だけである。

※　※　※

手紙(4)

「裁判が迫っているが、私はどうしたらよいか困っています。一方から言えば、もし私が事実を残らず弁護士に話さなければ、私は不利になるでしょう。といって、なにもかも本当のことを話すのは心配です。あとでその弁護士が証人として訊問を受けたらどうなりますか？　弁護士は一切を話す義務があるのではないでしょうか？」

T・S

弁護士に関する法規は弁護士が弁護活動と関連して知り得た情報を口外しないことを義務づけている。ロシア連邦共和国の民事訴訟法の第六一条（他の連邦構成共和国の民事訴訟法にも同様の条文がある）には、弁護士は職務の遂行に関連して知り得た事情について喚問されることはないと明記されている。

だから、あなたは思い切って、事件にとってなんらかの重要性をもつ情報を残らず弁護士に話してしまって差し支えない。さらに言えば、職業上のモラルは、弁護士が弁護依頼人から知り得た私生活に関する事実は一般にいかなるものでも口外しないことを弁護士に義務づけている。

一つ屋根の下の司祭と共産党員

本誌記者 アレクサンドル・グレビチ カメラ F・グリンベルグ



教会のコーラスの練習をする一家。左から奥さんのエブゲニア、ソゾント司祭、次女ベーラ、長女の夫、長女ネオニラ。

ロシア正教の司祭ソゾント・チョブイチ（47歳）はベリーキー・リュベニ村の聖ニコライ教会の主任司祭である。村は西ウクライナのリボフ市の近くにあり、教会はそれほど大きくはない。美しい建物で、古いイコン（聖像画）があり、私は以前からそれを見たいと思っていた。私は土曜の朝の勤行めざしてやって来た。だが、遅かった。参集者はすでに帰ったあとだった。教会堂の中は明かりが消え、静まり返っており、薄暗がりの中でイコンの聖者の考え深そうな顔がこっちを見ていた。

「きょうの説教ではどんな話をされたのですか、ソゾント神父？」

「いつものように、善と神への愛についてです」と司祭は答えた。「私はつねに参集者に、神だけでなく、隣人も、国民も、祖国も愛し、敬うこと、誠実に生きること、自発的な労働によって自分自身と祖国を高めること、地上における平和を祈ることを呼びかけています。説教を聴きにやってくる人々の中には、旧参戦軍人や勤め上げた労働のベテランの方々が大勢います。だから私はこれらの人々が私の話を聴いてくれるだけでなく、真心で応えてくれているようにも思われるのです」

私たちはいろいろな話をした。イコンを見せてもらい、司祭の生い立ちについても話してもらった。すると思いがけないことに、司祭は私を自宅へ客に招いてくれた。"ラーダ"のドアを開け、自らハンドルを握った。私たちはリボフに向かって走り出した。その郊外の大きな2階建ての独立家屋に、司祭は家族と一緒に暮らしているのだった。



ベリーキー・リュベニ村聖ニコライ教会の主任司祭ソゾント・チョブイチ

ソゾント・チョブイチ司祭は神学博士候補である。彼の人生は"世俗"の生活と教会の生活が奇妙にからみ合ったものだった。彼の父親もやはり司祭で、貧しい農家の生まれだった。だから彼は幼いときから神を信じていたが、彼が最初に選んだ職業は、教会とはおよそ関係のないものだった。獣医科の補助医として出発したのである。そのあとモスクワ神学校に入学し、そこで4年間学び、卒業すると、周囲の予想に反して、ふたたび学校に入学した。こんどは工科専門学校だった。そこを出てから6年間、リボフの"エレクトロン"工場でテレビの調整工として働いた。そのあとモスクワ近郊のザゴルスクの神学アカデミーで学び、司祭に任じられた。

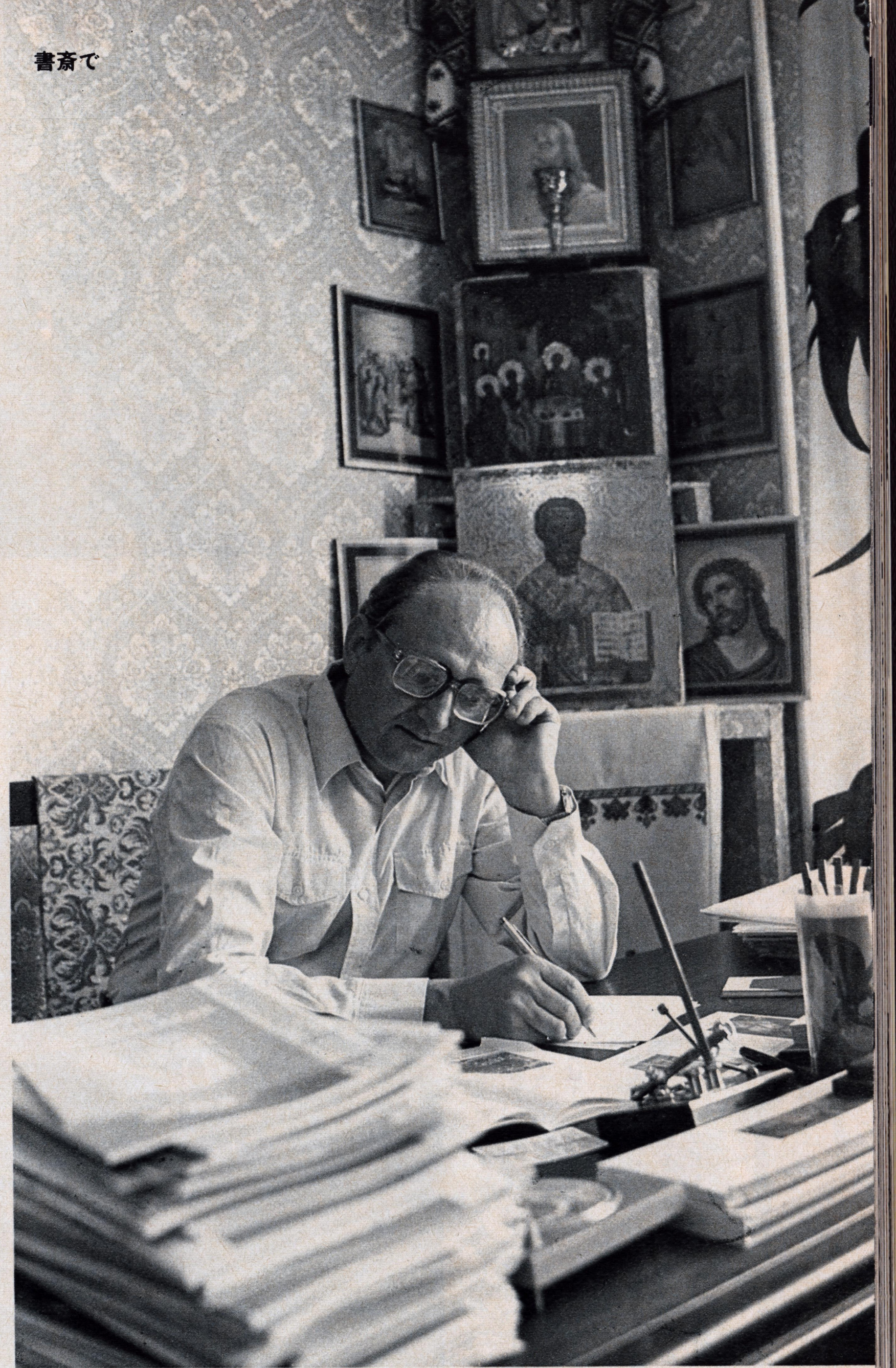
なぜこのような軌跡をたどったのだろうか？

ソゾント司祭は気取らず、正直に答えた。

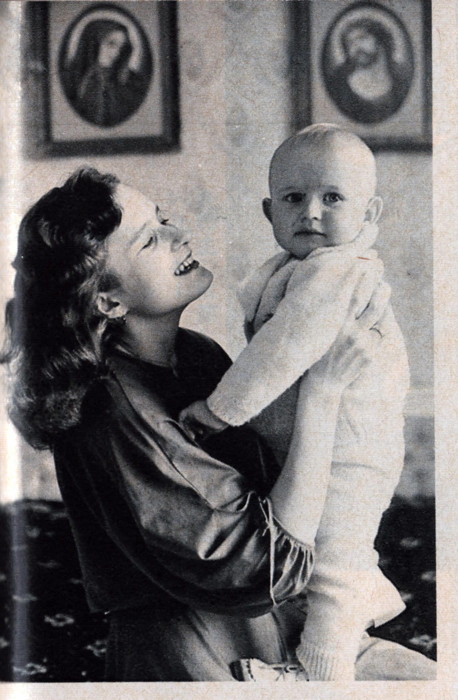
「本当のことを言うと、最終的に何を選ぶか、私は長いこと迷っていたのです。それは私にとって非常に重要なことでした。神学校を出たあとすぐ、私はまだ宗教活動に入る準備ができていないと感じたのです。そこで、しばらくテレビの調整工として働くことに決

長女ネオニラと▼





書斎で



長女と孫のナザリー



▼エブゲニアの父アナトリー・シクラ(左)と。アナトリーは共産党員。大祖国戦争で片腕を失った。

めました。すばらしい生活でした。工場のコーラス部で歌っていました。ついでですが、将来の妻エブゲニアと出会ったのもそこです。彼女は当時、リボフ商工業大学の学生でした。私の使命は教会の仕事だ、と私たちはふたりで決めました。私は司祭になり、妻は市況調査の専門家になりました。家庭生活はうまく行っています。成人した娘がふたりおり、上の娘は結婚して、1歳すぎの孫がいます」

一緒に住んでいるのは奥さんの両親と奥さんの祖母。家は7部屋に台所が2つ、サウナとガレージつき。家のまわりには広い付属地と庭があり、ソゾント司祭はそこに池を作って、コイを養殖している。広いホールの壁にはイコンと宗教画がかざってあり、書架にはたくさんの本が並んでいるが、宗教関係の本だけではない。ウクライナとロシアの古典作家の作品集の隣にはゲオルギー・ジューコフ・ソ連邦元帥の回想記やソビエト作家の作品も見える。

いま住んでいる家は奥さんエブゲニアの両親の古い家があった場所に建てたものだ。彼女の父親アナトリー・シクラには家では会わずじまいだった。傷病軍人病院へ行っているとのことだった。アナトリーは64歳。大祖国戦争(一九四一―四五年)中、前線で片腕を失った。市から遠くないソフホーズで会計係として働いている。

聖職者と結婚することになったとき父親は何と言ったか、と私はエブゲニアに聞いた。

「特に喜びもしませんでしたし、悲しみもしませんでした」と美人のエブゲニアが答えた。「私の父は共産党員で、無神論者です。でも、母と祖母は信心深く、私もそうです。けれども、それが原因で家庭の中がもめたことは一度もありません。両親は夫婦仲がよく、5人の子どもを育て、全員に立派な教育を受けさせました。父は私の夫の宗教観について口をはさみません。夫の人間的資質、文学への関心を評価しています。政治、家族への思いやり、歴史、私は夫を盲目的な帰依者だとは思っていません。夫は広い視野を持った人間で、父の無神論に対しては極めてデリケートな態度を取っています。つまり、ふたりは精神的独立を尊重し合っているのです。私はそれを大変喜んでいます」



家族だんらんのお茶の時間

ソゾントとエブゲニアの長女で20歳のネオニラは音楽学校を卒業して、若い聖職者に嫁ぎ、父親が主任司祭を務める教区の教会コーラス隊を指揮している。次女の16歳のベーラは普通中等学校を終えて、現在、司書をめざして勉強している。彼女はコムソモール(青年共産同盟)員である。

「信念の異なる人々の精神的共存という問題は、それほど解決がむずかしいとは思いません」とソゾント司祭は言う。「だれもが自分の考え方を持ち、それを信じる自由があります。それはソ連憲法第五二条にも明記されています。だがそのさい、人間の尊厳を大切にし、各人が無条件に貴重であることを理解し、助け合い、われわれが生命と呼ぶ神聖な贈り物を地球上に維持するように努めなければなりません。善は人々を団結させます」

工場〃自前〃の法律家

本誌記者　ワレリー・グリゴリエフ



工場専属の法律家トゥンザラ・ノブルゾワ（中央）の仕事は企業の仲裁業務だけではない。工場の従業員たちの持ちこむ公私の法律問題の方がはるかに多い。

トゥンザラ・ノブルゾワは、アゼルバイジャン共和国の新興工業都市スムガイトにある大きな合成ゴム工場の法律相談所の所長である。

……書類で埋まっている小さな部屋。だが机の上の花、しゃれた小物は疑問の余地を残さない――この部屋の主は女性である。ノブルゾワは次のように語る。

「工業における法律サービスは一九一七年の10月革命直後に生まれましたが、しかし初めのうちは法律家は少なかった。彼らは主に指導機関――官庁、大規模トラストで働いていました。六〇年代に入ったころ科学技術の進歩は、生産の拡大、設備更新、現代化、管理体系の再編成を要求しました。こうして、ソ連の各企業に社会学、社会心理学の専門家、需要調査の専門家、品質管理グループ、パテント関係の専門家が現れました。そしてもちろん、その中には法律事務所も含まれていました――企業間の複雑な相互関係において法の知識によって工場の利益を守り、工場の金庫にあるお金を一ルーブルたりともむだに支出させないようにする人または人々（人数は生産規模による）が必要になったからです」

――どの企業にも法律家がいるか？

「事実上、います。ごく小さな企業は別ですが。しかしこれらの小企業も自らが所属している上部組織から、あるいは単に一般の法律相談所から法律的援助を受けています」

――工場の法律家はだれに所属しているのか？

「行政的には企業の管理部に従属しています。しかし管理部も、法律家も結局は法律に従属しています。ですから、時には私にも工場を助けることができないことがあります。管理部は被告人が弁護士に期待するように、私に期待しますが、私は個人的感情や同情とは関係なく、相手側の法的理論に負けて、訴訟に敗れることがあります。損害は私が働いている工場が負担します」

――そのことはあなたにとって工場とのトラブルの原因にならないか？

「もちろん、トラブルはいろいろありました。しかしこれはもう感情の問題であって、訴訟を解決したのは法律です。古代人が言ったように、〃プラトンは私にとって友人だが、真実はもっと貴い……〃です」

仲裁業務はトゥンザラ・ノブルゾワの仕事の中で重要な地位を占めているが、彼女の仕事のすべてを占めているわけではない。工場の法律家がはるかに頻繁に直面しなければならないのは、直接工場の人たち、労働者や職員に関係している法律問題なのである。

工場長、副工場長、技師長は来訪者との面会日には必ず自分のコンサルタントとして工場の法律家を招く。トゥンザラ・ノブルゾワの助言なしにはどんな法律上の決定も採択されない。しかし彼女が特に緊密に協力しているのは工場の労働組合だ。労働組合も、工場の法律事務所も、工場で働いているすべての人の労働上の利益と市民的利益を説明し擁護することを使命としているから、両者の機能は極めて近い、と彼女は考えている。

週に2回、ノブルゾワ自身が来訪者と面会する。面接の時間は一応2時間ということになっているが、もっと長いこともある――すべては面会希望者の人数と問題の複雑さにかかっている（「企業では従業員のすべての法律的援助は無料で与えられることを忘れないでほしい」と彼女は語った）。

前回の面会日に彼女が受けた相談を紹介しておこう。

――女子従業員が労働組合に、サナトリウム行きクーポン券を7割引きで提供してほしいと頼んだが、労働組合は拒否し、全額自己負担でクーポン券を買うよう勧めた。労働組合は正しいか？　どこへ訴えるべきか？

――二人の子供の母親である女子従業員が夫と別れることになった。夫は長男を自分のもとに残しておきたいと言っているが、彼女は同意したくない。どうしたらよいか？

――ある労働者が技能資格向上講習会を修了し、職階の引き上げを求めたのに、資格審査委員会は問題の解決を急いでいない。これは許されるか？

――もう一つの離婚問題。夫婦で財産を分けることになったが、法律の規定ではこれはどうなっているか？

――技師が地元のソビエトと衝突した。彼は自分の家族がソビエトから新しい、もっと広い住宅を受け取る権利を持っていると考えているが、ソビエトの方では同じような権利を持った子沢山の家族がほかにいると主張している。法律家の方で正確な調査をすることができないか？

――ある分工場で生産上の紛争が起こった。状況の詳細はかくかくしかじかだが、法の立場から状況を研究・解明するようお願いする……

このように、人々はノブルゾワのもとへさまざまな理由で――仕事上の理由でも、日常生活上の理由でもやってくる。これは彼らの権利だが、一方では彼女の高い権威にもよる。ノブルゾワ自身も、工場での自分の人望は、彼女が一人の老オペレーターの〃訴訟〃に勝ってから高まったと考えている。

第2次世界大戦中に少年だったこのオペレーターは、占領軍に抗してパルチザン部隊の一員として戦った。このため、今では参戦軍人として年金上の大きな特典を受ける権利を持っていた。しかし彼のパルチザン部隊の記録は保管されておらず、オペレーターの手許には彼の過去の戦闘を証明する文書は残っていない。ノブルゾワに渡されたのはオペレーターの青年時代の写真だけだった。ノブルゾワはその写真を焼き増しし、彼が戦ったベロルシアへ送った。ひょっとしたら、住民のだれかが昔の戦友を知っているかもしれない、と。

2カ月後、ノブルゾワは老オペレーターがパルチザン運動に参加していたことを確認した証人が現れたという返事を受け取った。この公文書が、ノブルゾワに訴訟の勝利をもたらすカギになった。

ノブルゾワは若い頃は音楽に熱中し、ピアノを弾いていた。専門家たちも彼女の才能を認めていた――要するに、ピアニストになろうと思えば十分なれただろう。

しかし法律家となり、検事局の取調官として第一歩を踏み出した。工場での仕事を勧められた時は長い間迷っていた――この企業の特殊性を知らなかったからだ。しかしやがて、やりがいのある仕事だということが分かった。

「もちろん、それぞれの具体的な場合に応じて私は相談のために専門家を招請できますし、しばしば実際に招請しています」とノブルゾワは語る。「でも、〃他人のシナリオ〃で解決を求めるのは好きではありません」

彼女は自分の職業を男性的な職業とは考えていない。

「もしこの職業が男性の職業なら、私の母や姉妹についてはどう言ったらいいのでしょう？　母は父と一緒に生涯冶金工場で働きましたし、3人の姉妹のうち一人は石油技師、もう一人は建築技師です。そのかわり私たちの兄は音楽学校で教えていますよ」



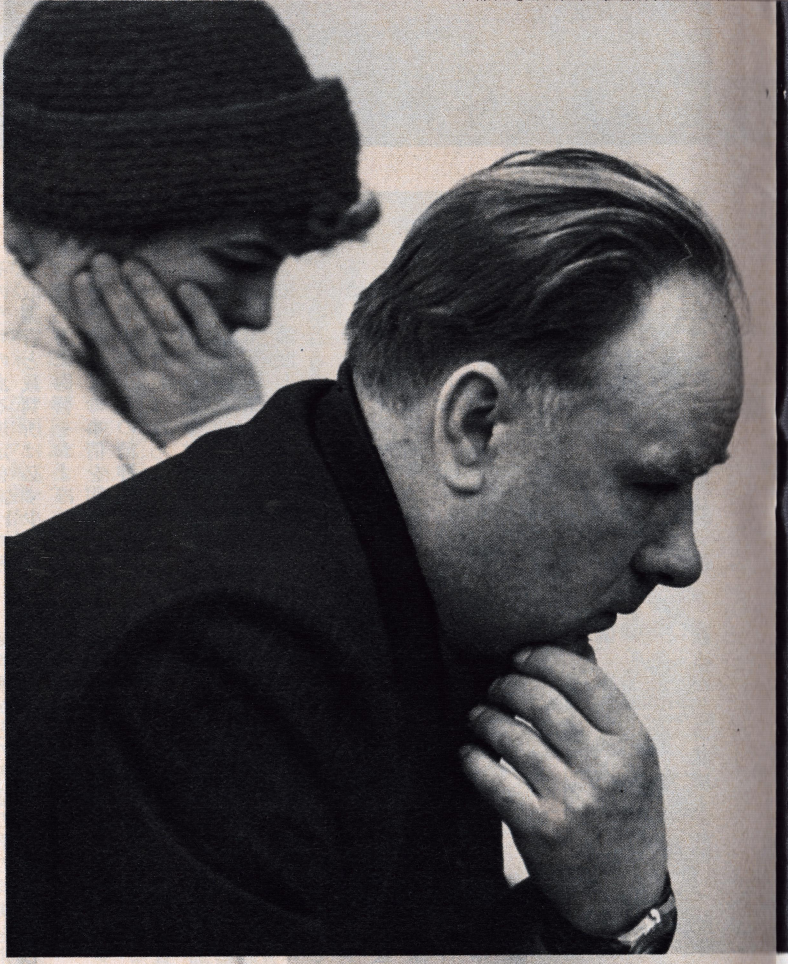
▲
裁判官席——中央がカウナス地区裁判所判事I・マチュナス、その左右が人民陪席判事のA・ビニャウスケネ（技師、左）とR・チェポネネ（女優、右）。

ワルダス少年の裁判

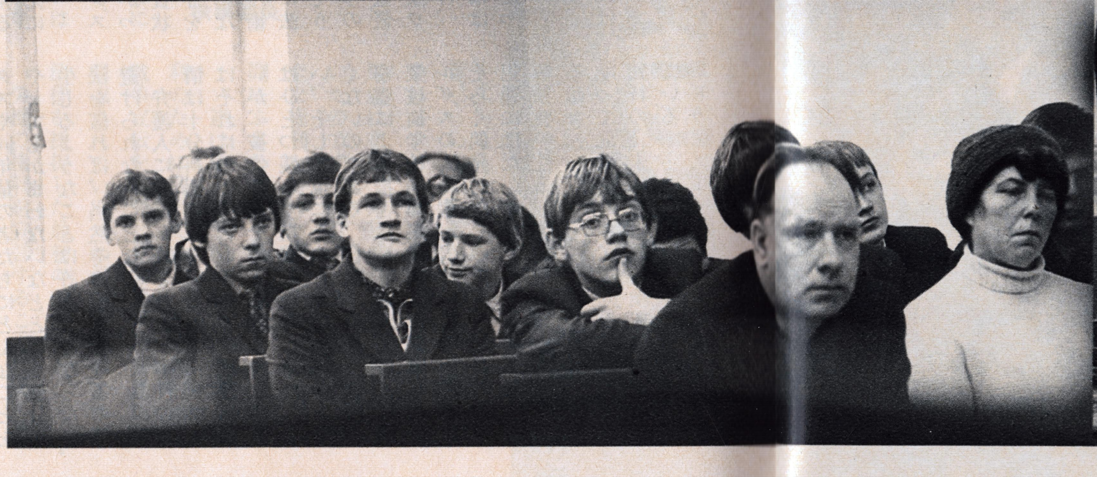
本誌記者 アナトリー・ミロノフ



16歳のカウナスの職業技術学校生徒ワルダス・Zは他人の自動車を盗んだうえ、グローブ・ボックスの中にあった品も失敬して、起訴された。



沈痛な面持ちのワルダスの両親



▼ワルダスの学校の友人たちも裁判を傍聴した。



被告席のワルダス



検事のパウル・ビリマス司法官——「ワルダスを犯罪に走らせたのは、貧乏でも困窮でもない……」



弁護士のユスタス・ドゥンブリャウスカスは、ワルダスの犯罪は悪質な故意のものというより発作的な偶然性の強いものであることを証明しようとして、その根拠を述べた。

おとなら、まして子を持つ父親、母親ならだれでも、年若く、健康でハンサムな少年（記者の息子ぐらいの年齢だ）が被告席に座っている姿を見るに忍びない。

事件が起こったのはリトワ共和国（バルト海沿岸の共和国）の古都カウナス市。未成年（ソ連では18歳未満）の犯罪ということになれば、かなり典型的な事件だ。そして、リトワ共和国検察庁の未成年関係法規順守監察部長のビタウタス・ベギス先任司法官が記者に、法律上の細かな点や微妙なところを説明してあげるから裁判を傍聴してみなさいと勧めたのも、この事件が〝典型的〟であるためであった。

まず、事件の内容を見てみよう。ワルダス・Z（16歳）。カウナス市の職業技術学校の生徒。陽気な夜のパーティーのあと友人たちと別れて、ひとり家へ帰る途中であった。物音ひとつしない夜の通りへ曲がったとたん、誰かの自動車が一台道端に駐車しているのを目にして、ひとつ飛ばしてみるのも悪くないなという気になった。車の窓が降りていたので、難なくドアを開けた。我が物顔で他人の自動車に乗りこんだワルダスは、グローブ・ボックスの中身に興味を持ってのぞきこみ、気に入ったものを自分のポケットに移した。

あまり走らないうちにエンストを起こした。ワルダスはさも自分の車のような顔でタクシーの運転手に車を引っ張ってくれと頼んだ。その運転手はワルダスの頼みをかなえてやったものの、なにか怪しいとみて、無線で交通警官を呼んだ。ワルダスは現行犯というやつで捕まった。そして今、彼は目の前の被告席にいる。

〔ベギス先任司法官の説明〕

ソ連では、満16歳以上の者が法を犯した場合に刑事責任を負う。ただし、社会に大きな危険をおよぼすような重罪を故意に犯した場合に限り満14歳から刑事責任を問う。

ワルダスは自動車の乗り逃げと窃盗を決意した時点ですでに満16歳になっていた。リトワ共和国刑法によると、自動車の乗り逃げは1年以下、窃盗は2年以下の自由剥奪刑を言い渡すことができる。

法は市民の個人財産と財産権を保護するものではあるが、人道的な性格をもっていて、その犯罪の結果や罪を犯した者の人柄をはじめあらゆる情状を酌量することになっている。

では、ワルダス・Zの処分をどうするか？

この問いに答えを出せるのは裁判所だけである。「何人も、法律に従った裁判所の判決によらなければ、犯罪の遂行において有罪とみなされることはありえず、また刑罰を受けることはない」——ソ連の刑事裁判制度の根底にはこの憲法上の原則（第一六〇条）が横たわっている。

事件の審理がいま始まるところだ。審理の参加者を次に紹介する。

裁判所側——カウナス地区裁判所判事イオナス・マチュナス、人民陪席判事アンナ・ビニャウスケネ（技師、婦人）、ルタ・チェポネネ（女優）。判事と人民陪席判事は独立であり、法律だけに従う。また判決を下す場合同等の権利を持つ。

検察側——地区検事パウル・ビリマス司法官。起訴状を最終的に承認し、関係書類を裁判所に回したのはこの人である。

弁護人——弁護士ユスタス・ドゥンブリャウスカス。弁護人は起訴状が提出されたときから、法の定めるところに従って、ワルダスの隣にいる。弁護人はもっぱら被告人の利益のために行動する義務を負う。弁護士を頼んだのはワルダスの両親だが、両親が弁護士を頼まなかった場合、もしくは弁護士の報酬を支払えない場合には官選の弁護士（その報酬は国が支払う）を裁判所が任命する——未成年者が罪を犯した場合には、これが法律の決まりである。

被害者——自動車に異常がなかったことに満足している。車体に損傷はなく、盗まれた物はすべて戻ってきた。だが、被害者がこうむった精神的苦痛はきわめて大きい。こんなことではすまなかったかもしれなかったからだ。

ワルダスが通行人をひいたかもしれなかったし、あるいは未熟な運転のために車体をめちゃめちゃに壊したり、事故を起こして本人が不具になったかもしれなかったからである。

〔ベギス先任司法官の説明〕

未成年者の犯罪に関する刑事事件は訴訟手続きと心理面に多くの特色のある点が際立っている。10代前半の少年少女の犯罪と刑罰に関する連邦構成共和国の刑法と刑事訴訟法の特別条項はこのカテゴリーに属する事件の特殊性を考慮した規定が内容になっている。

そのうちのある規定をあげてみる。取調官と裁判所は必ず少年少女の育ち方に影響をおよぼした生活条件とすべての事情を明らかにし、その少年少女の精神状態を考慮に入れなければならない。未成年者を訊問するときは弁護士のほかに必ず教師と両親が立ち会う。家庭内の相互関係を調べる際には最大限の節度と注意が要求されるが、その若者のつまずきが偶然のものか、それともその人格に容易ならぬひずみがあるかを理解するためには、この家族間の関係を知ることが必要になる。刑もこの点を考慮して決められる。

「裁判官入廷、起立！」しきたりになっているこの言葉でワルダス・Zの裁判が始まった。マチュナス判事が、法律で決められているとおり、被告の母語のリトワ語で審理を進める。落ち付きはらった進め方だ。被告人、被害者、証人にじっくりと質問し、必要な調査結果や鑑定書の内容を読み上げ、審理参加者の陳述を注意深く最後まで聴く。実に簡単な裁判で、主な問いに対する答えを得たがっているだけだという感じを受ける。ワルダス少年が法に背くような重大なことをした原因はなにか。成人の教唆者とか、あるいはワルダスを犯罪に引きこんだほかの人物はいなかったか。このワルダスは人間としてみてどんな少年なのか。ワルダスがもうこんなことをやらない、また今回の事件が彼にとって厳しい教訓になると期待できるかというようなことである。

裁判所がどの程度の刑の判決をするかは、こういった問いに対する答えに大きくかかってくる。

裁判が進んでいくうちに、ワルダスの学校の成績が悪くないことが分かってきた。技術サークルでの工作で賞状をもらったくらいだ。こんどの事件を起こすまで悪いことはなにもしていない。ワルダスの担任教師も、職業技術学校の実習指導員も裁判のあいだに法廷で発言を許された。二人は残念そうに、自分の生徒の犯罪は本人ひとりの罪ではなくて、自分たちや両親の監督不行き届きだと言った。裁判の結果ワルダスが自由剥奪刑にならない場合、ワルダスが放任されるようなことにはならないというのが、二人の意見だった。カウナス地区ソビエト内に設けられている未成年問題委員会や、学友、教師、家族、親友などの助力を得れば、ワルダスは立ち直るだろうというのである。

検事が起訴状にもとづいて陳述を行った。

「ワルダスが犯罪に走ったのは、貧乏や窮乏のためではない。ワルダスの家庭は裕福である。通っている学校でワルダスは中等教育のほかに、電気溶接工という、まっとうで、不自由のない暮らしのできる立派な技能を習得しようとしていた。にもかかわらず、ワルダスは社会的に危険な行為をしたのである。傍聴席にはワルダスの学友たちがいる。裁判所の判決は被告人本人に当然の報いとして与えられるものだが、それだけでなく被告人の学友に対する警告にもならなければならない。ワルダスや同年輩の者たちにどんなことをやってもかまわないなどという気分が生じるようなことは許してはならない。法を破れば、当然その罰を受けるのは避けられないことなのだ」

弁護人に発言が許された。事件の事情は十分糾明されているので、弁護人はそれについて言い争そうには及ばないが、被告の罪を軽くするような事情はひとつ残らず指摘しなければならない。そして現にそのような事情が少なくないのである。自動車の乗り逃げと窃盗による損害は補償されている。職業技術学校当局が裁判所に提出したワルダスの人物鑑定書は、彼の犯罪がおそらく偶発的なものであり、この種の犯罪にはだいたい、この年齢がもつ一種独特の性格、すなわち気分に流される傾きが強いこと、ひとりよがりに陥って危険をおかす傾向のあること、独特の"未成年者的冒険主義"が現れている……。

ドゥンブリャウスカス弁護人は「裁判所に対して私の弁護依頼人（ワルダス）に刑を科するにあたっては自由剝奪刑にしないように求める根拠がそろっている。そして、これは刑罰を免除する行為ではなく、人道的な決定となるだろう」と結んで陳述を終わった。

ワルダス少年の方は深くうなだれたまま被告席に座っていた。質問には動揺を隠した小声で答え、裁判長が聞き返さなければならないほどだった。それでも彼は最後に一生懸命になって、この事件を起こしてすまないと思っていること、心から後悔していることを説明した。

法廷は自動車の乗り逃げと私物の窃盗について有罪と認め、1年半の自由剝奪刑の判決を下したが、1年間の執行猶予とした。これからのことはワルダス本人次第である。彼が執行猶予期間中社会的に危険な行動をしなければ、自由剝奪刑の判決は執行されない。

〔ベギス司法官の最後の説明〕

ソ連では未成年の法律違反者に対してはヒューマニズムの原則が適用される。つまり、初犯で心から改悛（しゅん）の情を示している未成年者の刑を定めるにあたり裁判所は執行猶予を適用する権限を持つ。言い替えると、罪を犯した未成年者を社会、家庭、それから彼が学んでいた、あるいは働いていた集団から孤立させずに、その集団、家庭、法的保護機関、社会団体の助力を得て矯正、再教育するためにできるだけのことをするのである。

ソ連邦検事総長に聞く

本誌記者　ウラジーミル・ベリャコフ



アレクサンドル・レクンコフ
検事総長

ソ連邦検事総長の執務室の壁にはレーニンの肖像が掛かっている。レーニンはソビエト国家の創設者であるばかりでなく、本来、法律の勉強をした人なのである。反対側の壁には、夜の都市の明かりの上を飛ぶ宇宙船の絵が掛かっている。古めかしい置き時計が過ぎ行く時を刻んでいる。この部屋では、時間は厳密に割り振られているが、それにもかかわらずこの部屋の主人は、記者の訪問を快諾してくれた。

人間の尊厳

検事が刑事訴訟を起こし、法律違反者を起訴する西側の多くの国とちがって、ソ連の検察庁はソ連全体のために定められた単一の指令を守っている。すなわち、事件が国家の利益あるいは個人の人権にかかわるかどうかを基準にしている。そのさい、社会の全成員が現実に平等であるという原則が無条件に守られる。

アレクサンドル・レクンコフ検事総長は語る――「何よりもまず、それは人間の生存権にかかわります。ソビエト政権はロシア帝国のかつての"辺境"の諸民族を絶滅から救いました。一九一七年の10月革命の直前、エスキモー、アレウト、ウデゲその他、ロシア極北地域の少数民族は絶滅の危機にさらされていました。帝政は医療、教育、いわんや少数民族の文化的発展について少しも配慮せず、そのため少数民族は事実上の絶滅を運命づけられていたのです。今日これらの民族は、完全な権利を持つソ連の市民として、人間にふさわしい生活を送っています」

ソ連は地上の平和の維持と生きる権利のために闘っている。この権利は、戦争宣伝を重罪と見なす平和擁護法に明記されている。わが国はそのような法律を採択した最初の国である。

労働の権利を宣言することによって、ソビエト政府はすべての市民に働く場所を保障した。一九三〇年末から、わが国には失業はない。そればかりでなく、わが国には禁じられた職業はなく、だれもが能力や好みに応じて職業を選択することができる。好きな仕事、気に入った仕事と寿命の間には直接的な関係があることはよく知られている。これは米国の学者さえも認めている。

ソビエト政府は、帝政ロシアから引き継いだ文盲を、掛け声だけでなく、実際に根絶した。帝政ロシアでは住民の半分以上が読むことも、書くこともできなかったのである。ソビエト政府は小学校から大学に至るまで、すべてのレベルの教育を無料にし、それによってだれもが教育を受けられるようになった。それだけでなくソビエト政府は、大学生には国家奨学金を、小中学生（現在ソ連には四〇〇〇万人以上いる）には無償の教科書を与えている。

住宅を受け取る権利はソ連国民の固有の権利である。住宅問題はソ連ではまだ完全には解消されていないが、もはや深刻ではない。一九七一年から一九八二年までの間だけでも一億二七〇〇万人（これはわが国の人口の約半分）が新居に移ったか、住宅条件を改善した。ソ連には家なしはいない。貧民窟や穴倉、木賃宿で暮らしている者もいない。政府はすべての世帯に独立したフラットか一戸建ての住宅を保障するという約束を、きわめて近い将来に実行する決意に満ちている。市民の住宅は市民のものであり、路頭に放り出されることはない。

ソ連検事局はこのような法律の本質を守っているのである。そして法律はわが国のすべての市民の生活と尊厳を守っているのである。

人権

ソ連検察庁はまた市民の政治的自由――言論、出版、良心の自由その他がどのように実現されているか、何らかの宗教を信じる権利、あるいは信じない権利がどのように実現されているか、信書と電話の秘密、個人の自由、人間の尊厳と健康がどのように守られているかを監視している。

ある種の制限や禁止について言えば、それらは国連総会で承認された市民的権利と政治的権利に関する条約の第一九条に完全に一致している。この条約は「国家の安全、社会秩序、住民の健康あるいは道徳性を守るために」法律によって制限を定めることを認めている。ついでながら、同様の制限は米国、日本その他の国々の法律にも見られる。

「われわれはそれを正当なことだと見なしています」とレクンコフ検事総長は言う。「たとえば、わが国では、人種的憎悪や民族主義を宣伝することはだれにも許されていません。

しかし、わが国では見解のために人々が罰せられることはありません。行為と信条ははっきり区別する必要があります。わが国には政治犯はいません。何を考えてもかまわないからです。ただ、個人的な信条が違法行為の形をとれば、だれかがそれを他人に呼びかけたり、それを励ましたりすれば、そのときは法律が適用されます」

レクンコフ検事総長が挙げた例によれば、ヨシフ・ベグンという53歳の男が人種差別的見解を宣伝していた。彼は特に、ユダヤ人は最高の人種の代表であり、ソ連の他の諸民族は最低の人種だと主張した。同時にベグンは、反ユダヤ的自家出版物を住民の間に広げていた。それはユダヤ人に他の諸民族に対する憎悪を呼び起こさせ、民族間の憎悪を煽り立てるためだった。そればかりでなく、ベグンは、暴力的な方法による変革も含むわが国の国家体制の変革を系統的に宣伝していたのである。そのためにベグンは7年の自由剝奪と5年の流刑を言い渡された。

モシェ・アブラモフ、30歳は、サマルカンド（ウズベク共和国）のユダヤ教徒会の会長を侮辱し、殴打した罪で一九八四年1月、3年の自由剝奪が言い渡された。これは教徒会の会員たちがアブラモフの行為を〝市民的モラル並びに宗教的モラルに対する冒とく〟と断じて告発した結果だった。

一九七五年のヘルシンキ合意に応じて、ソ連からの外国移住は離散家族の再統合の原則にもとづいて行われている。現在、離散家族の再統合のプロセスは基本的には完了している。まだごくわずかながら外国に親族がいて、その親族のところへ行くことを希望している人々がいることは確かだ。これらの人々が出国を拒否されているのは、あらゆる国際法でも正当と認められている理由による。これらの人々が国家機密あるいは軍事機密に属する情報と関係があるか、出国すれば、祖国を棄てたいと思っていない未成年の子弟や高齢の親の死活的な権利や利益が著しく損なわれる場合である。

だが、時がたてば、情勢は変わる。子どもたちは成人し、親たちは死ぬ。そうすれば、出国申請は再検討される。最近の5年間に、以前には拒否されていた八〇〇〇人以上の申請が受理され、これらの人々はソ連から出国した。

社会的自衛

ドン河畔の古いコサック村の貧農の息子アレクサンドル・レクンコフは、大学で法律を学び、ロストフ州の地区検事から出発した。第2次世界大戦中、彼は砲兵士官として転戦し、ケーニッヒスベルク（現カリーニングラード）まで行き、そこで一九四五年4月、重傷を負った。一九八一年2月、彼はニュルンベルク裁判のソ連首席検察官を務めたことで知られるロマン・ルデンコのあとを継いでソ連検事総長になった。

5階にある検事総長の執務室の窓はポプラやボダイジュが植わった中庭に面しており、そこからソ連邦検察庁の受付が見える。

レクンコフ検事総長は言う――「われわれは毎年二万五〇〇〇人の来訪者を受け付け、一五万通の手紙を受け取ります。苦情や提案が、市民の個人的な利害に関するものだけでなく、国有財産の保護、社会秩序や環境の保護についての配慮といった社会的な利害に関するものも多いというのが現在の特徴です。人々自身が、国民の意思で確立された法規を破る者に対して、我慢できないのです。人々は詐欺師、収賄者、密猟者を告発します。住民の協力によってキエフ（ウクライナ）、ロストフ・ナ・ドヌー（南ロシア）、ウズベキスタン（中央アジア）のいくつかの地域の商業システムを利用していた犯罪グループが摘発されました」

たとえば、任命や更迭にさいして援助や手加減をした謝礼に賄賂をもらっていたロシア連邦共和国商業次官パーベル・ルキヤノフが解職され、有罪判決を受けた。ルキヤノフは小型乗用車〝ラーダ〟3台分の値段に相当する二万三〇〇〇ルーブルをポケットに収めたが、問題は賄賂の額ではなかった。われわれの正常な価値観や理想とは相容れないような行為そのものが問題だった。

ウズベク共和国の何人かの責任ある働き手が長い期間にわたって、周囲の保護のもとに、綿花の調達にさいして小細工を弄し、国家のカネで自分の懐を肥やしていた。人々の協力でこの着服者たちが摘発され、彼らは刑事責任を取らされた。

生活環境を汚さないための闘いが実質的にわれわれすべての関心事になり、環境保護の最前線が河川、湖沼、海にある現在、司法関係者は世論の側からの大きな圧力を感じている。だが、司法関係者は孤立しているのではなく、自然を守るためにみんなが闘っている。

とはいえ、目先の経済効率を追求するあまり、しばしば長い目で見た利益や自然保護の目的を忘れてしまう企業指導者も跡を絶たない。検察庁は法の順守を厳しく監視し、違反者を罰している。

たとえば、チョウザメ類の世界的な生息地であるカスピ海に浄化してない廃水を投棄していた西カザフスタンのグリエフの石油精製工場長とパイプライン局長が起訴された。

現地の川を廃水と石油製品で汚染したかどでマロシュイカ（北西ロシア、アルハンゲリスク州）鉄道機関庫次長が有罪判決を受けた。彼はまた、損害を償うために三〇〇〇ルーブルの罰金を科せられた。

木材の不正な流送によってアムール川（ソ連極東）の魚に損害を与えた公務員が責任を取らされた。

法律に例外はない

故意あるいは過失によって法律に違反した人は、容赦なく責任を問われる。

だが、法の番人が法律を破った場合はどうか？

レクンコフ検事総長に語ってもらおう――「残念ながら、われわれにだって誤りはあります。われわれは完全で客観的な審理を定めた法律の要求を断固順守するためのねばり強い措置を講じていますが、法律違反はまだ完全には根絶されていません。そのような例は少ないとはいえ、その一つ一つは異常な出来事と見なされています。法律に違反したかどで、最近でも数人の検察庁の指導的な働き手が解職されました。

われわれは自分たちの誤りを認め、それを正すことにやぶさかではありません。人間の尊厳と人権の尊重こそ、わが社会のこの上なく貴重な価値なのです」

催し物のお知らせ

☆エストニアの人形劇エストラーダ

山形・市民会館大ホール（11月18日）、仙台・白鳥ビルホール（11月19日）、茨城県美浦村・中央公民館（11月20日）、飯田・市公民館（11月23日）、飯田・県文化センター（11月24日）、北九州・子ども文化会館（11月27日）、大阪・阪急5オレンジルーム（11月28日）、和歌山・市民会館小ホール（11月30日）、前橋・群馬県民会館小ホール（12月2日）、松江・福祉センター（12月4日）、名古屋・名演小劇場（12月6日）、静岡・市民文化会館大会議室（12月7日）、浜松・福祉文化会館（12月8日）、東京・プーク人形劇場（12月9—11日）、取手・福祉会館（12月12日）

▽お問い合わせは、プーク人形劇場（東京都渋谷区代々木2-12-3、電話03・379・0234）。

☆タチアナ・ニコラエワ・ピアノリサイタル

京都・京都こども文化会館（11月12日）、東京・東京文化会館小ホール（11月15日）、厚木・市文化会館（11月16日）、東京・東京文化会館大ホール（11月18日）、福岡・福岡銀行本店大ホール（11月21日）、那覇・市民会館（11月23日）、清水・市民文化会館（11月24日）、名古屋・スタジオ・ルンデ（11月25日）、国立・国立音楽大学（11月26日）、武蔵野・市民文化会館（11月29日）

▽お問い合わせは、コンサート・エージェンシー・ムジカ（電話03・461・2590）

☆ソビエト名作映画鑑賞会

11月＝11月25日(月)「ボリス・ゴドノフ」
12月＝12月19日(木)「ボウァンシチナ」
（いずれもオペラ映画）

▽会場・東京・大手町・日経小ホール
▽開映・6時15分／入場料800円
▽お問い合わせは、㈱日本海（電話03・262・4131）

☆第19回日ソ学院祭

12月7、8日。

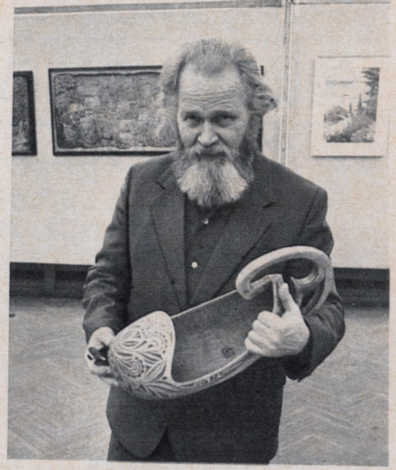
▽日ソ学院（東京都世田谷区経堂1-11-2）
▽ロシア語劇、講演、ロシア語書籍バザーなど。
▽お問い合わせは、日ソ学院・学院祭実行委（電話03・425・4011）。

文化トピックス

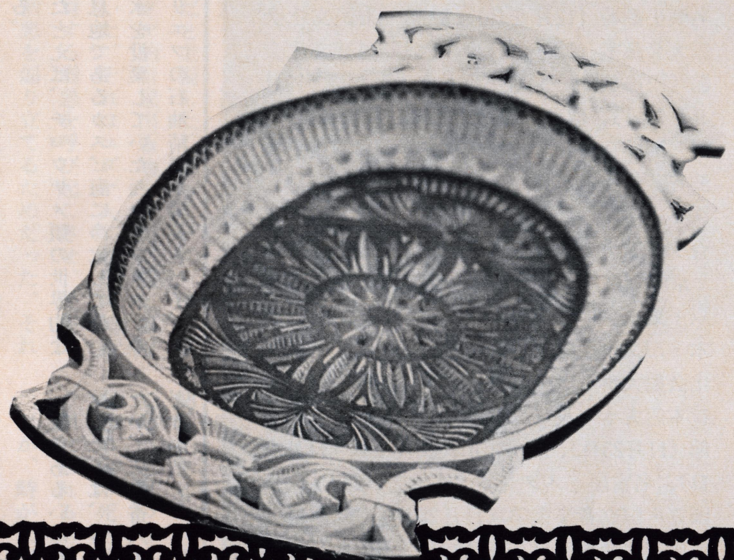
趣味が高じて木彫の名人

児童美術学校の教師クロニド・ゴゴレフ（写真右）は木彫の名人。老木の根や木株、枝を見事に生き返らせる。ボダイジュの木に巧みに彫られた模様はまさに絵画そのもの――風景画は特にすばらしい。また物語性のある作品も少なくなく、例えばこんな木彫もある。おじいさんとおばあさんが農家の中に居る。おばあさんは糸をつむぎ、おじいさんは悪いことをしたらしく何か言い訳をしている……

ゴゴレフが木彫に取り組み出したのは10年前だが、いまではこの趣味に暇な時間を全部つぎこんでいる。



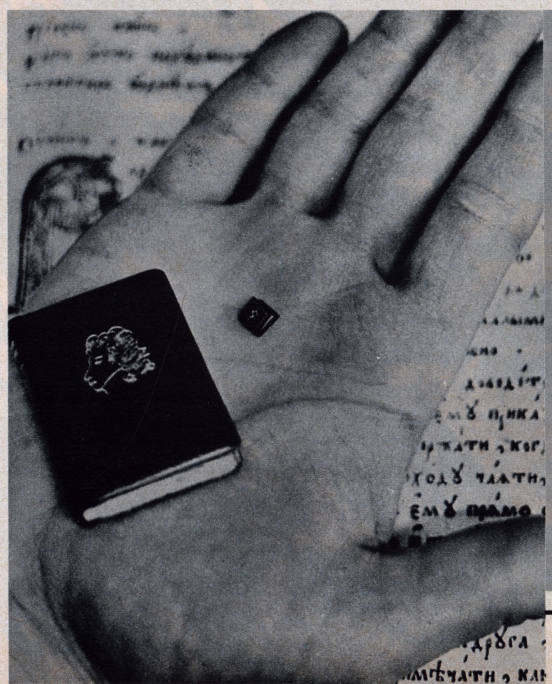




モスクワ大学の稀覯本

モスクワ大学には10年前から常設の「学術図書館所蔵の稀覯本と写本」展示室があるが、展示されているのはほんのごく一部で、書庫には二〇万冊以上の稀覯本、写本が保管されている。ここには中世のギリシャ語、ラテン語、フランス語、東方の言語やスラブ語の写本、スラブ語とロシア語の初期印刷本、版画やポスターのコレクションなどが納められている。なかでも18～19世紀のロシアの著名な詩人、作家、社会活動家、名司令官など43人の個人蔵書は書庫の自慢の品。写真右は古地図の保存状態を調べる学芸員。写真左は豆本。





装い新たなクレムリンの寺院

モスクワ・クレムリンの美しい古建築アンサンブルの一つ、ブラゴベシチェンスキー寺院（15－16世紀建立）の修復工事が終わった。構成的にも建築学的にもクレムリンの中心になっているソボルナヤ広場に面するこの寺院は、かつてのツァー一族用の教会で、白壁に被せ金をした表玄関のインテリアが美しい。ここのイコノスタス（聖障）はイコン（聖像画）を何段にも並べた15世紀初めの聖障の中でも最古のもので、当時としては最高のものの一つだった。イコンの中には14－15世紀ロシアの絵の巨匠アンドレイ・ルブリョフとフェオファン・グレクの作とされているものもある。

修復には5年を費やし、技術者たちは円屋根の被せ金を復元し、建物の防水を改善した。壁画やイコノスタスに元の美しさがよみがえり、青銅や銀の手提香炉も装いを新たにした。修復完了に伴い、博物館「ブラゴベシチェンスキー寺院」も再開された。



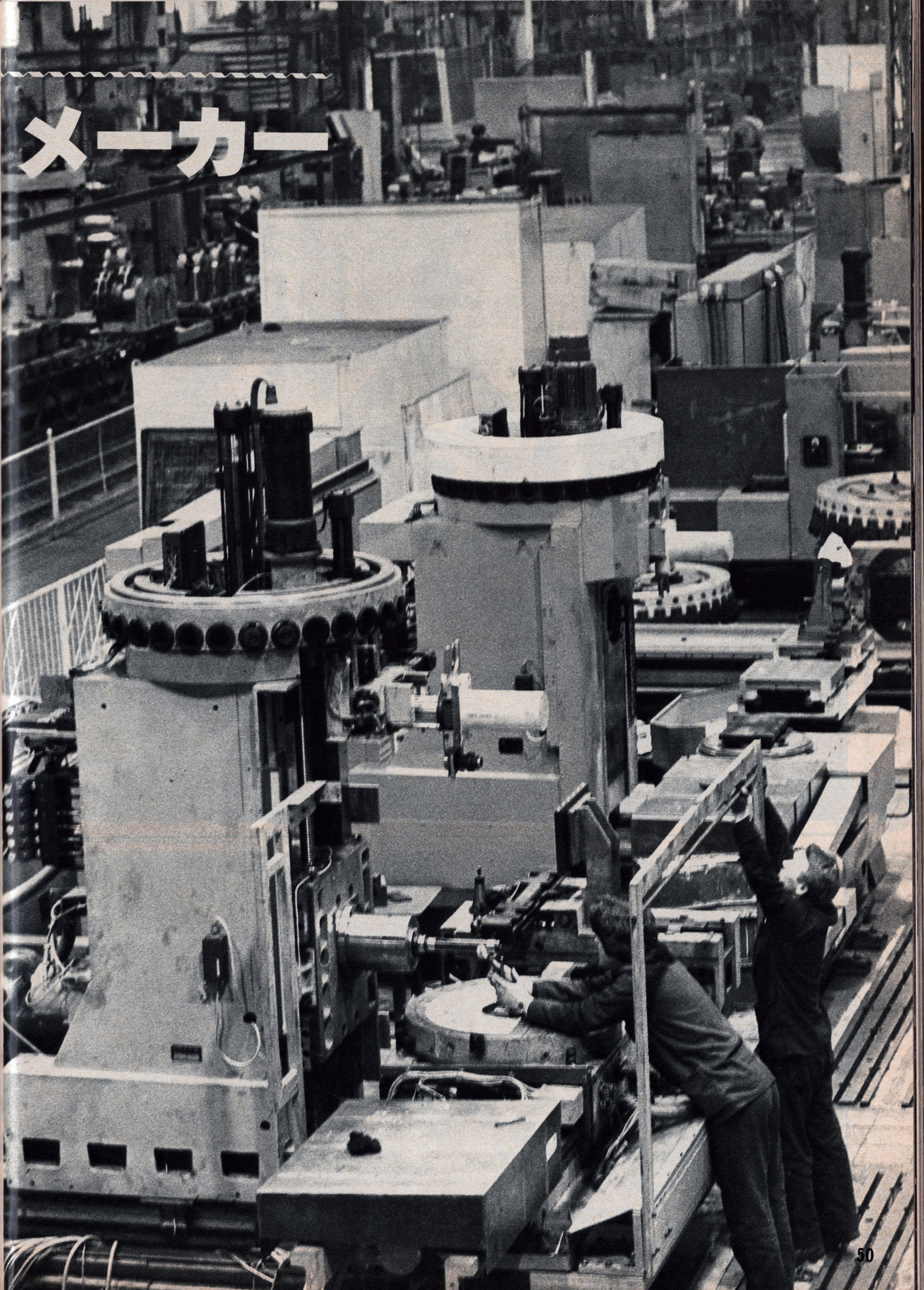
工作機械開発のトップメーカー

——ウラジーミル・カバイゼとイワノボ生産合同

本誌記者 パーベル・シャリコフ



イワノボ生産合同のウラジーミル・カバイゼ総裁（右）



▶ソ連邦50周年記念イワノボ工作機械生産合同。FMS用のマシニングセンター「タルカ500」、「グローブス・センターPMF4」がここで生産されている。

実際は個人の力ではなく、大勢の人の力によって進められている事業なのに、その事業が一人の個人の名に結びついていることが少なくない。そういう場合でも、もしまさにその人が、他の人々を立ち上がらせ、団結させ、困難と失敗を克服して全体的な成功に導いていたならば、それはリーダーに対する正当な評価と言っていいだろう。

ウラジーミル・カバイゼはこのようなリーダーに属する。

カバイゼは一九七〇年以来、イワノボ市（モスクワの北東二五〇㎞）のソ連邦結成50周年記念工作機械生産合同の総裁として働いている。最近ここの銘柄は機械製作や金属加工業に関係のある人々の間で名が知られるようになった。ここの製品はソ連だけでなく多くの工業国で使われ、大変評判がいい。

イワノボ工作機械生産合同はマシニングセンター——一つの工程だけを受け持つありふれた工作機械と違って、各種の加工作業を工作物の取り付け取り替えなしに自動的に処理する工作機械——を生産している。このようなマシニングセンター（多能自動工作機械）は部品製造の手間を$\frac{1}{5}$から$\frac{1}{6}$に減らし、およそその分だけ人員も節約できる。ボリス・バリモント・ソ連工作機械・工具工業相はイワノボ工作機械生産合同の経験が指し示す将来性を評価し、このマシニングセンターを全国的規模で使用すれば一三〇万人の労働力（工作機械オペレーター）を削減でき、七〇万人の補助労働者も節約できると考えている。

ウラジーミル・カバイゼは60歳をちょっと越えたばかり。一九四一年には中等学校の教室から真っすぐ戦線へ向かった。勝利のあと工作機械製作大学の学生になった。卒業後は技師、設計者、リャザン工作機械工場主任設計技師として働き、イワノボには最初から工作機械生産合同の総裁として迎えられた。

カバイゼが総裁になる前はここでは普通の金属加工用工作機械が生産されていた。これはソ連やその他世界中の多くの工場で生産されている普通の単能工作機械だ。需要は結構多かったのだが、一工程ずつの金属加工が機械工業の全体的発展のテンポを鈍らせていることは、年を追って明らかになった。そのために工作機械工業の関係者に対し技術の質的革新がますます執拗に求められるようになっていた。

こういう状況を踏まえ、工作機械製作工業部門の指導部は設計技師のカバイゼを工作機械生産合同の総裁に任命し、凝り固まってしまった生産現場の因習を打破するために、カバイゼの持っている技師としての大胆な発想と決断力に期待した。

カバイゼ新総裁は企業の実情を把握するやいなや、製品の質の革新を図るには二つの方法があるとにらんだ。第一の方法は、主要部品とユニットをもっと最新のものに取り替え、イワノボ製工作機械を近代化し、そうすることによって機械の生産性、信頼性を高める。第二の方法は——こっちの方がずっと将来性があるが——原理的に

まったく新しい工作機械をつくること。この工作機械は多くの工程を結合させ、与えられたプログラムで動き、完成品を作らねばならぬ。

総裁はある職場会議で工場の従業員に向かって呼びかけた――「さて皆さん、皆さんを困難な事業にご招待したい。工場がこれから生産する機械は今のところまだソ連でも、外国でも製造されていない。私は〝今のところまだ〟と言った。1―2年先には世界の有力な会社が生産するようになろう。もし一番乗りしたいなら1年間でやり遂げねばならない。ぐずぐずしていると後れをとる」

どんな困難が待っているかみんなが理解していた。今まで生産していた機械の生産をストップすることなく、新製品の生産に切り替えねばならぬ。工作機械・工具工業省は研削機械の計画出荷台数を免除してはくれない。それでも1年後にはマシニングセンターの量産にこぎつけた。

これはリスクだった。二〇万ルーブル（1ルーブルは約三〇〇円）もするマシニングセンターが試験的に1台だけ生産されるのとはわけが違う。この高価な機械が一挙に量産されるとなればもう失敗は許されない。試験機の製作の場合はうまくいかなくても失敗作だったとして費用は経費から落とせる。ところが量産を開始したからにはそうはいかない。一〇〇％の保証が必要だ。

カバイゼは新製品を成功させるすべての要因を正確に計算した。設計上の大胆さのほかに信頼性の高い技術的保証と製作者のすぐれた技能が必要だということをよく理解していた。大きな集団の組織者としてカバイゼ総裁は共同作業を成功させるための心理的バックアップに力を注いだ。総裁が作り上げた信頼の雰囲気――正確には従業員一人ひとりの能力に寄せる期待が従業員にやる気を起こさせ、そのエネルギーは倍になった。

工場の設計局のニコライ・ボンダレフスキーが私にこの期待がどれほど推進力になっているかを語ってくれた。ボンダレフスキーは30歳で、設計技師としての経験も7年に過ぎない。だが、マシニングセンターが他の諸工程と並んで旋盤工程も行えるようにするキー・ユニットの一つを設計したのは、ほかでもない、この人だった。

今、イワノボ製工作機械は世界最高水準にある。ここのマシニングセンターは米国、ドイツ連邦共和国、スウェーデン、スイス、日本の主要な機械会社が喜んで購入している。

イワノボの工作機械製作者たちの業績が認められ、一九八三年にはカバイゼ総裁と新技術の開発に特に貢献した技師と労働者に国家賞が授与された。

そのうえ今年は、カバイゼ総裁に社会主義労働英雄という高い称号が与えられた。

こうしてイワノボ生産合同は成功し、認められた。生産合同は計画課題を超過達成しながらリズミカルに働いている。第11次5カ年計画の目標は予定より約8カ月も前に達成された。年末までにあと一一〇基のマシニングセンターを追加生産する予定だ。

こんな大仕事をした後ではもう静かな生活をしてもよさそうなものだが、カバイゼにはまだまだ新たな計画と企画がいっぱいある。今年6月のソ連共産党中央委員会の科学技術進歩促進問題の会議でカバイゼはそれらの計画を語った。とりわけカバイゼは自分自身が開発した、技師や技術者の創意を物質的・精神的に刺激する新たなシステムを採用し、また〝専門家をくだらない作業から解放する〟――と彼は言っているのだが――ために設計作業のかなりの部分を自動化しようとしている。

次期5カ年計画期（一九八六―一九九〇年）にはマシニングセンターの性能アップを図りつつその生産を著しく増大できるだろうと総裁は確信している。

工作機械製作の次の質的成長の段階はどんなものになるだろう？ それはもう分かっている。ある製品から次の製品の製造に速やかに対応できるフレキシブル生産システム（FMS）の開発作業に、カバイゼは技師としてまたリーダーとして参加している。このFMSはマシニングセンターと半製品や完成品の自動倉庫とを自動搬送設備がつないでいる複合体である。このようなシステムは一つはもう開発ずみで、「タルカ500」という。これはモスクワの国際見本市「金属加工84」で展示公開され、専門家に高く評価された。

だがカバイゼ自身はこれを、FMS開発途上のただ単なる〝観測用気球〟としてみている。めざすFMSはよりコンパクトで、エネルギー消費量が小さく、より生産性が高いシステムであるべきだと考えているからだ。

「このシステムを完成させたら、私はちょっと休息をとろう」――総裁はこう言う。

だが彼を知る人は皆そんなことはあるまいと思っている。あらゆる点から見て、〝カバイゼの会社〟――イワノボ合同は今やしばしばこう呼ばれる――は、世界の工作機械メーカーのトップ・グループの中にしっかりと根を下ろしている。

ソ連共産党第27回大会に向けて

発表されたソ連共産党綱領（新稿）草案

10月26日、ソ連各紙にソ連共産党綱領（新稿）草案の全文が発表された。この草案はソ連共産党中央委10月総会が全会一致で採択したもので、全党員、全勤労者の広範な討議に付されている。党綱領（新稿）草案は、資本主義から社会主義への移行に関する理論的諸命題を明らかにし、社会主義の完成と共産主義への漸次的移行に関するソ連共産党の課題、さらに国際舞台における課題を定めている。以下はその要旨。

10月大革命によって始まった社会的解放の全世界史的プロセスは、ドイツ・ファシズムと日本軍国主義の壊滅後、欧州、アジア、つづいて米大陸の一連の諸国における搾取者の権力の打倒となってあらわれた。ソ連で最初に現実となった社会主義は、世界体制に変わった。新社会建設のマルクス・レーニン主義理論は国際的規模で実践によって点検され、社会主義は地上の広大な空間に確立され、その争い難い優位性は多くの国の手本の中ではっきりと裏付けられ、幾億人もの人々が共産主義文明の建設の道を進んでいる。

ソ連の共産主義的展望を特徴づけながら草案は、ソ連共産党の最終目標がソ連における共産主義の建設であることを指摘している。社会主義と共産主義は、単一の共産主義的構成体の連続する二つの局面である。

共産主義とは、生産手段が単一の全国民的所有となっており、社会の全成員が完全に平等であるような、階級のない社会体制のことであり、そこでは人間の全面的発達に伴って、生産力もまた、不断に進歩する科学技術にもとづいて発展し、社会の富のすべての源泉が満々とした流れとなってあふれだし、「各人は能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」という偉大な原則が実現される。共産主義とは、自由な、自覚した勤労者の高度に組織された社会であって、そこでは社会的自治が確立され、社会の幸福のための労働が万人にとって第一の生活欲求、自覚された必要となり、各人の能力は国民に最大の利益をもたらすように用いられる。

ソ連共産党の新綱領草案には、党の経済戦略、社会政策、ソビエト社会の政治体制の発展、思想教育活動、教育、科学、文化の分野における課題が定められている。

国際舞台での、平和と社会進歩のための闘争でのソ連共産党の課題を扱った部分では、党の政策の主要な目標として次のことが挙げられる。

――ソ連における社会主義社会の完成と共産主義への前進のために有利な対外的条件を確保すること。世界戦争の脅威を排除し、全般的安全と軍縮を達成すること。

――ソ連と社会主義兄弟諸国の協力を不断に拡大深化し、社会主義世界体制の強化と進歩を全面的に促進すること。

――解放された諸国との同権の友好関係を発展させること。

――平和共存、実務的な互恵の協力を基盤にしてソ連と資本主義諸国の関係を維持し発展させること。

――共産党および革命的民主政党、国際労働運動、諸国民の民族解放闘争との国際主義的連帯。

対外政策の諸問題に対するソ連共産党のアプローチは、ソ連国民の利益の確固とした擁護、帝国主義の侵略政策への断固とした抵抗と、対話への用意、交渉による国際問題の建設的解決への用意とを兼ね備えている。

ソ連共産党は厳粛に次のように声明する――ソ連が相互的な基盤に立って有効な管理の適用のもとで制限または禁止する用意のないような兵器はない。

草案には、世界労働運動と共産主義運動におけるソ連共産党の役割と地位を扱った特別の章が割かれている。

ソ連共産党は、国際共産主義運動の構成部分である。ソ連共産党は、社会主義社会の完成と共産主義への移行をめざす自己の活動を、その解決が世界社会主義体制の利益、国際労働者階級・全人類の利益に合致する最重要の国際的課題であると見ている。

ソ連共産党は、各国の共産主義者が自主的に情勢を分析・評価し、自己の戦略方針、自己の政策、近未来および終極の目的のための闘争、共産主義の理想のための闘争のあれこれの路線の選択を自主的に決定するという点から出発している。

さまざまな国の帝国主義層は社会主義、あらゆる民主勢力に反対する各自の行動を緊密に調整し、一部の諸国の共産党を他の諸国の共産党と対立させようと努めている。こういう条件下で、プロレタリア国際主義、共産主義者の同志的連帯の意義が増大している。

ソ連共産党は個々の問題に関する意見の不一致の存在は諸共産党の国際的協力、その統一行動の妨げにはならないと考えている。

ソ連共産党は社会党、社会民主党、労働党との関係発展の方針をつづける。

ソ連共産党は国際労働運動の全隊列の協力の積極化、さまざまな国の種々の方向の労働組合、青年・婦人・農民その他の民主的組織との共同行動を深めることに大きな意義を与えている。

はるかなりオーゼロ・バイカル(下)

文 伊藤俊郎　絵 大塚勇　写真 八木下弘



スリュジャンカの大理石採掘現場を見る。左端が地区長のガリーナさん。

イルクーツクをたって、バイカル湖南端の町スリュジャンカに行く。ウ氏（ウラソフ）とツカさん（大塚）、ヤギさん（八木下）、私（伊藤）の四人組である。

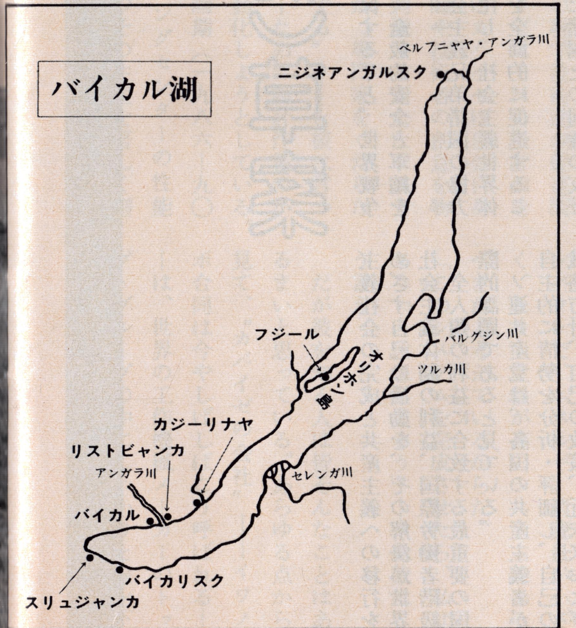
女性でスリュジャンカ地区長という要職を占める、堂々たる恰幅のガリーナさんが、大理石工場長ゲルベルト氏といっしょに案内してくださる。

「ここは工業地域ですが、いちばん重要なものは大理石の生産です」とのこと。採掘現場に案内されておどろいた。目の前にひろがるこのあたりの全山、そして私たちの立っている足下も、すべて白い大理石の山なのである。埋蔵量はほとんど無限に近く、今はとりあえず五十年間（！）の採掘計画をもっているという。なんとも規模の雄大な話だ。

その夜は、バイカリスクの町から三キロばかりはなれた、静かな白樺林のなかにあるサナトリウムで一泊。翌日バイカリスクのバイカル湖公害研究所、付属の専門学校などを見学したのち、車でチョープルィエ・アジョーラ（暖かい湖）に向かう。

ここはブリャート自治共和国との国境に近い保養地で、その名のとおり気温が温暖で、冬期ここからあまり離れていないスリュジャンカに比べると10度ぐらい暖かいという。これは、周囲を山脈に囲まれた小さな三つの湖が、その特殊な地形のため、夏に吸収した熱を、冬期に放出するためとのこと。

白樺の原生林にかこまれた湖は、エメラルド色にすみわたり、水底の藻が光りながらゆれている。その上を数羽の白鳥がすべってゆく。また、この近くをスニェージナヤ（雪の川）という清流がながれている。





オリホン島で会った人たち（大塚勇・画）

それからスリュジャンカにとって返す。汽車の時間に間に合わないといけないというので、運転手はこの際は自分の腕の見せどころと、駅まで60キロの道を時速150キロ以上のスピードですっとばす。バイカル湖畔にそったほとんど一直線の道で、対向車もあまりないが、時折すれちがうときはヒュッと空気をきる音がする。身体がときどきフワッとうきあがり、頭を天井にぶっつけそうになる。ハラハラし通しだった。

それでも運ちゃんのすばらしい手腕も十分に披露でき、さいわい事故もなく、このカー・レースさながらの車は、発車寸前の汽車が待つ駅に無事すべりこむ。地区長のガリーナさんたちが、見送りに来てくださっていた。

それからは汽車の旅である。スリュジャンカから湖岸に沿い、アンガラ河口の町バイカルにいたるこの路線は、かつてシベリア本線の一部だった。（今は本線は、スリュジャンカから直接イルクーツクに通じている）

四十年前、捕虜として輸送されたとき、私たちはこの線路の上を貨車で運ばれたものだった。感慨が深い。

「あのときは粉雪が降っていて寒かったな」と私。

「九月の末だったね」とヤギさん。

一九四五年に暗い思いで通った同じ路線を、今は自由な旅行者として走る。車窓から見る今日のバイカルの空は晴れ、水は澄み、白波がゆるやかに岸を洗っている。それは当時とちがった今の私たちの、はずんだ気持をあらわしているようだ。

バイカルの駅につき、そこからアンガラ河口をへだてた対岸のリストビャンカに渡り、一泊する。明日はいよいよ、バイカル湖の中央にうかぶ秘境オリホン島行きである。

バイカル湖のほぼ南端にあるバイカルから、北端のニジネアンガルスクまでの約六百キロを、脇目もふらず一気に突っ走るのが、水中翼船コメータ号である。所要時間10



オリホン島の北端ハボイ岬で。右端がブリャニチニコフ町長、中央はブリャート人の運転手君。



フジールの町（オリホン島）。背後は草原とマツの森林。

時間。いわば湖の南北をむすぶ特急便だが、この便が運行するのは夏の三カ月だけで、他の季節は結氷や悪天候のために動かない。

さいわい今年はまだ走っているこの船で、オリホン島にゆくことになる。ただし、本来の運行ルートならこの島にはとまらないのだが、ウ氏が話をつけて、とくに寄り道してもらい、私たち四人を島まで送りとどけてもらうようになっている。

水中翼船は速い。時速65キロで、白波を蹴立てて北上する。湖中から見る沿岸は、その裾を水にひたした巨大な山塊が、どこまでもつらなっている。プリモルスキー山脈である。

四時間で船は、波しずかなオリホン島のザグリー湾に着く。私たちとその荷物だけを桟橋に上げたコメータ号は、さも忙し気に白い航跡を引いて、みるみる小さくなり湾のかなたに消えてゆく。まわりは、見渡すかぎり草原の起伏と青い空、湖だけで人っ子ひとりいない。なにやら心細く、島流しになった俊寛の気持になる。

なにもすることがないまま、大の男が四人、ぼんやりと草の上で日向ぼっこをしたり、所在なげに歩きまわったりしている。

「ウラソフさん、これからどうなります？」

「チョットー、ワタシノカンガエデハー、今ニダレカ、ムカエニクルデショウ」

なるほど三十分ばかりすると、はるかかなたの丘に豆つぶほどのジープがあらわれ、それがどんどん大きくなってくる。

案内に来たのは地区共産党第二書記のペストーモフさんだった。これから、この島唯一の町フジールに案内するというので、ジープに乗りうつり、ものすごい勢いで凸凹の草地を走る車の上で、ふり落とされないように用心しながら、この島の概要を聞く。

オリホンとは、ブリャート語で「小さな森」という意味。島の大きさは南北72キロ、東西12～15キロというから、佐渡島より一廻り大きいことになる。しかし人口は1600にすぎず、そのうち1200がフジールに住む、とのことだ。フジールのほかに、七つの村がある。この島の産業は、漁業と農業、牧畜で、そのうち漁業がいちばん盛んである、という。



オリホン島バランツェ村のブリャート人、ダクスーエフさんの一族。ここで一行は昼食をごちそうになった。





湖上めぐりの船の乗組員（大塚勇・画）

その魚工場の工場長マモントフ氏に会う。一九四五年に一兵士として満州に攻め入ったというから、だいたい私たちと同年配の人のよさそうなオジサンである。その人が会うなりツカさんを見て、「この人は女か？」とウ氏に（ロシア語で）聞いたのには、おどろいた。ツカさんは髪の毛を長くしているので、間違えたらしいのである。愉快な人だ。

その話によると、工場では魚の冷凍、塩漬、くんせいなどを作っているが、年間の生産高は900トン。そのうちバイカル湖からとれるオームリ（シロサケの一種）が550トンを占める、という。

工場長との会談がすんで、つぎにこの島の博物館に行く。この博物館は元フジール中学校の教師ニコライ・レビャートキンがつくったもので、この人はすでに故人となったが、その後をついだ娘のカピタリーナさんから、島の地質や考古学的意義についてくわしい説明を受ける。

宿舎で一夜を明かした翌日は、空はどんよりと曇り、寒風が吹いている。今日は湖上めぐりの予定だったが、波が荒く危険なので予定をかえて、小型バスで島を見てまわる。フジール町長のプリャニチニコフ氏が、みずから案内してくださる。

それにしてもこの島は、どこまで走っても人影は見あたらない。草原の起伏と砂地、森林、絶壁と奇岩、湖と空、つまり大自然だけである。この中にいると人間はいかにも小さなものに思われてくる。ツカさんはすっかり感激し、「美しい、素晴しい、広い！」の感嘆詞を連発する。

さて、その翌日は晴れあがったので、湖上めぐりに出発する。フジールから船を仕立て、波の高いマーロエ・モーリエ（小さな海）を越えて、西側の岸にわたり、船員たちと焚火でオームリを焼いて食べたりして船旅を楽しんだ。

こうして私たちの、今回のバイカル湖の旅は一応終わった。しかし、湖一周の計画は、まだ半分しかすんでいない。来年は、また同じメンバーでブリャート自治共和国側の沿岸を回るつもりである。望みが達せられるのは、まだ遠いと言わなければならない。はるかなり、オーゼロ（湖）バイカル！



伝説のナゾを秘めるシャーマンの岩（オリホン島）

ヒヨコの女王さま

——グルジアの孵化場を訪ねて

堺女子短期大学教授　笹野　貞子
写真　東　正夫



孵化コルホーズの議長メリー・ムジワニ女史（鶏舎で）

グルジア一を誇るノリヤ孵化場は、首都トビリシから東に車で約三十分ぐらいのところにある。

私が訪れたのは七月の末、夏も盛りの暑い日だった。

小高い丘が広大に広がっている敷地に戸数二百三十戸、総人口千四百人を擁するノリヤ孵化場は、孵化コルホーズなのだ。

フリルのついた白いドレスのよく似合うメリー・ムジワニ女史がここノリヤ孵化コルホーズ議長だ。彼女は私の到着を待ちかねたように肩を抱きしめて大歓迎をしてくれた。

ソビエトの女性について矢継ぎ早に質問する私に「ソビエトでは女性のコルホーズ議長はそんなに珍しくはありませんよ」といいいながらさりげなく、えり元の髪をかき上げる仕種は、いかにも女性らしく感じられたものだ。

彼女がコルホーズ議長になったのは、一九七三年というから十二年前のこと。それまでは小規模の孵化場だったそうだ。しかし彼女が農業省の勧めからコルホーズ議長になった時、もっと大規模なものにしようと思い立ったという。そこで彼女は、まず第一に労働条件と住宅環境を改善し、福祉施設を完備して労働者の移動流出を防ぐことに力を注いだという。その結果、年間生産高が上がり鶏卵が千百万個から四千万個に、鶏肉が二百トンから千トンに急増、百万ルーブルの収入を得ることに成功した。彼女はこの収入を優秀な労働者の奨励金としたり、あるいは住宅費の無料化に使ったという。その結果ますます生産高は上がり、現在では新しく建てた託児所、保育所は全て無料化に、また八年制の学校を十年制に切り替え、新しく音楽学校もコルホーズ内に創立することができたという。

彼女の燃えるような努力は、レーニン勲章や赤旗勲章その他、沢山の勲章を授与されたことによっても、既に社会的に認められていることがわかった。たしかに、それらの勲章の前に立った時の彼女は誇らしげで自信にあふれたものだった。

そこで彼女は今新しい役場を建設中であり、また現代的様式の住宅が二棟できているので案内しようと私を促した。そして次の建設計画は、コルホーズを訪れる客人に備えてホテルを建てたいという。また今ある販売センターをつぶして、総合サービスのできる総合販売センターに変えたいという。

「これからは心のこもったサービス部門に力を入れたいのです」と彼女は力説した。

たしかに一風変わったモダンな設計による村役場が急ピッチで建設されていたし、しゃれた現代的アパートが入居できる状態までにでき上がっていた。浮き浮きと希望に満ちた彼女の説明を聞きながら、私はコルホーズ員は今どんな生活をしているのか知りたくなった。そこで「どこかの家庭を拝見させてくれませんか」と切り出してみた。



建設中の村役場

彼女はふうっと考え込み、横にいるセクレタリーに「ジェネリーさんに連絡して下さい」と促した。セクレタリー氏は足早に駆けて行った。

彼女はまた話を続けながら、役所と総合販売センターができたら急いで病人と老人のために近代的設備を備えたサナトリウムを造り、続いて若者と子どものために映画館とスポーツセンターを造るのです。そのためにももっと生産高を上げてどんどん現金収入を増やさなければならないと、ますます力を入れて説明した。来年度は鶏卵一億三千万個、鶏肉三千五百トン、それにうずらも二万二千羽に増やし、コルホーズ員の日常生活をもっともっと豊かにしたいともいった。私はコルホーズ員の給料を無躾に聞いてみた。平均して二百五十ルーブルから三百ルーブルということだが、プレミアムがついて四百ルーブルもらっているコルホーズ員もいるという。また子どもを生んだ母親には、一人につき百ルーブルを奨励金として出しているそうだ。

そんな話をしているうちにジェネリーさんの家に着いた。急いで工場から呼び戻された夫婦は、体に付いたゴミをバタバタと手払いで払っている最中だったが、私を見つけると気持ちよく中に通してくれた。奥さんは会計係、ご主人はボイラー室長ということだったが、四DKの各部屋が実によく掃除されていた。そして立派な応接室にはアップライトのピアノと、チェコ製のカットグラスが戸棚の中に見事に並んでいた。無躾な私は全ての部屋を見てまわったが冷蔵庫からテレビに始まる電気製品はほとんど揃っていた。夫の基本給は二百八十ルーブル、妻百八十ルーブル、長男二百五十ルーブル、それにプレミアムがつくというこの一家は、彼女が胸をはって〝豊かな生活ができる〟というにふさわしい暮らしをしていた。



コルホーズ員の住居内

さて普通の場合鶏舎には立入禁止というところを、無理に頼みこんでムジワニ女史の写真を撮らせてもらった。一度に二万個を孵化できるという機械の前に立った彼女は急に目の輝きが違ったように思えた。

彼女はトビリシの獣医科大学を卒業、孵化場についての論文を書き、経済学博士候補号を取得、農業省を経てコルホーズ議長、五十一歳、給料四百五十ルーブル、グルジア最高会議代議員、グルジア共産党中央委員等、社会的にも大活躍である。

日本の孵化技術を研究したいと熱っぽく語りかけながら、かねてから用意してあった宴会場に案内してくれた。まさに山海の珍味である。歓迎のためテーブルを埋めた男性の部下に豪快にゲキを飛ばし、胸をはって将来を語るトップとしての彼女の姿に、私は思わず拍手を贈りたい気持ちでいっぱいになったものだ。

正当に評価される労働を通じて人生に希望と情熱をぶつける女性の姿勢にこそ、まばゆいような頼もしさを感じるものである。

広々としたコルホーズの中央に、ヒヨコのモニュメントがかわいらしく建っていたのがとても印象的だった。

松江でソ連写真展開催



10月7日から9日まで松江市の島根県民会館で「今日のソ連邦写真展」が開催された。主催は島根県日ソ貿易協同組合、島根県貿易協会、ジェトロ松江事務所、北海道日ソ友好文化会館。この写真展にはノーボスチ、タス両通信社のカメラマンが撮影したカラーとモノクロの写真500点以上が展示され、ソ連共産党第27回大会開催を来年2月に控えたソ連国民の生活を紹介した。

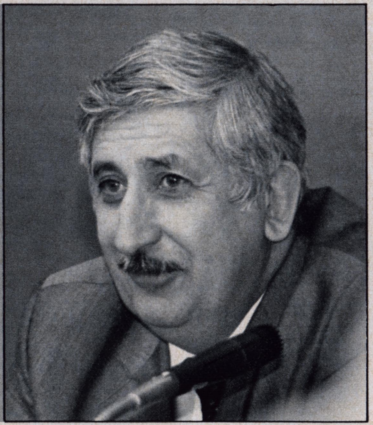
7日の開会式には水津卓夫・島根県副知事、又賀清一・島根県日ソ貿易協同組合理事長、大谷昌行・ジェトロ松江事務所会長、V・V・デニソフ・駐大阪ソ連総領事が出席して、テープカットをした。写真はテープカットをする（右から）水津副知事、又賀理事長、デニソフ総領事、大谷会長。

東京で開かれた

第4回日ソ・ジャーナリスト会議



ソ連側代表団



ソ連側代表団長のK・A・ハチャツーロフ・ノーボスチ通信社副社長



日本側代表団長の井上好道・共同通信社論説委員長



日本側代表団

日本対外文化協会（対文協）とノーボスチ通信社が協力して10月22—23日、東京で第4回日ソ・ジャーナリスト会議を開催した。

この会議には、日本側から井上好道・共同通信社論説委員長、柴田穂・サンケイ新聞社論説委員長、斧康彦・朝日新聞社論説副委員長を含め、読売新聞社、毎日新聞社、中日新聞社、東京新聞社、北海道新聞社、日本経済新聞社、NHK、テレビ朝日その他の論説委員15名が、ソ連側からはノーボスチ通信社副社長K・A・ハチャツーロフ、モスコー・ニュース紙評論員V・B・トゥリノフ、イズベスチヤ紙第一副編集長N・I・エフィーモフ、ソ連国家テレビ・ラジオ委員会政治評論員V・Y・ツベトフ、クラスナヤ・ズベズダ紙外信部次長V・V・クーザリをメンバーとするソ連ジャーナリスト代表団、並びにノーボスチ通信社東京支局長M・B・エフィーモフ、その他ソ連マスコミの東京特派員が参加した。この会議は友好的で自由な雰囲気で行われたというのが、双方に共通した意見だった。

会議では、人類全体にとって大きな脅威である宇宙軍事化の問題が討議され、きたるジュネーブ・ソ米首脳会談が核軍拡新ラウンドの防止や核対立水準の低下に大きく寄与することへの期待が表明された。また、日ソ関係改善の必要性が強調された。

双方は、両国ジャーナリストの円卓会議が日ソ両国民の相互理解を促進する上できわめて有効であることを認め、同様の会議を今後とも組織する用意のあることを確認した。双方は、次回の第5回日ソ・ジャーナリスト会議を、一九八六年末にモスクワで開催することに合意した。



ソ連代表団一行は会議のあと長崎市を訪れ、本山市長（中央）を表敬訪問した。



辻原弘市氏の逝去を悼む

日本対外文化協会理事長の辻原弘市氏が10月19日、心筋梗塞のため急逝されました。62歳でした。

辻原氏は和歌山県の生まれで、同県教組書記長、日教組中央執行委員，総評常任幹事を経て，1952年以来衆議院議員（日本社会党所属）を8期務めました。この間、衆議院災害対策特別委員長などを務めたほか、社会党では政策審議会副会長、国民生活局長などを歴任しました。また、1973年2月から76年12月まで日ソ友好議員連盟の常務理事、事務局長として日ソ関係の強化に尽力しました。

政界引退後、1978年に日本対外文化協会の理事長に就任し、死去するまでその職責にありました。その間、さまざまな分野での日ソ文化交流の発展に努め、多くの企画を実現させ、両国文化交流のレベルアップに尽くしました。とくに、これまで4回行われた日ソ円卓会議の準備と開催には、日本側主催者のなかで中心的な役割を果たしてきました。

1983年にはソ連対文連から日ソ両国民の友好発展における氏の大きな功績に対して友好促進顧章が贈られました。

ことしの9月下旬にモスクワで行われたソ連対文連の創立60周年記念国際集会には、日本の対ソ友好団体の幹部たちと共に元気に出席されたばかりでした。

氏の突然の、余りにも早すぎた逝去を惜しむとともに、心から哀悼の意を表します。

「今日のソ連邦」編集部

ノーボスチ通信 特派員報告

核戦争防止国際医師の会にノーベル平和賞

V・メホンツェフ記者（ジュネーブ）

地球上で最も人道的な職業に従事している医師たちは、「核戦争の防止をめざす国際医師の会」の国際会議の一つで、核戦争を〝人類最後の伝染病〟と定義した。5年前ジュネーブで、共同議長のエブゲニー・チャゾフ・ソ連科学アカデミー会員と米国のバーナード・ラウン教授をリーダーとするソ米両国の学者たちによって開始されたこの運動は、今や有力な勢力になり、世界40カ国の一四万人以上の医師を結集している。運動は、核戦争がもたらす結果について広範な世論に知らせること、核兵器や軍拡競争から発生するリスクと危険に関する学術研究を支援することを主な目的としている。

運動の活動家たちは、人類のこの〝最後の伝染病〟である核戦争を防止する仕事で世界の医師たちのすべての影響力を利用するために、医師たちを動員することに最大の努力を傾けている。今年度のノーベル平和賞がこの運動に授与されたことは、医師たちのこの平和運動にとって大きな出来事となった。

「われわれは平和強化への自分たちの貢献がこのように高く評価されたことに深く感動している」とラウン教授は語った。「われわれはこの評価を、あらゆる人種と宗教に属し、さまざまなイデオロギー的見解を持つ何万という医師たちの活動――地上の平和と生命の擁護を目的とした活動に対する共通の評価とみなしている」

ジュネーブで配布された文書の一つには次のように述べられている。「ソ連が一九八五年末までの核爆発のモラトリアムを一方的に引き受けたことにより、核兵器の実験禁止に関する包括的な条約を批准する可能性は現在大きくなっている。この11月にジュネーブで開かれるソ米両国の首脳会談を前にして、〝国際医師の会〟はこのような条約の必要性と緊急性に注意を向けることを改めて望むものである」

以前からの強いきずな

A・イグナトフ記者（パリ）

「ソ仏両国の対話、協調、協力を継続するだけでなく、それを深めることも、きわめて重要である。

両国関係の現状は、われわれの見るところでは悪くない。貿易額は10年間で4倍に増大した。われわれはこれに満足しており、これはフランスのためにもなっていると思う。しかし経済交流はもっと活発で多面的なものになりうる。われわれはそう考えている」

ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長はフランス国営テレビを通じてこう語った。

ところで、フランス人、なかでもソ仏の経済交流の積極化を大きく左右する実業界の考えはどうか、代表的な二人の実業家に聞いてみた。

ジョルジュ・ド・ビュフェバンSPIバティニョール社代表取締役・会長――「わが社はソ連と昔からずっとつき合ってきた。ソ連はわが社の古い、信用の置ける取引相手だ。化学工場の建設を専門としているわが社の系列会社がソ連の化学工場を建設しているが、これがソ連で手がけた34番目の工場であるという事実をあげるだけで十分だ。このほかモスクワ、タシケント、ハバロフスク、ノボシビルスクの4空港の給油システムを〝ターン・キー〟方式で建設する契約を結んでいる」

ジャック・ブーベ・ユジノール社社長――「わが社とソ連の鉄鋼業省とは昔から親しく、ソ連側で何が問題になっているか承知している。完成品の取引のほかに技術的ノウハウの交換もまったく可能で、これは単なる貿易よりもっと深い関係だ。ソ連とわが社の協力関係は歴史が古く、協力分野を探し、情報交換をする特別の製鉄委員会ができている。一九六五年からはソ連に各種金属製品を輸出しているが、今ではわが社の輸出の10%以上がソ連向けだ。ソ連との仕事はユジノール社と四万人の社員の死活にかかわるほどになっている」

米国の飲酒運転事故

V・カバリャウスカス記者（ニューヨーク）

米国では毎年交通事故で約五万人が死んでおり、今では交通事故は40歳以下の米国人の一番大きな死亡原因になっている。しかも事故と死亡者の半分は酔っぱらい運転によるものだ。

推定では今後、米国の成人の2人に1人が飲酒運転の被害者になり、またこれから生まれる子供の6人に1人が16歳にならないうちに死んだり、ケガをするようになるという。

交通警察のデータによると、週末になるとドライバーの10人に1人は酔っぱらい運転をやる。しかも酔っぱらい運転のかどで一時的または永久に免許停止になった者の3人に2人が今無免許運転をやっている。

一九八三年に、酒気を帯びて自動車を運転した者は免許を取り消すとの連邦法が発効したが、今のところ11州は酔っぱらい運転の処分を厳しくする方針をとっていない。

この点で最も効果があるのは、昨年6月ニュージャージー州で採択した法律だろう。州最高裁の決定で、酔っぱらい運転による交通事故の損害賠償は加害者に酒を飲ませたり売った人間またはレストランに請求できることになったのである。ほかのいくつかの州もニュージャージー州の例に倣おうとしている。

ソ連の新聞記事から

（一九八五年10月後半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局は中央委員会10月（一九八五年）総会の決議を実行し、定例会議でソ連共産党綱領新稿草案、党規約改正草案、一九八六―一九九〇年度および二〇〇〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向草案の審議・宣伝・説明の手続きを定めた。

機械工業部門の指導改善措置に関するソ連共産党中央委とソ連閣僚会議の決定が採択された。この決定により政府の常設機関として、ソ連閣僚会議機械工業ビューローが設置されることになった。

政治局は、工業関係諸省や補給機関、工業公団、企業の納入計画未達成ならびに運輸組織の輸送計画未達成の経済的責任を高める措置を承認した。これらの措置のねらいは、製品の供給者と消費者間の相互関係の秩序をもっと厳しくし、契約関係の違反や指定どおりに製品を使用しなかったことに対する制裁を強めることにある。

政治局は、工業企業と工業公団が副業でやっている農業の発展問題を審議した結果、このカテゴリーの農業経営への資材・機械、種子、植え付け用材料、優良種幼畜の供給の改善をめざす諸提案を支持した。副業農業経営に関する模範規程の採択に関するソ連閣僚会議の提案が承認された。

政治局は、M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長とM・カダフィ・リビア革命指導者との会談の成果を審議し、承認した。この会談を通じて深められた、国際情勢と両国の関係の諸問題に関する意見の交換は、平等・互恵・相互の尊敬を原則とする多面的なソ連・リビア協力関係を拡大する大きな可能性が存在することを確認した。

ソ連最高会議で行われた、日本の国会代表団ならびにルクセンブルグ議会代表団との会談に関するA・A・グロムイコ同志の報告が承認された。

ソ連共産党中央委政治局は経済政策や対外関係の他の若干の諸問題を検討し、しかるべき決議を採択した。

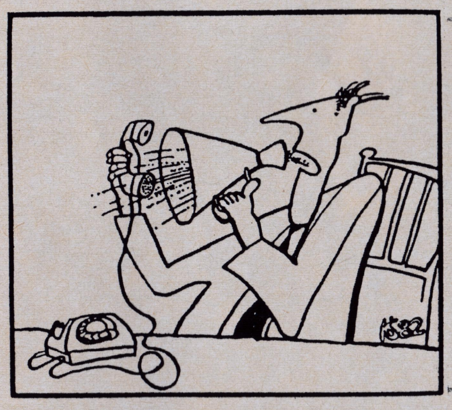
（プラウダ紙10月18日号）

薬用になる朝鮮ゴミシ

極東の針葉樹林地帯ではいま薬用植物の朝鮮ゴミシの採集たけなわである。現地の人々は強壮剤として古くから朝鮮ゴミシを愛用しており、医師はゴミシの液汁を心臓血管系や神経系統、呼吸器のよい刺激剤だとしている。

ハバロフスク地方では今シーズン中に四万kg以上（昨年の2倍）が採集され、約30tの液が製造される。

（イズベスチヤ紙10月20日号）



（K・シャウリチス作、イズベスチヤ紙10月21日号から）

浮きドックの実験

ユーゴスラビアから黒海沿岸ノボロシースクに運ばれてきたソ連最大級の六万トン浮きドックが、このほどテスト用として最初の船を受け入れた。テスト用に選ばれたのは大型タンカー、クバン号である。

ドックが浮かぶツェメス湾は、冬に突風が吹くという特殊条件を抱える土地なので、実験の結果はとくに重要な意義をもつ。

この実験ではいきなり最大荷重のテストが行われ、関係者が見守るなかで実験は無事終わった。

（イズベスチヤ紙10月21日号）

赤ちゃんの水泳

ノボロシースクの中央外来病院小児科には、「生後1―3カ月の赤ちゃんを水泳教室へ」という広告が張り出されている。

この病院の付属機関として設立された相談・指導センターは、赤ちゃんに水泳を教えるようになってから3年になり、いま一〇〇人以上の赤ちゃんが水泳を習っている。先生は資格をもった専門家であり、両親自身も一緒になって赤ちゃんの水泳を見守っている。はじめ赤ちゃんは浴槽の水になじみ、一定のコースを経てからひとりでプールの中を泳ぎ始める。生まれてまもなく水泳、体操、マッサージをやると、子供は健康に丈夫に育ち、歩き出すのも早く、病気にもあまりかからない。

（プラウダ紙10月17日号）



ぼくにも見せて…（P・ノーソフ撮影）

短信アラカルト

リガの古い建物の復興

ソ連のバルト海沿いの共和国の一つ——ラトビアの首都リガの中央部にある五〇〇の古い有名な建築物の大多数は、建築年や特徴を記した一種の"身分証明書"を手に入れた。リガの修復技術者が集めた建物のこの"経歴データ"を参考にすれば、各建物の石積みの方法や使用材料、正面のかつての装飾や彩色、その後の改築の性格などが分かり、13—18世紀の建物の竣工当時の姿を復元するのに役立つだろう。

リガ市の現在のパノラマを再び美しく引き立たせているのは、ペテロ寺院のゴシック式尖塔であり、高さ一三〇mの尖塔の上には金の鶏が飾りつけられている。封建時代に職人たちが住んでいた"親方"通りの建物コンプレックスの復元工事も終わった。コンベント（修道会）の建物には装飾瓦が葺かれ、古い絵をもとに主教の邸宅が復元されている。リガの最初の石作りの教会は、たび重なる改築の跡を取り除いて建立当初の姿になっている。

リガの中央部の旧市街には歴史的な名建築が多く、建築物保護区に指定されている。ここの住民の一部は新しい居住地区に移転している。最も広い建物は展示場、美術家のアトリエ、喫茶店、花とみやげ物の店になっている。

送ガス管の安全確保

グルジア共和国の学者は幹線用ガスパイプラインを静電荷から守る装置を開発した。

絶縁用に使われるポリマー・フィルムを鋼管に巻くさい、ポリマー・フィルムは帯電し、出火の恐れがある。いまは絶縁材を巻く前に、この装置の中を絶縁材を通して、電荷を除くので、作業の安全が完全に保障されている。

ソ連最初の気象博物館

ソ連欧州部の北にあるアルハンゲリスクにソ連最初の気象観測博物館がお目見得した。これはソ連国家水文気象・自然環境監視委員会北方地域局の付属機関として設立されたもの。

アルハンゲリスク地域は北半球全体の天候のいわば「キッチン」であり、ここでロシア北方地域の天候の定期観測が三〇〇年前から実施されている。こうした気象観測体制づくりに大きく貢献したのは、ロシアの学者ミハイル・ロモノーソフ（一七一一—六五）で、最初の国産の気象観測器具を開発したのも彼である。

博物館の展示品は、10月革命後の北方地域の気象観測の歴史やアルハンゲリスクの気象観測員たちの北極調査隊支援活動を物語っている。

蚊撲滅の生物学的方法

カザフ共和国南部のイリ川の春先に水につかる草地から蚊とブヨの大群が消えた。この大群をせん滅したのは、カザフ共和国の動物学者が土壌や水から取り出した胞子を形成する微生物（他の生物に全然無害）である。この研究はフランス、タイ、ビルマ、その他一連の国の生物実験と共同で行われた。ソ連で実施された新種の微生物のテストは、よい評価を受けている。

いま多くの国の生物圏の有毒物質による汚染は、ますますひどくなるばかり。この状況下で生物学的汚染防止方法開発のための国際協力の意義は大きく、ソ連の学者もこの協力を重視している。一方、蚊はますます増える駆虫剤量に対しても抵抗力を増し、生き残るようになっており、微生物利用など新しい生物学的駆除法の開発に期待が寄せられている。

長生きの妙薬緑茶

アゼルバイジャンの亜熱帯地方に新しい広大な茶栽培地帯がつくられている。アゼルバイジャン共和国科学アカデミーの学者たちは、この地帯の土壌・気候・水資源を調査して、茶栽培の大幅拡大を勧告した。昨年この地帯では三万tの緑茶が生産された。さらに、今後10年間に茶の生産量を10倍に増やす計画が立てられた。アゼルバイジャン共和国の長寿者数はソ連一だが、長寿者たちは茶を長生きの主な要因の一つだとこぞって言っている。専門家たちも同じ意見であり、アゼルバイジャンの南部で栽培される緑茶は飲めばおいしいだけでなく、薬効もあると指摘している。

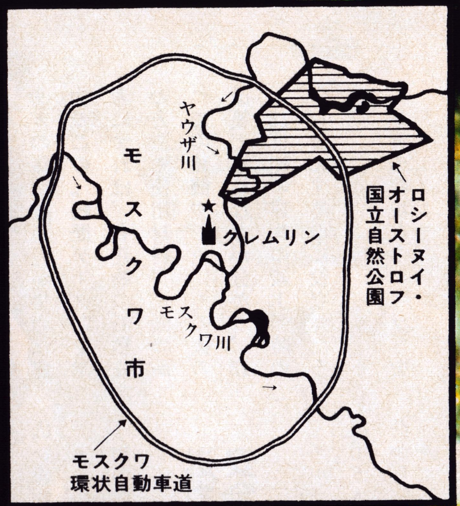
人間と自然

ヘラジカが住む モスクワの国立自然公園

本誌記者 オリガ・ベドニャコワ
カメラ V・ボブコフ



ロシーヌイ・オーストロフ（ヘラジカの島）という地名は、文字どおり昔からここにヘラジカが住んでいたことに由来する。写真は森の中で見かけた若い雌のヘラジカ。





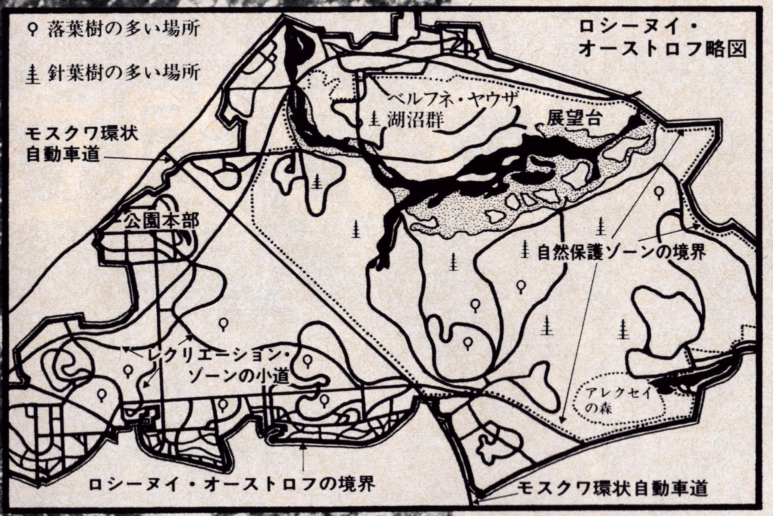
国立公園を訪れる人たちの多くは森の動物たちへのプレゼントを携えてくる。このリスもクルミをもらってご満悦。



この国立自然公園の一部をモスクワ環状自動車道路が通っている。「ヘラジカに注意！」の標識にドライバーたちも用心深くなる。



国立公園の入口の一つにある木の門柱。1406という数字は"ロシーヌイ・オーストロフ"の地名が初めて史料に現れる年代を示す。



「ソ連市民は休息の権利を持つ。
この権利は……居住地における休息のための恵まれた可能性と、その他の余暇の合理的利用のための条件との創設によって保障される」
（ソ連憲法第四一条）
「ソ連市民は自然を大切にし、その富を保護する義務を負う」
（ソ連憲法第六七条）

モスクワを訪れたことのある日本人なら、多くの人が知っている高層ホテル"コスモス"のそばで、私はトロリーバスに乗り、国立自然公園へ出かけた。

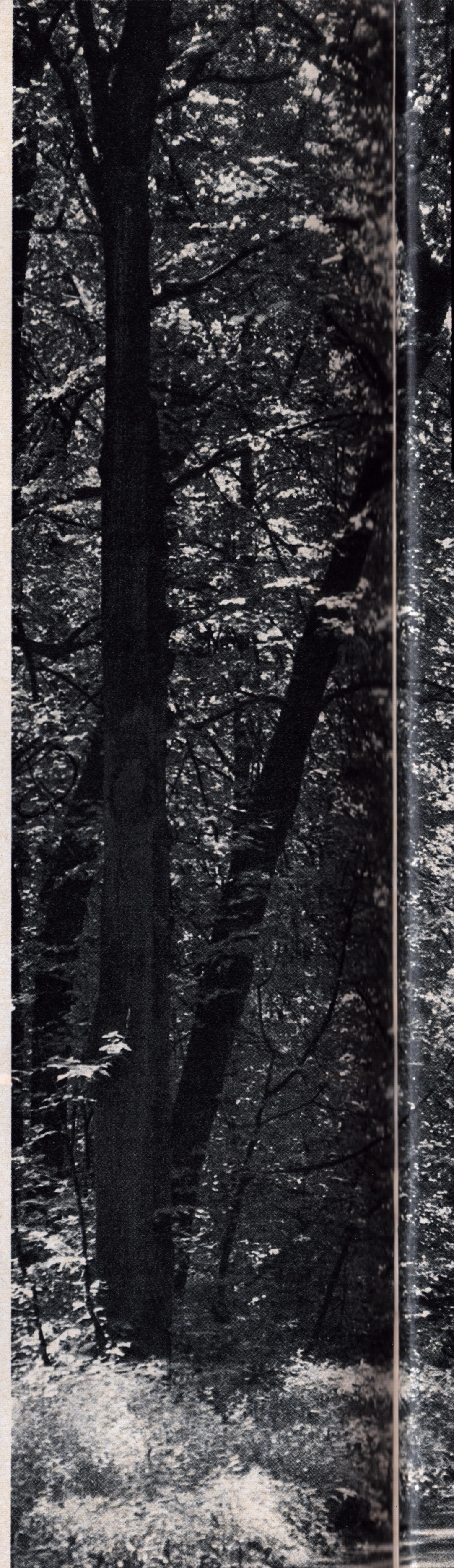
大抵のモスクワ市民の頭の中では（実を言うと、最近まで私もそうだった）、"国立公園"という名称は何か非常に美しいもの、そして非常に遠い所にあるものとして考えられている。人気テレビ番組の「旅行者クラブ」や「動物の世界」、あるいは本や雑誌の記事に刺激されて、どこかへ旅行しようと思い立つ。そういうとき私たちの頭に浮かぶのは、なぜかアメリカのイエローストーン国立公園のことだったり、日本の富士箱根伊豆国立公園のことだったり、ソ連国内ならバルト海沿岸地方にある国立公園だったりする。

だが、モスクワではどうだろう？ 人口ほぼ九〇〇万人の大工業都市モスクワでは？ もちろん、モスクワは大気や河川の清浄さ、街路、広場、遊歩道を彩る緑の豊かさでは評判の都市である。それでも、自然を求めての旅となると……。

少し意地悪をして知人たちに、モスクワのどこに国立公園があるか質問してみた。信じられないような顔をして、おずおずと自分の当てずっぽうを口にする――「クスコボ？ クルイラツコエ？ それともビッツァ？」そしてよく知っているロシーヌイ・オーストロフという地名を耳にしてびっくりする。

もちろん、モスクワのこの最も古い一角のことはだれでもよく知っている。しかし、一九八三年の9月にここが国立自然公園の地位を与えられたことはみんなが知っているわけではない。

もっとも、"一角"という単語はこの面積一万ha以上の緑地帯にはまったくそぐわない。ここは五つの森林公園からなっていて、モスクワ北東部のゴリヤノボ、バーブシキン、ソコリニキといった大住宅団地のそばから始まっている。そして、モスクワ市の外側の境界線になっている環状自動車道を横切り、モスクワ近郊の諸都市カリーニングラード、ムイチシチ、バラシーハにまで広がっている。行政的にはこの公園はモスクワ市ソビエト執行委員会（市役所）の森林・公園管理局の管轄下にあり、市の予算で運営されている。



国立公園の小道を散歩する人たち。とくに休みの日は大勢のモスクワ市民がやってくる。

犬はおことわり！

森ではよくあることだが、私は最初から道に迷ってしまった。もちろん、怖くはなかった。それに自然のものを基準にして方角を知ることは、私たちは小学校で教わっている。しかし、ロシーヌイ・オーストロフ国立自然公園のビクトル・オシポフ副園長との約束に遅れるのはまずかったので、足を速めた。すると、すぐに約束の場所へ出た。ヘラジカの頭と"一四〇六"という年号が彫ってある木の門柱である。急ぎすぎたようだ。あと10分もある。一息入れてから、掲示されている公園の地図をながめ、公園内の規則を読む。

そうこうしているうちに、オシポフ副園長が姿を現した。

黄色い木の葉が舞い、足元にそっと落ちる。小道はふかふかしていて、足が軽くなったように弾む。この小道は大理石の砕石を敷き、その上に土をまいてあるので、訪れた人たちだけでなく、ここに生息する動物たちにも便利だ。小動物や両生類の移動も妨げないからだ。

すらりとしたシラカバの木が列になって遠くまで続いている。あまりにも整然としすぎているのでは？

「これは植樹したものですよ」と、私の疑問を見ぬいたようにオシポフ副園長が説明してくれた。「私たちが今いるここは、レクリエーション・ゾーンです。本物の森はもっと先にあります。ここは戦争直後の一九四〇年代後半に植林されました。当時はまだモスクワの遠い町はずれで、野菜畑でした…」

ビクトル・オシポフは37歳。林業に精通している。林務署で山林官として働いたあと、モスクワ林業技術大学を卒業し、同じ大学の森林保護講座で博士候補論文の審査に合格。その後、林業関係のいくつかの研究所に勤務した。ここの副園長のポストに就いてからはまだ1年にしかならないが、仕事に没頭している。たくさんのプランを持ち、エネルギッシュで、部下に対しても訪問者に対しても厳しい。しかし、公平な人である。

「お嬢さん、戻りなさい」　オシポフは自然保護監督官の身分証明書を見せながら言った。「ここは犬の散歩は禁止です！」

公園内の規則は、森へ自動車を乗り入れること、たき火、野生植物の採集、テントの設営を禁止している。これらの要求の正しさは疑問の余地がない。しかし、犬となると……　犬もまた自然界の一部ではないだろうか？　犬好きで、美しいコリーを飼っている私としては、どうして犬はいけないのか、その理由を聞かないわけにはいかなかった。「ロシーヌイ・オーストロフの森には一六〇種以上の野鳥がいます」と、オシポフは我慢強く説明してくれた。「その中には地面に巣を作る声の美しい鳥たちもいます。これらの鳥たちには敵がたくさんいます。森の動物たちが巣を狙うのは食物を手に入

公園内のベンチにはみな彫刻と焼き付けた文字が見られる。このベンチに書いてある「自分自身を知れ」という言葉は、人を少し哲学的な気分に誘う。











ロシーヌイ・オーストロフの中にあるベルフネ・ヤウザ湖沼群







1　ワタスゲの花

2　公園内の湖沼でよく見かけるヒツジグサ

3　沼でたわむれる鳥

4　カミツレの美しさに魅せられた(?)カエル

5　獲物を捕まえたカモメ

6　最近10年間にモスクワ近郊ではめっきり少なくなったトキワラン。



ここでは希望すれば、馬を借りることもできる。



公園内の多くの場所にこのような鳥のロシア語名と学名を印した柱が立っている（写真の表示はノスリ）。



子供たちを喜ばせる民話の主人公を彫った木像。ただ見るだけでなく、なでたり、登ったり、揺さぶったりできる…

れるためですが、腹の空いていない飼い犬がこれを狙うのは、単なる気晴らしに過ぎないんですよ」

反論の余地はない。野鳥の多くなる方がいい。ここでは鳥たちがさまざまな声で陽気にさえずっている。私たちはロシーヌイ・オーストロフ国立自然公園の本部へ向かった。道々、どうしてこの自然公園がロシーヌイ（ヘラジカの）オーストロフ（島）と呼ばれているのか、どうして一四〇六年なのか、たずねてみよう。

三つの質問への答え

ロシーヌイ（ヘラジカの）というのは、大昔からここにヘラジカが住んでいたことに由来する地名だ。そしてヘラジカは今もここに住んでいるし、将来も住むだろうと信じる。ヘラジカはシカ科の大型動物で、最高で体長3m、体高2・3m、体重五七〇kgになる。とりわけ、大きな鋤のような形をした角を持つ雄はすばらしい。ヘラジカのほか、ここにはニホンジカ、ノロ、イノシシ、リス、タヌキ、その他、ロシア中緯度帯の動物相に特徴的なもっと小型の動物が生息している。

オーストロフ（島）と呼ばれている点については、研究者によって意見が分かれる。自然公園中央の、主としてヘラジカが住んでいる保護ゾーンは、昔の湖または川から形成された沼に囲まれている。つまり、かつてここはこの単語の現代の直接の意味でいう島であった可能性がある。現代の意味で、ということを強調しておこう。というのは、"オーストロフ"という単語は私たちの遠い祖先の言語では"豊かな場所"という意味もあったからだ。だから、ヘラジカの豊富な場所ということが起源になったのでは、という説もある。そのほかにも、昔からこの森林の周囲ではライ麦が栽培されていた、だから、この森は麦畑の"海"の中の"島"だったのではないか、という説もある……　いずれにせよ、モスクワ市とモスクワ州にまたがるこの自然公園は、現代ではユニークな自然対象として国に保護される文字どおりの"島"なのである。

一方、一四〇六年というのは、モスクワ大公たちの遺言の一つに初めてロシーヌイ・オーストロフの地名が出てくる年代である。もっとも、この場所はこれよりも早い一三八八年の文書に別の名前で顔を出している。

ロシアの地におけるモスクワの指導的地位を強化したドミトリー・ドンスコイ大公の治世時代（一三五九―八九）からすでに、この場所は一種の"保養地帯"と考えられていた。ここでは年間を通して暖かい南東の風が多く吹くといった微気候の特徴、植物相、動物相が美しく、種類も豊富なことが注目され、モスクワの他の郊外地区とは別格に考えられていたのである。興味深いのは、将来のロシア国家の首都として発展途上にあったモスクワが大量の材木を必要としていたにもかかわらず、すでに当時からここでは木の伐採を制限する最初の保護措置がとられていたということだ。ピョートル一世時代（一六八九年から一七二五年まで在位）にはさらに厳しい規則が導入され、ここでの木の伐採は枯れ木、病気の木、山火事に遭った木を除いて全面的に禁止された。

ロシア最初の国有林管理が始まったのも、このロシーヌイ・オーストロフからである（一八四〇年）。森林全体が測量され、一ベルスタ平方の正方形に区分され（ベルスタはロシアの古い長さの単位で、一ベルスタは1・068km）、台帳に記入された。この文書をはじめ、その後の記録文書は今もこの公園の職員たちに利用されている。

自然と人間の要求の調和

自然公園の本部に向かう途中、私たちはいろいろと面白いものを目にした。自然保護区と違い、自然公園は地形や貴重な自然対象を保護するだけでなく、その美しい自然の中で休息する可能性も人々に与えなければならない。

ここにはブランコその他の遊具、人気のある民話の主人公たちの木像など、子供たちを喜ばすものも沢山ある。安い料金で馬に乗ったり、馬車に乗ったりして木陰の道を散歩することもできる。運動場ではボール遊びをしたり、トラックをジョギングしたり、自転車に乗っている人たちがいる。池では10月の初めだというのに、カモならぬ、3歳のぼうやを連れたお母さんが泳いでいた……

ここの小道をゆっくり散歩するだけでも十分楽しめる。至るところ、訪問者に自然を満喫してもらおうという公園側の配慮が感じられる。木の彫刻や雨やどりのできる小屋、テーブル、凝った造りの案内板などは実に見事に森の風景に溶けこんでいる。

ベンチも手ざわりのいい白木で出来ていて、彫刻と焼き付けの装飾が施されている。しかも、一つとして同じデザインの装飾がない。それだけではない。ここの五つの森林公園はそれぞれ独自の統一した装飾様式をベンチのために採用しているのだ。だから、オシポフ副園長に言わせれば、このベンチを見れば、自分がどこの公園の敷地内にいるかすぐ分かる、ということになる。小さな宮殿を思わせる野鳥用のエサ台、水飲み場、事務所の建物を飾る民話のレリーフ……これはみな、美術家のビクトル・クルグロフとその助手たちが素材の美しさを注意深く探し出し、自然と芸術が完全に調和するようにごく細部まで神経を使っている仕事のおかげである。

本部のある原っぱには、管理用の建物、馬小屋、冷たくておいしい水の湧く井戸、それにケガをしたり巣から落ちた動物や鳥の世話をする生物ステーションなどがある。また、ここの栽培園では市と州のソビエトで保護を決めた植物を育てている。これらの植物の



大部分は今ではモスクワ州の最も辺ぴな場所にしか残っていないもので、専門家でも見つけるのに苦労する種類だ。たとえばトキワラン、野生の赤花のグラジオラス、オキナグサの一種がある。

栽培園は単なるコレクションではない。ここで得られた種子、球根、根茎は公園内の周遊コース沿いに植えたり、州内の森林へ移したりしている。

森の奥へ

小道は本部のある原っぱを迂回して、森の中へ延びている。私の場合は副園長という申し分のないガイドつきだったが、誰でも希望すれば、特別に用意された周遊コース――〝自然を知るための小道〟を行くことができる。

「アカマツの丘」は二〇〇年前に植えられた欧州アカマツの林。中には幹の直径1m半、非常にすばらしい模様の樹皮を持ったアカマツも見られる。ピサの斜塔のように傾いて伸びているアカマツの大木もある。森の中の草地や森の周縁部には樹齢一〇〇―一二〇年のカシとボダイジュが見られるが、これらの種類の木でこれほどの樹齢のものは、モスクワ近郊ではここだけにしか残っていない。もちろん、将来のこの森の主人公となる若い木も至るところで元気に成長している。

今まで曇っていて灰色だった空が、あっという間に明るい青空に変わった。日の光を受けて、高い木々の樹冠がまったく別の色と陰影を帯びる。思わず感嘆の声が出る。オシポフ副園長は満足そうに微笑した。「そうなんです。そういうつもりで、私たちはコースを〝朝の方向〟に進んできたのです。ここでは光のそういう効果も計算されているのです……」

未来への期待

モスクワ市民の休息のためにすでにこの公園で行われたことについてはもう紹介したが、今後、この公園ではどういうことが行われるのか？

承認されたロシーヌイ・オーストロフ国立自然公園マスタープランによると、特別の道路と小道を作り、展望台などの建設が終われば、今は一般来訪者の立ち入りが制限されたり、全面的に禁止されている自然保護ゾーンへも入ることができるようになる。

これらの特別に保護されている自然対象の中にはベルフネ・ヤウザ湖沼群がある。泥炭が埋まるこれらの沼は、自然界の生態学的均衡の原器とも言うべきもので、アオサギなど多くの珍しい鳥が住んでいる。またアレクセイの森（ピョートル一世の父アレクセイ・ミハイロビチ皇帝がここで狩りをするのを好んだことから、その名がついた）には、ここの微気候が幸いして樹齢二〇〇―二五〇年のアカマツの美林が残っている……

もちろん、この公園の職員たちにはまだまだ解決しなければならない問題が沢山ある。その中には人員問題もある。公園の職員としてさまざまな専門の人が約二〇〇人働いているが、まだ欠員がある。これは公園の指導部が職員の採用を非常に厳格にしているからだ。高い資格だけではだめで、それが仕事と自然への真の愛情、国立公園が取り組んでいるヒューマンな課題すべての理解と結合していなければならないというのが指導部の採用方針だ。

学者たちもロシーヌイ・オーストロフを支援している。実験室の拡張と改装が行われ、ソ連科学アカデミーの研究所、モスクワ大学との間で共同調査の契約が結ばれた。市当局、社会団体、青年、学校の生徒たちもロシーヌイ・オーストロフの仕事に関心を寄せている。これはみな、この国立公園の将来に明るい希望を持たせるものだ。

今回の訪問から受けた印象はまだ沢山あるが、あとはカメラマンのビャチェスラフ・ボブコフ撮影の写真と、公園提供の写真に任せることにしよう。

右上　寒くなって、エサが不足する季節になると、公園の職員たちは森の動物にエサを補給する。写真は給餌場に集まってきたニホンジカとイノシシ（公園提供の写真）。



ロシーヌイ・オーストロフの森をおおうシラカバとアカマツ

自分の担当地区を巡回する監視員



スポーツ

ソ連走り高跳び選手の"宇宙的ジャンプ"

本誌スポーツ解説記者　アレクセイ・スレプニツキー


2m40を跳んだ瞬間のルドリフ・ポバルニツィン


スタンドの拍手に応えるポバルニツィン（キエフのレパブリック・スタジアムで）

ことしの8月11日、ウクライナ共和国ドネツク市で行われていた陸上競技ソ連カップの準決勝大会は歓声に包まれた。男子走り高跳びでキエフ体育大生のルドリフ・ポバルニツィン（23歳）が、中国の朱建華選手の持つ世界記録を1cm上回る2m40の世界新をマークしたからだ。

ところが国際陸連がポバルニツィンの世界新を公認する間もないうちに、9月4日、神戸で開かれていたユニバーシアード85大会でソ連のもう一人の走り高跳び選手、フルンゼ市（キルギス共和国首都）のイーゴリ・パクリン（22歳）が2m41を跳び、世界記録をまたまた更新してしまった。ことしのスポーツ・シーズンを沸かせた二人の横顔を簡単に紹介しておこう。

パクリンは一九六三生まれ、身長1m91、体重72kg。キルギス工科大学の学生で、専攻はコンピューターのプログラミング。スポーツ好きの両親の下で兄と一緒に少年時代から陸上競技に熱中。短距離、走り幅跳び、三段跳びにも挑戦したが、コーチのアナトリー・ボグーリの指導で走り高跳び一本に。2年前のカナダで開かれたユニバーシアードで2m32を跳んで優勝し、一躍脚光を浴びた（記録はその後、2m33どまりだった）。大学の成績も優秀で、余暇は読書で過ごすことが多い。

一方のポバルニツィンは、ほとんど無名でいきなり世界記録を出した。ドネツクのソ連カップ準決勝までの記録は2m26に過ぎなかったが、この大会は好調でウクライナ共和国記録（2m35）を破ったため、さらに世界記録に挑戦。3回目の試技で見事に成功し、一挙に14cmも自己の記録を伸ばした。

ポバルニツィンは一九六二年、ウドムルト自治共和国ボトキンスク（ウラルの西側）で生まれた。身長2m01、体重75kg。スポーツを本格的にやり出したのは16歳と現代の常識からはかなり遅く、最初はバスケットボールと水泳だった。その後、陸上競技のコーチ、ウラジーミル・レウトから勧められて走り高跳びに転向。一九八〇年、身長が2m01にまで伸びていたポバルニツィンはウクライナの首都キエフへ移り、ウラジーミル・キバ・コーチの指導を受けるようになった。ことしキエフ体育大学に入学。非常に社交的で陽気な若者で、音楽と詩が好きだという。バレリーナの奥さんとの間に0歳の娘がいる。

なお、ポバルニツィンとパクリンは男子走り高跳びで世界記録を樹立したソ連選手としては4番目と5番目。これまでの3人はユーリー・ステパノフ、ワレリー・ブルメル、ウラジーミル・ヤシチェンコである。


▶2m41を跳んだパクリン



世界記録を出した直後のイーゴリ・パクリン（ユニバーシアード神戸大会で）



働く女性が家庭と社会で直面する問題

――グルジアの女流映画監督ラナ・ゴゴベリーゼに聞く

10月23日から25日までの3日間、東京の有楽町朝日ホールで国際シンポジウム「女は世界をどう変えるか」（主催・朝日新聞社、朝日イブニングニュース社）が開催された。ソ連からの参加者は映画監督で評論家のラナ・ゴゴベリーゼ（57歳、写真）。ゴゴベリーゼは全ソ映画大学でソ連映画界の重鎮セルゲイ・ゲラシモフに学び、『同じ空の下で』で監督としてデビューした（一九六一年）。

ラナ・ゴゴベリーゼの名を世界的にしたのは日本でも公開された『インタビュアー』（原題は『個人的問題に関するいくつかのインタビュー』）。この作品は世界各国で上映され、イタリアのサンレモ国際映画祭では大賞を受賞している（一九七九年）。

ノーボスチ通信記者のインタビューに応じてラナ・ゴゴベリーゼは自分の作品と、国際シンポジウムの印象を次のように語った。

この国際シンポジウムへの参加は私にとって大変勉強になりました。現代の急速に変化しつつある世界における女性の地位に関して日本やその他の国の方々と意見交換ができて有益でした。

このシンポジウムに参加するため東京に集まったのは主に、生活体験を通じて得た、事実に基づいた豊富な資料を総合して結論を出したいと願う社会学者やその他の学者たちでした。文化活動家、社会評論家として私は現代社会の女性のステータスの変化を反映する社会的傾向を熟知しています。しかし、シンポジウムのテーマに対する私の態度は、他の参加者の態度とはちょっと違っています。私は分析ではなく感覚、直感から出発しています。社会と家庭における女性の平等、女性の地位というテーマに私はもうずっと前から取り組んでいます。私が作った映画は多かれ少なかれこの複雑で、時には非常に矛盾した題材に触れています。

私の映画のヒロインはみな、グルジアの女性たちです。今世紀初めに生きた人だったり、私と同時代の人だったりします。ジャーナリストや建築家、山村の農民、女優、学者、音楽家だったりただ単に子だくさんの母親だったりします。

10月社会主義大革命はグルジアをはじめ、わが国のすべての女性に、民族的、宗教的圧迫、家庭や職場での辱めからの解放をもたらし、法的にも実際面でも男性と平等の権利を女性に与えました。それが現在でもなお、私たちはしばしば、家庭の中での男女関係の特殊性から生まれるドラマや、家族や子どもと大事な仕事との板ばさみから生じるドラマに直面します。

大部分のソ連の女性は自分の興味を家庭生活の枠の中だけに閉じこめておこうとはしません。社会的仕事に参加したいと願います。その昔は文句なく男性の仕事といわれていた職業についている女性たち、国家的・社会的活動家、第一線で活躍する学者、建築家など、何十、何百人もの女性の名を挙げられます。社会的に有益な仕事へのあこがれを、ただ単にお金を手にしたいからとか、家族の生活を豊かにしたいからという理由だけでは説明できないでしょう。喜びと真の満足をもたらす仕事の創造的性格がはるかに女性を引きつけるのです。でも好きな仕事のために家事や子どものしつけに費やす時間がどんどんけずられていきます。家庭の大切さが損なわれ、時には家庭のごたごたに発展してゆきます。

こういう問題を私は特に、映画『インタビュアー』で取り上げてみようとしました。映画が公開されると、何十通、何百通もの手紙が舞い込みました。私に論争を挑む手紙もありましたし、全面的に私に賛成、というのもありました。"あなたは私のことを映画にしてくれました"――たくさんの手紙にこう書いてありました。ここ日本でも私は、この問題を、芸術という方法で解決しようとする試みを評価する、私と同じ考えの大勢の人に会いました。

私は、社会と家庭の中に女性の公正な場所を探すというテーマに、すべての創作を捧げようと決めました。女性は自分の時間を面白い仕事と愛する夫や子どもにどのように配分したらいいのでしょう？ この問題に対する自分の考えを、今撮影に入った映画『回転』で表現してみたいと思います。

朝日ホールでの実り多い討論に満足したのはもちろんですが、日本に再び来ることが出来てとてもうれしく思います。日本の生活、文化には前から興味がありましたから。初めて日本に来たのは一九八一年、日ソ映画シンポジウムの時です。民族的特徴と先端をゆく現代性の結合、伝統を大切にする日本人の心に私はいつも驚かされ、夢中にさせられてしまいます。

日本映画の発展にも興味をおぼえます。率直に言いますと、限りない敬愛の気持ちが起こるのはただ二人の監督――世界の映画界の巨匠、黒澤 明氏と才能あふれる新藤兼人氏の作品です。新藤さんの傑作『裸の島』はもうずい分昔、モスクワ映画祭で見ました。

今回私は美術を専攻している娘と一緒にやって参りました。日本とその国民、その芸術をいつくしむ私の気持ちを、一部でもいいから娘に伝えたいと思って連れて来たのです。それが成功すれば幸せです。

9月25日、ソ連赤十字・赤新月社からメキシコ赤十字社あてに救援物資が空輸された。



殺到する義援金

――メキシコ地震の被災者救援

ソ連平和基金事務局長 **セルゲイ・ハンジン**

さる9月のメキシコ大地震の報を聞いて、ソ連の人々は驚くとともに被災者に心からの同情を寄せた。最初の地震が起こると、すぐさま被災者に救援の手がさしのべられ、救援物資を積んだソ連国営航空のアエロフロート機がモスクワからメキシコに向かった。メキシコ市への最初の2回の飛行ではやくも40t以上の貨物（医療品、テント、毛布、食糧など）が運ばれた。

救援物資の大半は、ソ連の社会団体（ラテンアメリカ諸国民連帯委員会、ソビエト婦人委員会、ソ連青年団体委員会）がソ連平和基金を使って提供したものである。つまりメキシコ向けの物資の大半は、被災したメキシコ人に必要なあらゆるものを購入するために、一般ソ連人が平和基金に送った金で買い付けられたのだ。

自然災害の被災者に対する物質的援助は、ソ連平和基金の主要任務の一つであり、地球のどこかで起こった災害の被災者援助のために、平和基金に送られてくる義援金が、物質的援助に使われているのである。ソ連には自然災害の被災者を救援するしきたりが古くからあり、たとえば日本の一九二三年の関東大震災のさい、国内戦で物質的に苦しかった若いソビエト・ロシアは、被災者に応分の援助をした。

だからメキシコに大地震が起こると早速、平和基金の住所クロポトキン通り10番に郵便為替や手紙がどっと届いたのである。

ウクライナのスベトロボツク純粋金属工場とガイボロン・ディーゼル機関車修理工場の労働者は全員一致の決定により、休日出勤で稼いだ賃金を、メキシコ地震被災者救済のため平和基金に繰り入れた。



メキシコ市国際空港に到着したソ連救援物資の第1陣

ウラルの航空パイロットたちは1日分の給料を救援金口座に振り込んだ。セルゲイ・オブラスツォフ主宰の中央人形劇場は、休演日に大人向けの公演をやって、入場料全部を被災者救援に贈った。

ソ連中央部の北にあるボログダ市の医師たちは賞与金を、また同市の外来病院の夜警員G・カラワノワは1カ月分の賃金を義援金として差し出した。

原子力砕氷船レーニン号の乗組員は四〇〇ルーブルを献金した。

ボルガ川沿岸のゴーリキー市の子供たちは、薬草採集、古紙集めや穀物などの取り入れで稼いだ一万二〇〇〇ルーブルを払い込んだ。

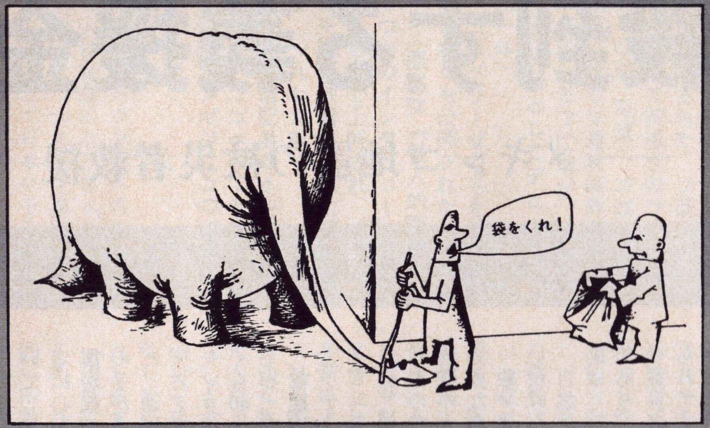
メキシコ救援基金に献金した人々の職業は、漁民、畜産従事者、労働者、音楽家、国際学生隊「友好」やモスクワの福音教会派の人などさまざまだ。

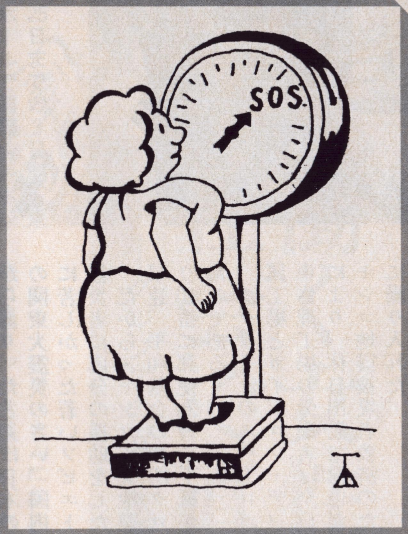
モスクワ州に住むリジア・ザハロワとクラウジア・ガーリナは「親愛な皆さん。年金暮らしの私たち元教師も、メキシコの被災者を救援したいと思います。少ないかもしれませんがお受け取り下さい」と書いてきた。平和基金本部の人たちは、ずっと前から手紙を通じてこの二人の女性の名を知っている。先にもエチオピアの飢餓、カンボジアの洪水、アルジェリアの地震の被災者救援のために献金しており、今度が15回目の献金である。

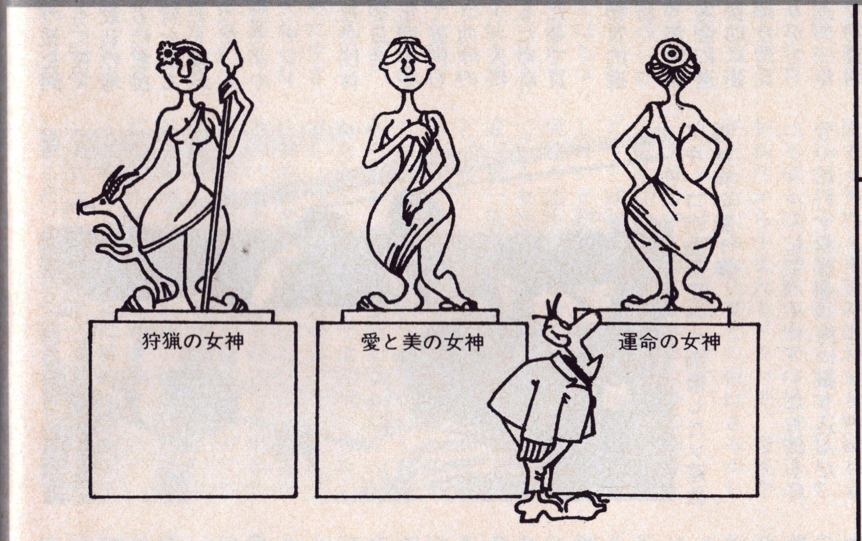
次に五〇〇ルーブルの現金為替を送ってきたレニングラードのタマーラ・ウトキナはこう書いてきた。

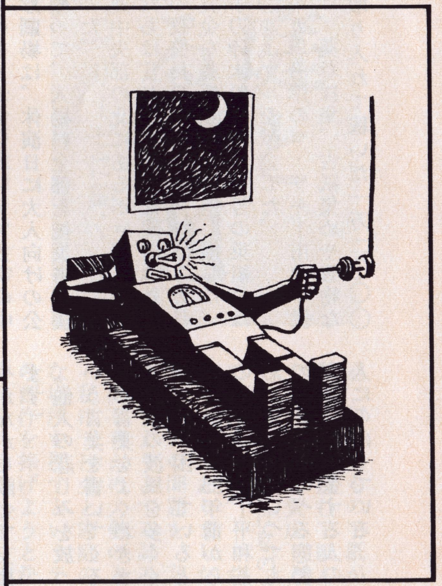
「私たちレニングラードの市民は、メキシコを襲った大地震に心を痛めています。ソ連の者にとって他人の悲しみは放っておけません。第2次世界大戦中私は封鎖下のレニングラードにいて散々な目にあいました。だからメキシコの人がお気の毒でなりません。ささやかながら献金で支援をしたいと思います」

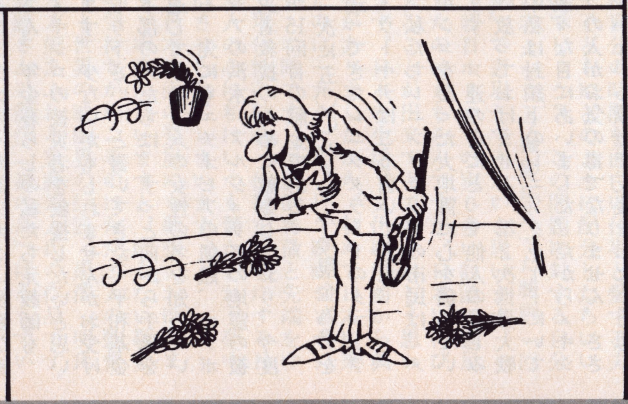
"他人の悲しみを放っておけない"という言葉を書いてくる献金者は多いが、この言葉をよくわきまえて発言するには、世の波風を多くくぐらねばならない。人が困っているときの援助のシンボルとして25年前からソ連に「全国民の貯金箱」――平和基金があるのは偶然ではなく、いつでも困った人に救援の手をさしのべる態勢にある。毎年平和基金へ献金する人の数は九〇〇〇万人にのぼっている。


袋をくれ！


SOS


狩猟の女神
愛と美の女神
運命の女神





今日のソ連邦
一九八五年12月1日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3−9−13・電話03・447・3536）
定価　一五〇円